

60  
別冊  
320



始



50  
320

國立中央圖書館  
新編  
書料教學用  
增刊

版圖訂明

60-320

# 日本鍼灸學教科書

編前

大阪府技師正六位勲五等  
上村行彰先生校閱  
認可關西鍼灸學院  
院長 山本新梧編著

增訂三版

大正  
6. 7. 18  
丙寅

解剖學上編  
生理學上編  
鍼灸學上編

關西鍼灸學院出版部

### 第三版自序

本書ノ世ニ出テヨリ僅カニ三星霜。餘ニシテ早クモ第二版ハ讀者諸氏ノ歡迎シ盡ス所トナリ、今ヤ第三版ヲ發行スルニ至リタルハ著者ノ大ニ光榮トシ、且ツ欣喜ニ堪ヘザル所ナリ。茲ニ於テカ、著者ハ前版ノ猶ホ足ラザル所ヲ補ヒ、字句ノ妥當ナラザルモノハ之ヲ訂シ、更ニ精圖ヲ加ヘ或ハ不鮮明ナルモノハ之ヲ取更ヘ、以テ斯學進步ノ趨勢ニ件フト同時ニ讀者諸氏ノ厚庇ニ酬ユル所アラシクトヲ期セリ。幸ヒニ愛讀ヲ給ヘ。

大正六年初夏

著者識

## 第一版自序

鍼灸治學ハ、泰西醫學ノ東漸ニ伴ヒ一時不運ノ境涯ニ徜徉シ、將  
サニ世人ノ記憶ヲ脱セムトスルニ瀕セシト雖モ、我國古來ノ醫  
術ニシテ汎ク世ニ行ハレタビ隆盛ヲ極メタル鍼灸ノ眞理ハ  
固ヨリ永ク地中ニ蟄伏シ居ルモノニアラサレバ、茲ニ再ビ巍然  
トシテ其頭角ヲ顯ハシ、今ヤ療屬トシテ有効缺クベカラザルモ  
ノタルヲ認識セラレ、亞テ之ヲ研究シ倍々其蘊奧ヲ探ラントス  
ルモノ歲月ト共ニ其多キヲ加フルニ至リ、從テ其研鑽ノ資ニ供  
スベキ著書世ニ行ハル、モノ少ナシトセズ、然レドモ一長一短  
未ダ執テ以テ後進者ノ教科ニ適スベキモノアルヲ見ザレハ、著

者ノ竊カニ遺憾トセシトコロナリ。  
而シテ著者ハ夙ニ志ヲ斯學ノ發達普及ニ注ギ、其教育機關ヲ設  
ケテ後進者ヲ育成スルコト茲ニ歳アリ、此間成書ニ照ラシ經驗  
ニ鑑ミ説ケバ筆シ、述ブレバ叙シタルモノ累積シテ遂ニ一編ノ  
書冊ヲ成スニ至レリ、關西鍼灸學院ノ教科書ハ即チ之ニ屬ス、想  
フニ斯學ハ研究其歩ヲ進ムルニ從ヒ、益々深遠ニシテ廣汎ナル  
ヲ覺ユルノミ、而カモ著者ガ自叙シタル教科書ニ據リ養成シタ  
ル後進者ノ成績ニ徵スレバ、結果良好ニシテ稍ヤ著者ノ理想ニ  
近カラントスルノ曙光ヲ認メシヲ以テ、他日之ヲ補正シテ公刊  
セントスルノ意アリシモ、如何セン身ハ日常業務ノ繁劇ニ苦メ  
ラレ素志ヲ貫クノ閑ヲ得ザルコト實ニ三春秋ニ涉リ、在萬今日

ニ至リシガ時運ノ要求ハ徒ラニ上梓ノ遷延ヲ容サズ止ムナク  
業務ノ閑餘ヲ以テ之ガ編纂補修ニ暇メ遂ニ公刊スルノ運ビニ  
至レリ而シテ著者ヲシテ本書ヲ公刊スルノ決心ト勇氣ヲ鼓舞  
セシメタル動機ハ蓋シ辱知上村行彰先生ノ指導ニ負フ處鮮少  
ナラズ是レ先生ニ對シ度デ感謝ノ意ヲ表スル處ナリ。  
願フニ著者ハ淺學非才素ヨリ著書ノ器ニアラズ此故ニ書中記  
スル處敢テ眞理ノ全班ヲ盡シタリトハ信ゼズ異日大方ノ示教  
ヲ俟テ更ニ訂正ヲ加フルコトアルベシト雖モ幸ニ鍼灸治學ヲ  
研究セムト欲スルノ士ニ對シ庶幾ハ多少ノ參考ニ資スル處ア  
ラバ管ニ著者ノ本懷ノミニアラザルナリ。

明治四十五年五月十五日

山本新梧識

### 第二版自序

本書第一版ハ世ノ要求非常ニ切ナリシカバ急遽版ニ上セシ爲  
メ著者ノ意ニ充タザルモノ甚ダ多カリシガ今ヤ茲ニ版ヲ改ム  
ルノ機運ニ遭遇シタルヲ以テ新ニ數項ヲ加ヘ全編ニ亘リテ遺  
漏ヲ補ヒ挿圖ヲ増シ殆ンド改著ノ如キ増補訂正ヲ爲シ且ツ挿  
圖ノ不鮮明ナルモノハ總テ鮮明ナルモノト取更ヘタリ然レド  
モ之ヲ以テ未ダ完璧トナスモノニ非ラズ版ヲ重ヌルニ從ヒ斯  
學ノ進歩ニ隨伴シテ倍々改善ヲ加ヘ遺漏ナキノ域ニ達セシム  
ルヲ期スベシ。

大正四年衆議院議員總選舉ノ日

著者誌

## 凡 例

- 一、本書之ヲ分テ三編トシ、解剖學生理學鍼灸學ノ三科ヲ前編及ビ中編ニ分載シ、經穴學病理治療學ノ二科ヲ後編ニ載ス。
- 二、本書ハ專ラ教科書ニ充ツルタメニ編述セルモノナルヲ以テ解剖生理二科ノ如キハ可及的詳密ナランコトヲ欲シタリ、世或ハ鍼灸術ニ於テカ、ル深遠ナル智識ヲ要セズト曰ハン。然レドモ鍼灸術タル素ヨリ疾病治療ノ一技術タルヲ以テ之ガ適切ナル治方ヲ行フニハ人體ノ基礎タル解剖生理二科ニ通ジ、以テ之ヲ應用スルニ非ズンバヨク之ガ目的ヲ達スルコト能ハズ。是レ吾人ガ本科ヲ殊ニ詳述セシ所以ナリ。
- 三、然リト雖モ解剖生理ノ二科ハ之ヲ教授スルニ當リ必ズシモ全編ヲ授ケントスルモノニアラズ。先ヅ其要ヲ摘ミテ之ヲ授ケ、大綱ニ通ジタル後チ必要ニ應ジテ之ヲ補充スルノ方針ニ據ルヲ可トス。殊ニ解剖學ハ之ヲ系統的ニ叙述セルヲ以

テ局部ノ應用ニハ更ニ局處的ニ解説センコトヲ要ス。

四、本書ハ教科書ノ傍ラ鍼灸術者研究上ノ參考ニ資スルノ目的ニ出ヅルヲ以テ挿圖ヲ多クシ電メテ理解シ易カラシムコトヲ期セリ。

五、經穴ノ如キ古來傳フルトコロハ其數徒ラニ多クシテ悉ク之ヲ記憶スルモ其効甚ダ鮮少シ故ニ本書ニ於テハ專ラ其必要ト認ムル經穴ノミヲ擧ゲ且ツ之ニ解剖的部位ヲ附記シテ記憶並ニ應用ニ便セリ。

六、鍼灸術ノ勃興ト共ニ之ヲ修メントスルモノ多キニ至リ從テ遠ク師ニ就ク能ハザルモノ、タメニ特ニ通信教授ノ便ニ當ツ然レトモ月々小冊子發行ハ讀者ニ却テ不便不經濟ニシテ且ツ紛失等ヲ慮リ別ニ細則ヲ設ケ茲ニ本書ヲ編製セリ。

### 鍼灸科沿革小史

抑も鍼科の治術的應用として遠く太古より行はれたるは「本草綱目」に古者以石爲鍼季世以鐵代石云々ごあり又我國に於ても允恭天皇紀に破身治病云々の記事あるを以て知るべし。而して所謂鍼術として認むべきは人皇二十九代欽明天皇二十三年支那より輸入されたるもの其主にして同年秋八月吳の人知聰なる者薬書明堂圖等百六十卷を持して來朝す是れ外國醫書殊に鍼科典籍の我國に入るの始めなり以來此鍼術を考究する者多く其後人皇四十二代文武天皇大寶年中に定められし大寶令にも宮内省典藥寮の醫師醫博士醫士醫生に對し鍼師鍼博士鍼生等を置き鍼博士は鍼生を教育するここ



を掌ごり、鍼生は鍼を學ぶごころを掌ごるごありて、鍼科の専門  
茲に始めて基礎を置かれたり。醫心方の著者たる丹波康賴氏  
も亦た鍼博士にして、醫心方の第一卷に醫學の大體を論じ、其  
第二卷に鍼灸の諸法を擧げ且つ用ゆる處の鍼に九種を區別  
し、又病理的に人身體の刺點即ち孔穴を明かにせり。灸法も亦  
た支那にありては古代より行はれたるものにして、鍼科と共  
に我が國に盛ごなり大寶令にも鍼灸の法ごして鍼科の中に  
入れ、孔穴主治畧ほ同一に行はれたり。  
爾後鍼灸術は旺に發展し、平安朝時代にありては醫道の要部  
を占め、鍼博士は醫博士と相并びて其術の秀でたる人之に任  
ぜられしも、鎌倉時代より室町時代に至りては、遂次醫官の廢  
類ご共に鍼博士及び鍼師は名實共に消失し、鍼科に名門を出

す能はず。之を以ても當時鍼家の振はざりしを察すべし。但し  
鍼灸の術は依然治方の一部ごして却つて内外醫家に應用さ  
れしは、諸家の著書に鍼治法の載せざるなきを以ても知らる  
べし。斯くして織田豊臣氏時代に及べり。此期に於て曲直瀬道  
三氏起りて醫學を中興するに當り、鍼灸集要の一書を著して  
鍼灸治法を唱道せり。但し丹波氏の如く、鍼科は醫の本道なり  
ご認めず、治病上の一部ごして記載せられたるに過ぎず。又此  
期に應用せられたるは鈹鍼と毫鍼にして、甲は主ごして外科  
に屬し、乙は専ら鍼科用ごせられ、稍や鍼灸科の復興せられた  
るに従ひ、漸次鍼灸科専門の名家を出すに至れり。即ち入江賴  
明、吉田意休、匹地喜庵の諸氏及び京都に御菌意齊氏起り、金銀  
鍼を研究し、小槌の扁平なるものを以て打鍼的に刺鍼する等

大に鍼術を以て名を成せり。  
次で徳川氏初世に入りては、元和元年綱吉將軍令して鍼術の振興を圖られ、杉山和一氏起つて鍼治講習所を設け諸生を教授し大に努むる處ありし結果、門人三島安一氏に至り更に事業を擴張して講堂を諸州に増設し、病原的に經絡孔穴を究明し鍼の運用を論じ、旺んに門弟を養ひ、所謂杉山流鍼科の發展を擧げたり。而して其當時は捻鍼打鍼管鍼の三法を用ひたるが如く、其捻鍼は支那傳來の術にして毫鍼を用ひ、打鍼は御蔭意齊氏の創始にして主として腹部又は孔穴を論ぜず、刺鍼せり。又管鍼は杉山和一氏の創始にして現今使用するもの即ち是れなり。故に管鍼打鍼は日本獨特の發明にして支那より傳來せしものにあらずるなり。昔日支那より傳來せし支那流の

鍼治法とは其趣きを異にし、我が國醫家の研究に因りて鍼術は著しく進歩改發するに至りしは明けし。斯くの如くして徳川氏中世に入り、益々鍼科の復興を計らんとして攝津の人菅沼周圭氏の如き「鍼灸則」、「鍼灸摘要」、「鍼灸治驗」等の書を著はし、盛んに鍼科の改發を唱道せり。當時杉山氏吉田氏の各流の外、京都の御蔭中渠氏あり、父祖の傳を受け打鍼を専門とせり。  
次で徳川季世に及んで鍼灸科を以て専門とし、後侍醫法眼に任せられたる甲府の人石阪宗哲氏出で、自家獨創の見を以て「斯術を研究し」、「骨經」、「內景備覽」を著はして人體解剖を論じ、更に「鍼灸説約」、「鍼灸知要」等の書を著はして刺鍼の方法を説き、常に革新を唱へたれば、鍼科の面目大に一新せられ、旺んに斯術の有効なるを唱道する等、斯術の復古漸やく色めくに際し、維新

の革命となり、時の將軍政權を奉還して、大政は帝室に歸し、諸般の制度皆な其範を西洋に採るに至り、西歐の文物盛に輸入せられ、爲めに我が醫界の制度方針も一大變遷を受け、三千年來の支那文化に伴ふ醫方は明治初年に於て西洋醫學の勢力に拮抗する能はず。鍼灸科も皇漢醫道と共に逐次衰頽して、明治十八年前後には殆んど識者の認むるものなく、遂に下賤者又は盲人の業となり、漸次衰頽するに至れり。是れ恐らくは鍼灸科沿革史上最も萎靡せし時代と見て可ならん乎。

然りと雖も、勢ひ極まりて轉ずるは自然の理にして、嘗て西歐技術の巧妙に心酔し、本邦固有の文物を棄て、亦顧みざりしものも再び之を研究採擇するの念を生ずるに至り、殊に鍼灸術の如き、永く我國固有の妙技として尊誦せられしものも二

三盲啞學校に於て之を養成するの他、何等活動を見ることなかりしが、醫學の進運と共に漸次指を此方面に染むるものを生じ、故大久保適齋氏の如き之を學理的に研究し、又醫學博士三浦謹之助氏の如き夙に之を研鑽して、廣く歐洲に報ずるに至り、或は原田重雄、樫田十次郎の兩醫學士が其研究成績の發表を見、其他幾多斯道に關する著書出づるに至りて、一般士民も亦之を要求するもの相踵ぎ、從つて鍼灸術者は徒らに舊法を墨守して時勢の進歩と相反するの非なるを悟り、學理を應用して之を實地に施すこと斯道進歩に益あるを察し、茲に再び蹶起するの時、機到來して、諸所に之が養成所を設立し、數多新進の斯業者を出すに至りたるを以て、明治三十五年に大阪府を始め、各府縣に於ても、各々之が免許に一定の制

度を設けて試験法を規定し新學問の素養あるものにのみ之を許可するの方針を執りたる結果は斯業者向上發展の基礎を成し或は組合を設けて之を誘導し或は學人會を設けて之が研究に従事するの機運に際會せしが遂に明治四十四年に至り内務省は永く懸案たりし鍼灸術營業に關する取締規則を發布し兼て試験法を制定し同四十五年一月より實施せられたり殊に該試験委員には民間の専門家を以てし從來區々なりしものも茲に始めて全國統一の基礎を確立するに至りたり爾來六星霜幸に稍や發展向上の曙光を窺ふの機運に際會するに至れり。

### 解剖學目次

#### 第一編 解剖學

序論 ..... 一

第一 系統解剖學 ..... 二

第二 局處解剖學 ..... 二

第三 組織學 ..... 二

第四 胎生學 ..... 三

第五 比較解剖學 ..... 三

細胞 ..... 三

組織 ..... 三

第一 上皮組織 ..... 五

第二 筋組織 ..... 五

第三 神經組織 ..... 六

第四 結締質 ..... 七

(一) 結締組織 ..... 七

(二) 彈力組織 ..... 八

(三) 脂肪組織 ..... 八

#### 第一章 骨學

(四) 色素組織 ..... 八

(五) 內皮組織 ..... 八

(六) 軟骨組織 ..... 九

(七) 骨組織 ..... 九

第一章 骨學總論 ..... 一

第一 骨髓 ..... 二

第二 骨膜 ..... 三

第三 骨の主成分 ..... 三

第四 骨の發生及び長育 ..... 三

第五 軟骨 ..... 四

第六 骨の形狀 ..... 五

第七 骨數及び骨格等 ..... 五

第二章 骨學各論 ..... 七

第一 軀幹骨 ..... 七

甲 脊椎骨 ..... 七

イ 眞椎 ..... 七

(一) 屈伸椎……………一六

(二) 廻旋椎……………二〇

    第一頸椎(載域)……………二〇

    第二頸椎(樞軸)……………二三

□ 假椎……………二三

    (一) 薦骨……………二三

    (二) 尾閶骨……………二五

乙 胸骨……………二六

丙 肋骨……………二七

    肋軟骨……………二九

    胸廓……………三〇

丁 舌骨……………三三

戊 頭蓋骨……………三三

イ 腦頭蓋……………三三

    (一) 後頭骨……………三三

    (二) 蝴蝶骨或は楔狀骨……………三七

    (三) 篩骨……………四〇

    (四) 前頭骨……………四一

(五) 顳顬骨……………四四

(六) 顳頂骨……………四八

□ 顔面頭蓋……………五〇

    (一) 上顎骨……………五一

    (二) 口蓋骨……………五四

    (三) 淚骨……………五五

    (四) 下甲介骨……………五七

    (五) 鼻骨……………五七

    (六) 額骨……………五八

    (七) 鋤骨……………六〇

    (八) 下顎骨……………六〇

    腦頭蓋の縫合及び百會……………六三

    頭蓋頂と頭蓋底との區別……………六五

    顔面頭蓋の腔窩……………六七

第二 四肢骨……………六九

甲 上肢骨……………六九

    イ 上肢帶……………六九

        (一) 鎖骨……………六九

(三) 肩胛骨……………七一

□ 固有上肢骨……………七三

    (一) 上膊骨……………七三

    (二) 前膊骨……………七五

    (三) 尺骨……………七六

        1 桡骨……………七六

        2 橈骨……………七七

        3 手骨……………七六

    (三) 腕骨……………七九

        1 腕骨……………七九

        2 掌骨……………七九

        3 指骨……………八一

乙 下肢骨……………八一

    イ 下肢帶……………八一

        (一) 無名骨……………八二

        1 腸骨……………八二

        2 坐骨……………八四

        3 耻骨……………八五

        骨盤……………八六

        骨盤……………八六

        固有下肢骨……………八七

第二 靱帶學……………八七

甲 不動關節……………八七

    (一) 縫合……………八七

    (二) 下腿骨……………九〇

    (三) 膝蓋骨……………九〇

        1 脛骨……………九〇

        2 腓骨……………九二

        3 腓骨……………九二

    (三) 足骨……………九三

        1 跗骨……………九三

        2 跖骨……………九四

        3 趾骨……………九五

乙 可動關節……………九七

    (一) 全動關節……………九七

    (二) 鞍狀關節……………九八

    (三) 球狀關節……………九八

    (四) 蝶番關節……………九八

(五) 車軸關節……………100  
 (六) 叢合關節……………100  
 靱帶……………100

(一) 囊狀靱帶……………101  
 (二) 副靱帶……………101  
 (三) 固有靱帶……………101

**第三章 筋學**  
**第一章 筋學總論**……………103

隨意筋……………103  
 不隨意筋……………104  
 筋の起始・停止及び形狀……………104  
 筋膜……………105  
 筋と神經との關係……………106

**第二章 筋學各論**……………107

**第一 軀幹筋**……………107

甲 背筋……………107  
 一 淺層諸筋……………107  
 (一) 僧帽筋……………108

(二) 潤背筋……………109  
 (三) 菱形筋……………109  
 (四) 後上鋸筋……………109  
 (五) 後下鋸筋……………110  
 (六) 夾板筋……………110  
 深層諸筋……………111  
 長背筋……………111  
 (一) 薦骨脊柱筋……………111  
 (二) 棘筋……………111  
 (三) 橫棘筋……………111  
 短背筋……………113  
 ○屈伸椎に屬するもの  
 (一) 橫突起間筋……………114  
 (二) 棘間筋……………114  
 (三) 肋骨舉筋……………115  
 ○後頭骨及び廻旋椎に屬するもの  
 (一) 後大直頭筋……………115  
 (二) 後小直頭筋……………116  
 (三) 下斜頭筋……………116  
 (四) 上斜頭筋……………116

(五) 側直頭筋……………117  
 腰背筋膜……………118

**乙 腹筋**……………118

一 縱筋……………118  
 (一) 直腹筋……………119  
 (二) 三稜腹筋……………119  
 橫筋……………120

(一) 外斜腹筋……………120  
 (二) 內斜腹筋……………120  
 (三) 橫腹筋……………121  
 プーバルト氏靱帶……………121  
 股輪……………121  
 鼠蹊管……………121  
 橫隔膜……………121

**丙 胸筋**……………124

一 淺層……………124  
 (一) 大胸筋……………125  
 (二) 小胸筋……………125

(三) 鎖骨下筋……………126  
 (四) 前大鋸筋……………126  
 深層……………126  
 (一) 内及び外肋間筋……………127  
 (二) 前及び後橫胸筋……………128

**丁 頸筋**……………128

一 淺層長筋……………129  
 (一) 潤頭筋……………129  
 (二) 胸鎖乳嘴筋……………129  
 (三) 二腹頸筋……………130  
 淺層短筋(舌骨上筋)……………131  
 (一) 莖狀舌骨筋……………131  
 (二) 顎舌骨筋……………131  
 (三) 頤舌骨筋……………131  
 淺層短筋(舌骨下筋)……………132  
 (一) 胸骨舌骨筋……………132  
 (二) 胸骨甲狀筋……………132  
 (三) 甲狀舌骨筋……………133

目次

(四) 肩胛舌骨筋 ..... 一三三

二 深層 ..... 一三四

外列

(一) 前斜角筋 ..... 一三四

(二) 中斜角筋 ..... 一三五

(三) 後斜角筋 ..... 一三五

(四) 肩隅舉筋 ..... 一三五

內列

(一) 長頸筋 ..... 一三五

(二) 前大直頭筋 ..... 一三五

(三) 前小直頭筋 ..... 一三五

戊 頭蓋筋 ..... 一三七

1 頭蓋頂筋 ..... 一三七

(一) 前頭筋 ..... 一三七

(二) 後頭筋 ..... 一三八

(三) 耳前筋 ..... 一三八

(四) 耳後筋 ..... 一三八

(五) 耳上筋 ..... 一三八

帽狀腱膜 ..... 一三八

目次

口 顏面筋 ..... 一三九

眼輪筋 ..... 一三九

(一) 眼輪匠筋 ..... 一四〇

口裂筋 ..... 一四〇

第一層

(一) 額骨筋 ..... 一四〇

(二) 笑筋 ..... 一四一

(三) 三角頤筋 ..... 一四一

(四) 方形上唇筋 ..... 一四二

第二層

(一) 犬齒筋 ..... 一四二

(二) 方形頤筋 ..... 一四三

第三層

(一) 頰筋 ..... 一四三

(二) 頤筋 ..... 一四三

口輪匠筋 ..... 一四四

鼻筋 ..... 一四四

(一) 鼻翼下擊筋 ..... 一四四

(二) 鼻壓縮筋 ..... 一四五

目次

咀嚼筋 ..... 一四四

(一) 顳顬筋 ..... 一四四

(二) 咬筋 ..... 一四四

(三) 外翼狀筋 ..... 一四四

(四) 內翼狀筋 ..... 一四四

顳顬筋膜 ..... 一四四

耳下腺咬筋膜 ..... 一四七

第二 四肢筋 ..... 一四八

甲 上肢筋 ..... 一四八

1 肩胛筋 ..... 一四八

(一) 三角筋 ..... 一四八

(二) 棘上筋 ..... 一四九

(三) 棘下筋 ..... 一四九

(四) 小圓筋 ..... 一四九

(五) 大圓筋 ..... 一五〇

(六) 肩胛下筋 ..... 一五〇

口 上膊筋 ..... 一五一

前側

(一) 二頭膊筋 ..... 一五一

目次

後側

(一) 烏隆膊筋 ..... 一五一

(二) 內膊筋 ..... 一五二

(一) 三頭膊筋 ..... 一五三

(二) 小肘筋 ..... 一五三

八 前膊筋 ..... 一五四

前側淺層

(一) 廻前圓筋 ..... 一五四

(二) 內橈骨筋 ..... 一五四

(三) 內尺骨筋 ..... 一五五

(四) 長掌筋 ..... 一五五

(五) 淺屈指筋 ..... 一五六

前側深層

(一) 深屈指筋 ..... 一五七

(二) 長屈指筋 ..... 一五七

(三) 廻前方筋 ..... 一五八

橈骨側

(一) 膊橈骨筋 ..... 一五八

(二) 長外橈骨筋 ..... 一五九

後側淺層	(三) 短外橈骨筋	.....	一五九
	(一) 總指伸筋	.....	一六〇
	(二) 固有小指伸筋	.....	一六〇
	(三) 外尺骨筋	.....	一六一
後側深層	(一) 廻後筋	.....	一六一
	(二) 長外轉拇筋	.....	一六二
	(三) 短伸拇筋	.....	一六二
	(四) 長伸拇筋	.....	一六三
	(五) 固有示指伸筋	.....	一六三
二 手筋	.....	一六四	
拇指側	(一) 短外轉拇筋	.....	一六五
	(二) 短屈拇筋	.....	一六五
	(三) 內轉拇筋	.....	一六五
	(四) 對小指拇筋	.....	一六五
小指側	(一) 短掌筋	.....	一六五
中央部	(一) 外轉小指筋	.....	一六五
	(二) 小指屈筋	.....	一六五
	(四) 對拇小指筋	.....	一六五
乙 下肢筋	(一) 蟲樣筋	.....	一六五
	(二) 骨間筋	.....	一六五
1 臑部筋	(一) 方形腰筋	.....	一六六
	(二) 膈腰筋	.....	一六七
外臑部筋	(一) 大臀筋	.....	一六八
	(二) 中臀筋	.....	一六九
	(三) 小臀筋	.....	一六九
	(四) 梨子狀筋	.....	一六九
	(五) 內鎖筋	.....	一七一
	(六) 外鎖筋	.....	一七一
	(七) 方形股筋	.....	一七一

口 大腿筋	.....	一七二	
前側淺層	(一) 張股鞘筋	.....	一七二
	(二) 縫匠筋	.....	一七三
前側深層	(一) 四頭股筋	.....	一七三
後側	(一) 二頭股筋	.....	一七五
	(二) 半腱樣筋	.....	一七五
	(三) 半膜樣筋	.....	一七六
內側	(一) 耻骨筋	.....	一七七
	(二) 長內轉股筋	.....	一七七
	(三) 薄股筋	.....	一七七
	(四) 短內轉股筋	.....	一七八
	(五) 大內轉股筋	.....	一七八
ハ 下腿筋	.....	一七九	
腓骨側	(一) 前脛骨筋	.....	一八〇
	(二) 長伸跖筋	.....	一八〇
	(三) 長總趾伸筋	.....	一八一
後側	(一) 長腓骨筋	.....	一八一
	(二) 短腓骨筋	.....	一八一
	(一) 腓腸筋	.....	一八三
	(二) 比目魚筋	.....	一八三
	(三) 長足蹠筋	.....	一八四
	(四) 膝膈筋	.....	一八四
	(五) 長總趾屈筋	.....	一八五
	(六) 長屈跖筋	.....	一八五
	(七) 後脛骨筋	.....	一八六
二 足筋	.....	一八六	
足背筋	(一) 短總趾伸筋	.....	一八七
足蹠筋	.....	一八七	
○ 跖趾側	.....	一八七	



(一) 外轉跗筋	一八八
(二) 短屈跗筋	一八八
(三) 內轉跗筋	一八八
○小趾側	
(一) 外轉小趾筋	一八八
(二) 小趾屈筋	一八八
(三) 對跗小趾筋	一八八
○中部	
(一) 短總趾屈筋	一八九
(二) 方形足蹠筋	一八九
(三) 蟲樣筋	一八九
(四) 骨間筋	一八九
筋に由つて構成せる凹窩	一九〇
(一) 顎下三角部	一九〇
(二) 上顎三角部	一九〇
(三) 下顎三角部	一九〇
(四) 鎖骨上窩	一九一
(五) 胸骨上窩	一九一
(六) 大胸三角筋窩	一九一

(七) 腋窩(又モーレンハイム氏窩)	一九一
(八) 肘窩	一九一
(九) 膈趾窩(又スカルバ氏三角或は鼠蹊下窩)	一九一
(十) 膝膈窩	一九一

解剖學上編目次 (終)

生理學目次

第二編 生理學

緒論	一
生理學各論	三
第一章 血液生理	四
第一 血液	四
甲 血球	五
(一) 赤血球	五
(二) 白血球	七
乙 血漿	九
第二 血液凝固	一〇
第三 血液の量	一一
第四 動脈血及び靜脈血	一二
第五 血液の瓦斯	一三
第二章 血液循環生理	一四
第一 心運動	一六
第二 心尖搏動	一九

第三章 心音

第三 心音	二〇
第四 心臟の神經機能	二四
心臟の制止神經	二五
心臟の鼓舞神經	二五
第五 血液運行の原因	二六
血液の測定	二八
第六 血液の呼吸及び身體運動による變化	三〇
血液流通の速力	三一
第七 脈搏	三一
脈性及び脈數	三一
脈搏の感觸	三一
第九 血液の一循環時間	三五
第十 血管の神經機能	三七
血管收縮神經	三七
血管擴張神經	三九
第三章 呼吸生理	四〇
第一 呼吸の目的及び區別	四〇
甲 外呼吸	四一
(一) 肺臟呼吸の化學的作用	四一

(二) 皮膚呼吸……………四  
 乙 内呼吸……………四  
 第二 呼吸の原理……………四  
 第三 異類瓦斯的呼吸……………四  
 第四 呼吸運動……………四  
 (一) 胸廓の一横一縮……………五  
 (二) 呼吸気交換の分量……………五  
 (三) 肺活量……………五  
 (四) 呼吸の法式……………五  
 (五) 呼吸の員數……………五  
 (六) 呼吸音……………五  
 第五 呼吸時に於ける鼻腔の機能……………五  
 第六 窒息……………五  
 第七 呼吸運動の變態……………五  
 第八 呼吸の神經機能……………五  
 (一) 直接興奮……………六  
 (二) 間接興奮……………六  
 第四章 淋巴生理……………六  
 淋巴液……………六  
 乳糜液并に其形成……………六

淋巴腺……………六  
 第五章 分泌生理……………六  
 分泌作用……………六  
 分泌機能……………六  
 第一 唾 液……………六  
 (一) 唾液腺の造構……………七  
 (二) 唾液の化學的成分……………七  
 (三) 唾液の消化作用……………七  
 (四) 唾液の分泌に神經機能の感應……………七  
 第二 胃 液……………七  
 (一) 鹽 酸……………七  
 (二) 「ムアシン」……………七  
 (三) 凝固醱酵素……………七  
 (四) 無機鹽……………七  
 (五) 胃腺の造構……………七  
 (六) 胃液の分泌に神經機能の感應……………七  
 第三 胰 液……………七  
 (一) 胰「ヤキスターゼ」及び「マルターゼ」……………七  
 (二) 「トリアシン」及び凝固醱酵素……………七

(八) 「ステアアシン」……………七  
 藤液の分泌作用……………七  
 第四 膽 汁……………七  
 (一) 二種の膽汁酸……………七  
 (二) 膽汁色素……………七  
 膽汁の分泌……………七  
 膽汁の排泄……………七  
 第五 腸 液……………八  
 第六 尿……………八  
 尿の集成……………八  
 (一) 腎中の尿分泌管爲……………八  
 (二) 尿中に分泌する物質……………八  
 (三) 腎血管に於ける神經の作用……………八  
 (四) 腎臓より尿の排泄……………八  
 第七 汗……………八  
 汗の分泌に神經機能の感應……………八  
 發汗神經の經路……………八  
 皮膚の作用……………八  
 皮脂……………八  
 釘 癩……………八

第九 涙 液……………八  
 涙液の分泌に神經機能の感應……………八  
 第十 乳 汁……………九  
 乳汁の分泌……………九  
 第十一 精 液……………九  
 精 蟲……………九  
 第六章 消化生理……………九  
 第一 飲食物……………九  
 甲 榮養物……………九  
 (一) 無機性榮養物質……………九  
 (二) 有機性榮養物質……………九  
 乙 嗜好品……………九  
 第二 榮養物の消化……………九  
 甲 口腔の消化……………九  
 (一) 口腔の理學的消化……………九  
 (二) 口腔の化學的消化……………九  
 (三) 嚥下運動……………九  
 乙 胃の消化……………九  
 (一) 胃の理學的消化……………九  
 (二) 胃の運動を主宰する神經……………九

胃の異常運動……………一〇四

(二) 胃の化学的消化……………一〇四

(イ) 蛋白質に致す作用……………一〇五

(ロ) 蔗糖に致す作用……………一〇七

(ハ) 乳汁に致す作用……………一〇七

(三) 胃中に於ける食物滞留時間……………一〇七

丙 腸の消化……………一〇八

(一) 理學的消化……………一〇八

(二) 化学的消化……………一〇九

(イ) 胰液……………一一〇

(ロ) 胆汁……………一一〇

(ハ) 腸液……………一一一

(三) 腸中に於ける食物滞留時間……………一一三

第三 腸中の醗酵及び腐敗分解……………一一三

第四 大腸の作用及び糞便の形成……………一一三

脱糞機能……………一一五

第七章 吸収及び同化生理……………一二六

第一 吸収及び同化……………一二六

吸収の原理……………一二七

第二 胃及び小腸内に於ける吸収……………一二七

小腸及び大腸内に於ける吸収部……………一二八

(一) 蛋白質の吸収及び同化……………一二九

(二) 脂肪の吸収及び同化……………一二〇

(三) 含水炭素の吸収及び同化……………一二一

第三 新陳代謝の現象及び饑餓……………一二三

(一) 攝收不全……………一二三

(二) 攝收過剰……………一二六

(三) 働作及び體温放散の影響……………一二六

(四) 體質代謝……………一二七

附 特殊の臓器中に於て内分泌に由る血液の變化……………一二八

(一) 肝臓……………一二九

(二) 腎臓……………一二九

(三) 脾臓……………一三〇

(四) 副腎……………一三〇

(五) 甲状腺……………一三〇

(六) 胸腺……………一三三

(七) 睪腺……………一三三

(八) 睪丸……………一三三

(九) 卵巣……………一三三

(十) 大脳下垂體……………一三三

生理學上編目次 (終)

鍼灸學目次

第三編 鍼灸學

總論……………一

第一章 鍼術……………三

第一 鍼の材料……………三

第二 鍼の種類……………四

第三 鍼の區別及び名稱……………六

第四 鍼科の流派と鍼の構造……………八

第五 刺鍼の法式……………一三

(一) 燃鍼……………一五

(二) 打鍼……………一六

(三) 管鍼……………一七

第六 鍼治の目的……………一三

(一) 制止法……………一三

(二) 興奮法……………一四

(三) 誘導法……………一四

第七 鍼術の手法……………一七

(一) 單刺術……………一六

(二) 旋燃術……………一六

(三) 雀啄術……………一六

(四) 置鍼術……………一六

(五) 間歇術……………一六

(六) 振震術……………一九

(七) 廻旋術……………一九

第八 刺鍼に於ける刺戟の強弱……………二〇

刺戟刺戟の度……………二〇

通常の刺痛……………二一

第九 鍼の細大長短……………二五

術者・被術者及び鍼器消毒の目的……………二七

傳染病の種類……………二八

鍼治家と化膿性疾患……………三九

第十一 消毒の方法……………四〇

甲 理學的消毒法……………四一

乙 化学的消毒法……………四一

第十二 消毒薬の調製……………四六

(一) 五十倍石炭酸水……………四七

(二) 五十倍リゾール液……………四八

(三) 百倍「フォルマリン」水…………… 四〇  
 (四) 通常「アルコール」…………… 四〇  
 第十三 施鍼時に於ける術者の注意…………… 四〇

鍼灸學上編目次 (終)

本日 鍼灸學教科書 前編

(增訂第三版)

大阪府技術師防疫官衛生課長  
大阪府鍼灸術試驗委員 正六位勳五等

上村行彰先生校閱

大阪府奈良縣和歌山縣各鍼灸術試驗委員  
大阪組合鍼灸會々々長關西鍼灸學院々々長

山本新梧編著

第一編 解剖學 序論

解剖學は之を大別して動物解剖學及び植物解剖學とす。而して醫學並に鍼灸術に必要なは動物解剖學中の人體解剖學にして人體解剖學は更に亦た系統解剖學・局所解剖學・組織學・胎生學及び比較解剖學に區別す。

第一系統解剖學(或は解剖各論)は身體を構成する體部の類別即ち骨・靱帶・筋肉・内臓・感覺器・脈管・神經等の系統を逐ふて之を論ずるものなり。

第二局所解剖學は系統解剖學中特に局所に就て臓器の位置の關係を論ずるものにして、殊に諸般の外科的・手術上缺くべからざるものなり。故に亦外科的解剖學とも云ふ。

第三組織學(或は解剖總論)は顯微鏡を用ひて諸臓器を構造する組織及び之を構成する成形原素を究明し以て之を論ずるものなり。故に亦顯微鏡的解剖學とも云ふ。

例令ば筋系統・心肺の臓器は之を系統解剖學に於て説き筋組織・脂肪組織及び之等の組織を形成する細胞は之を組織學に於て論ずるが如し。

第四胎生學 身體は其初め唯一の卵子なれども時期の移るに伴ふて絶へず變化し種々の状態を経歴し來るものにして即ち胎生學は此發育の歴史なり。

第五比較解剖學は人體及び種々の動物の構造を比較して其異同を觀察し以て其理を推究するものなり。

以上の諸學は各一科として講究すべきものなるも、今茲に講ぜんとするものは即ち系統解剖學なり而して之を學ぶに當りては豫め人體組織の如何なるものなるやを知るの必要あるが故に系統解剖學に入るに先ちて組織學の大要を説かんす。

### 細胞

細胞は顯微鏡下にあらざれば見得べからざる軟弱么微の微小體



にして、其形も圓く、内容は原形質（プロトプラ  
 スマ）顆粒及び核を有し、成育すれば更に周圍  
 に膜を有す。又細胞は獨立の生活機能を營み  
 得るが故に運動、蕃殖、生育、物質交換等の機能  
 を具有す。即ち運動は種々の突起を顯はし之に因つて徐々に其形  
 状及び位置を變化し、其状態恰かも「アメーバ（最下等の小動物を云ふ）の運動する



に似たるを以て之を「アメーバ」様  
 運動と云へり。蕃殖は核の複雑な  
 る固有の機能に由つて之を營み  
 而して其生育變化も自から差異  
 を生じて圓形、多角形、柱状、扁平、星  
 状、紡錘状等の形態を有するに至

### 組織

る。又物質交換は榮養物（固体あり、又液体あり）を外より體內に取り  
 其榮養分を吸收し、後ち之を體外に排泄するの作用を謂ふ。

組織とは同種の細胞固有の原素相集合して形成するものゝ謂ひ  
 にして、之を分ちて上皮組織、筋組織、神經組織及び結  
 締質とす。



第一 上皮組織 は身體の外面を被ふて外界と通ず  
 る諸腔・諸管（口腔・鼻腔・氣管等）の内面を被包するもの  
 して、上皮細胞の形状に従ひ扁平上皮、柱状上皮、毳毛  
 上皮等に區別す。  
 第二 筋組織 を分ちて二とす、一は横紋筋纖維にし

て、一は滑平筋纖維なり。而して此兩筋纖維は其細胞の形狀を異にする。(筋學總論を参照すべし)

第三神經組織は神經細胞神經纖維より成り、神經の中樞部及び末梢部を組織せるものなり。而して神經纖維には二種あり、即ち有

髓神經纖維及び無髓神經纖維是れなり。

(一)有髓神經纖維

は中央に軸あり之を軸索と云

ひ其周圍に爛光ある粘液状の物質あり之を神經髓と云ふ。神經髓の外圍には菲薄透明なる膜あり之をシユワン氏鞘と云ふ。

圖四第

神經纖維及細胞



り。

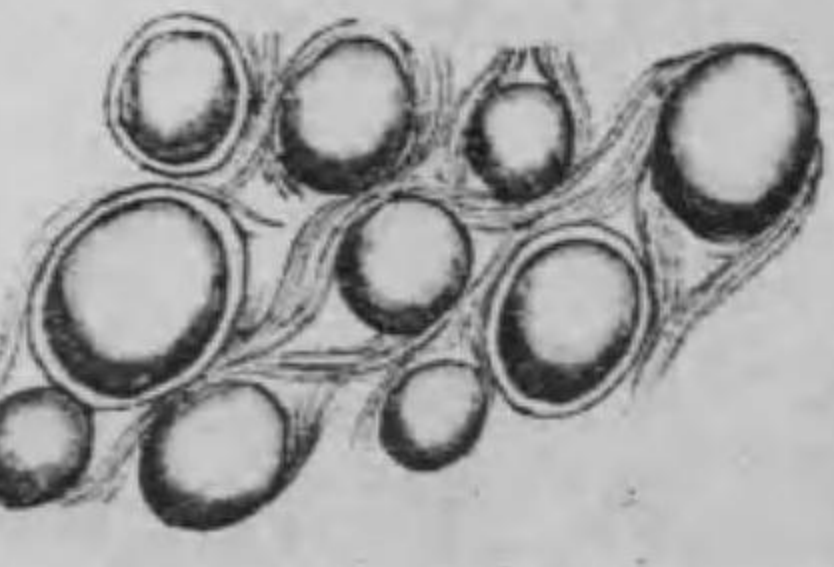
圖五第

結締組織



結締組織

弾力組織



乙の細胞は星状にして突起を生じ互に相連接す。而して之等の細胞は遍なく體の諸

軟骨組織及び骨組織を云ふ。

(一)結締組織に二種あり、即ち一は纖維様結締組織にして、一は網狀結締組織なり。而して甲の細胞は僅少にして紡錘状を呈し、

(二)無髓神經纖維は神經髓なくして直ちにシユワン氏鞘を以て被包せらるるものなり。

第四結締組織は結締組織・弾力組織・脂肪組織・色素組織・内皮組織

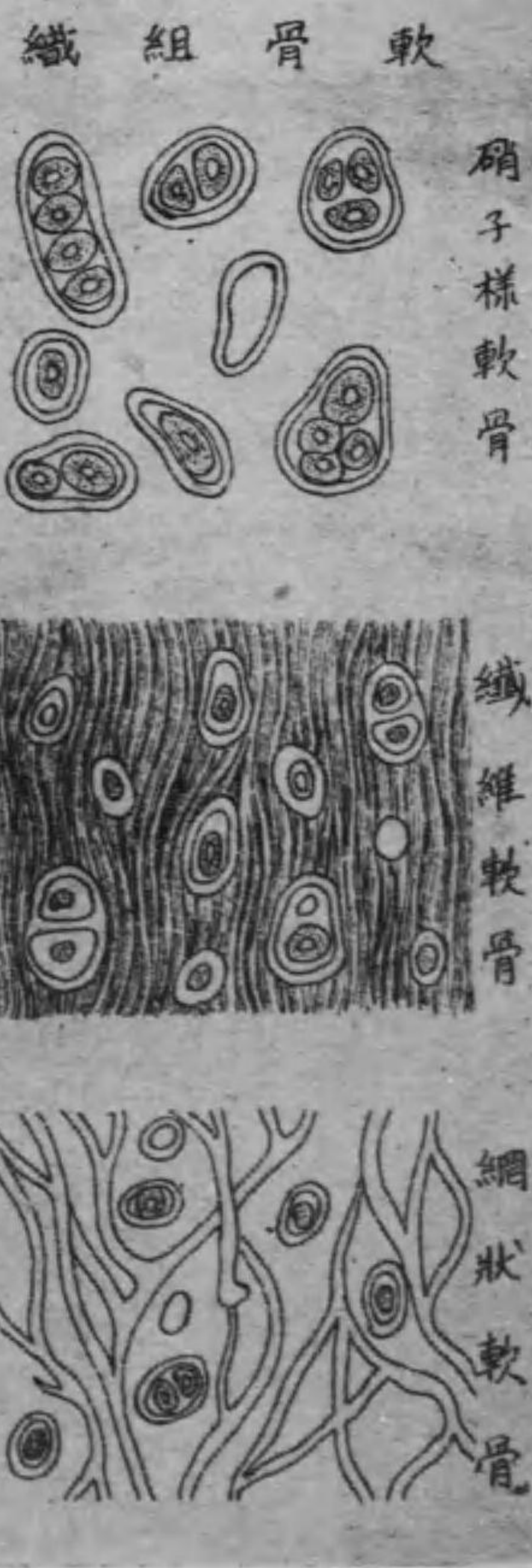
圖六第



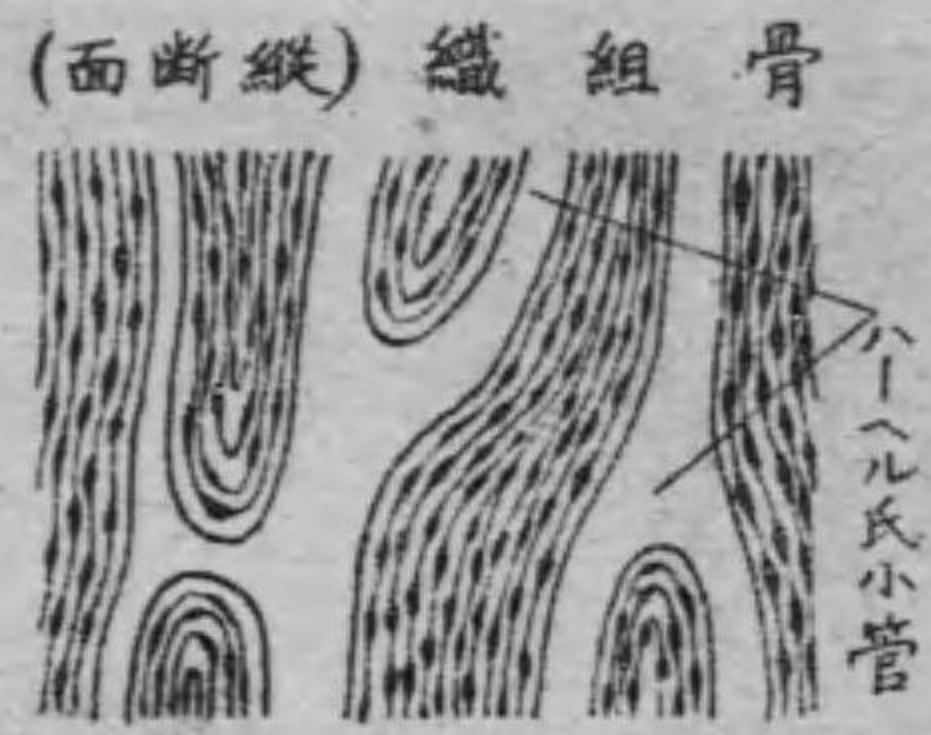
部を充填する組織となり體中殆んど存せざる處なし。  
 (二) 弾力組織 は細胞なく唯だ纖維のみにして結締組織中に存  
 在し、大小ありて其性非常に弾力を有す。  
 (三) 脂肪組織 は圓形の細胞にして核を有し、細胞内は脂肪を以  
 て充滿せられ、次第に集合して葡萄狀の塊を爲し、結締組織に由  
 りて包裹せらるゝものなり。  
 (四) 色素組織 は星狀若くは六角形を有する細胞にして、眼球の  
 脈絡膜・虹彩等にありて黒色の色素を含有す。  
 (五) 内皮組織 は心臟及び血管等  
 の内面を包裹せるものにして、其  
 細胞は極めて扁平且つ菲薄なる  
 ものなり。

(六) 軟骨組織  
 は其質強  
 固にして  
 弾力性を  
 有し、表面

圖七第



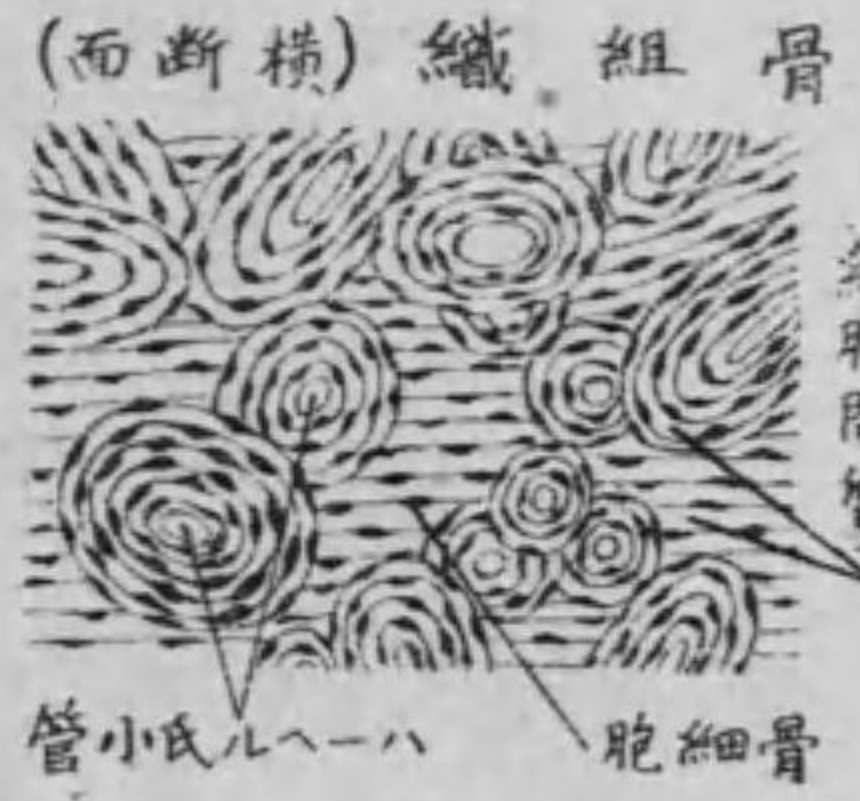
圖八第



は膜を以て被はる、之を軟骨膜と云ふ。軟骨膜  
 は血管・神經を具有し、軟骨を榮養するも敢て  
 骨質を發生することなし。又軟骨を分ちて硝  
 子様軟骨・網狀軟骨及び纖維様軟骨の三種と  
 す。  
 (七) 骨組織 は骨細胞・ハール氏小管及び細



第九圖



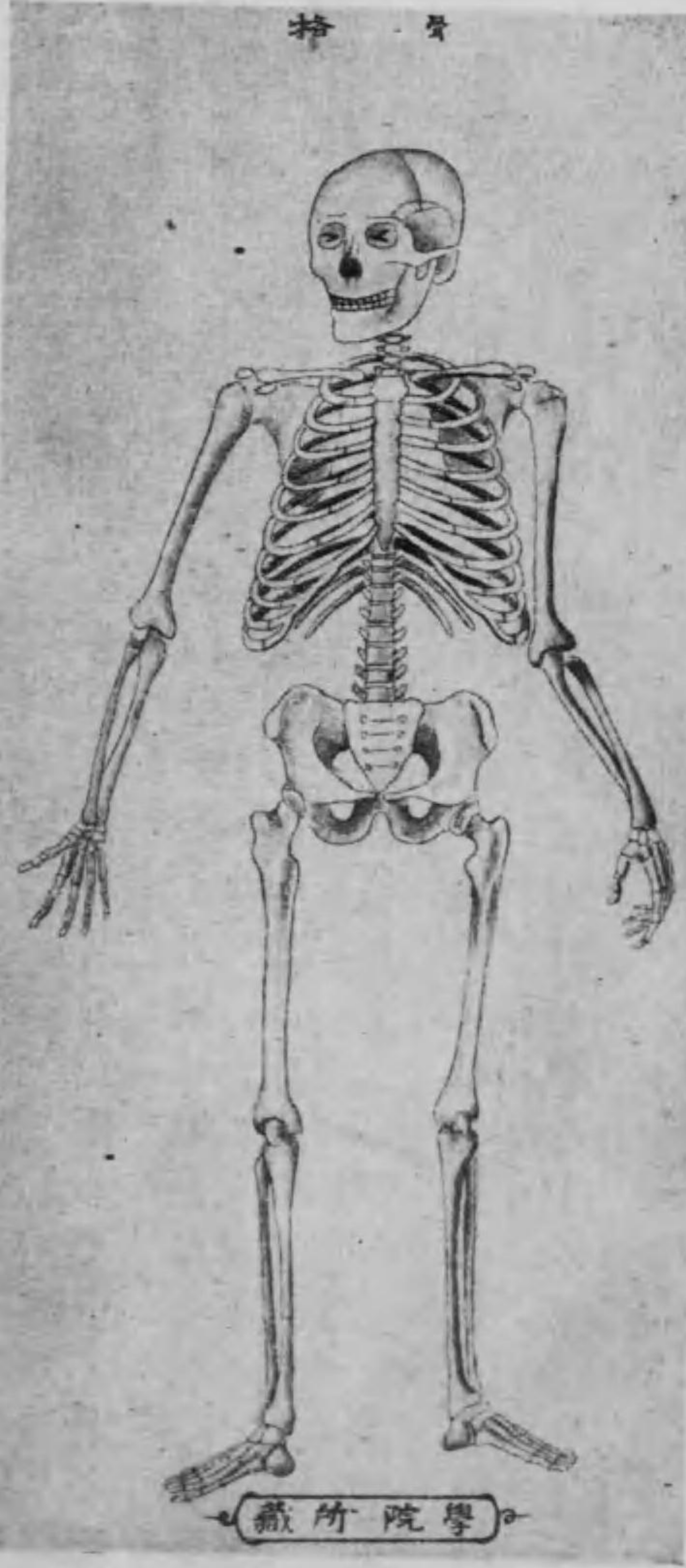
胞間質より成る。而して骨細胞は細胞間質中に布蔓し其形状は多角形にして多数の突起を以て自他互に相交通し、ハールベル氏小管或は髓腔に交通す。ハールベル氏小管は硬固質を穿通する無数の小管にして、血管を通じ骨の表面或は髓腔に開口し、経過中に在りては横管を以て互に交通す。又細胞間質は透明無組織の物質にしてハールベル氏小管或は骨の表面或は髓腔面等を各各鞘状に圍擁して數層を爲すものなり。

# 第一骨學

## 第一章 骨學總論

骨は身體の基礎を構成するものにして、其性質極めて堅く且つ彈力を有し、不朽の性を具へ、黃白色を帶ぶ。外圍は緻密なる骨質の一层を有し、之を皮質又は緻密質と云ふ。内部は粗糙にして恰かも海綿の如く、大小無數の腔あり、之を海綿樣質と云ふ。又管狀の骨に在りては中心に大なる腔洞を存す、之を髓腔又は髓管と云ふ。而して其未だ乾晒せざるものに在りては表面に白色強靱の膜を被包すべし、之を骨膜と云ふ。

第十圖



### 第一骨 髓

骨髓は柔軟なる物質にして其色に依り赤色骨髓及び黄色骨髓の二種に區別し、大人に在りては赤色骨髓は長骨の骨端肋骨及び頭

蓋骨の海綿様質中に存し、黄色骨髓は長骨の髓腔内を充填し、皆な血管・神経に富む。

### 第二骨 膜

骨膜は關節面のみを除きて骨の表面を被包せる白色強靱の纖維膜にして、血管・神経に富み、骨の榮養・新生及び再生に關し最も緊要なる關係を有するものにして、骨が損傷を受け、或は疾患に罹りし際、治癒するは皆な此骨膜の作用に因るなり。

### 第三骨の主成分

骨の主成分は有機及び無機の二

第十圖

骨質



成分より成り、有機成分即ち膠質は骨に弾力腐敗及び燃燒の性を與へ、無機成分即ち石灰質は骨に硬固不朽及び不溶解の性を與ふるものなり。而して老人の骨は硬固にして彈力に乏しく、挫折し易きは有機成分の減少に因り、小兒の骨の軟弱にして彈力に富み、容易に挫折せず且つ骨折の癒着し易きは有機成分の多きに因るが故なり。

#### 第四 骨の發生及び長育

骨は始め軟骨及び結締組織より發生し、身體の發育と共に軟骨の一部消滅して骨質之に代り、漸次に硬固となる。此變化を名けて化骨作用と云ひ、其硬固を始むる處を化骨點と云ふ。而して短骨に於ては通常一個なるも、扁骨及び長骨に於ては數個の化骨點を有す

るものなり。然れども骨端の關節面は永久に化骨せざるものなり。

#### 第五 軟骨

軟骨は帶黃白色にして、大に彈力に富み、鼻翼・耳殼・眼瞼・喉頭・氣管・肋骨端、其他總ての關節間に存在し、常に骨端の衝突を防ぎ且つ關節の運動を補助するものなり。

#### 第六 骨の形狀

骨の形狀は種々あり、雖も先づ之を長骨・短骨・扁骨の三種に大別す。

長骨は其縱徑は横徑より長

第二十圖 骨の形狀



くして管状を爲すものを云ふ。即ち四肢骨の如きは之に屬し、一體・  
兩端を有す。

短骨は圓形又は不等なる多くの面を有せるものを云ふ。脊椎・手  
根・足根等に存する諸骨は皆な之に屬す。

扁骨は板状にして二面を有するものを云ふ。頭蓋諸骨の如き即  
ち之に屬す。

### 第七 骨數及び骨略等

骨の人體にあるものは其數通例二百餘個なり。其互に連接して一  
體となりたるものを骨略と云ひ、其相連りて動く處を關節と名  
け、又頭蓋骨の如く其相合して動かざる處を縫合と云ひ、椎骨の如  
く軟骨によりて以て連接し、僅かに動くを軟骨接合と云ふ。

## 第二章 骨學各論

全身の骨略を軀幹骨及び四肢骨に大別す。

### 第一 軀幹骨

軀幹骨を更に分ちて脊椎骨・胸骨・肋骨・舌骨及び頭蓋骨とす。

#### 甲 脊椎骨

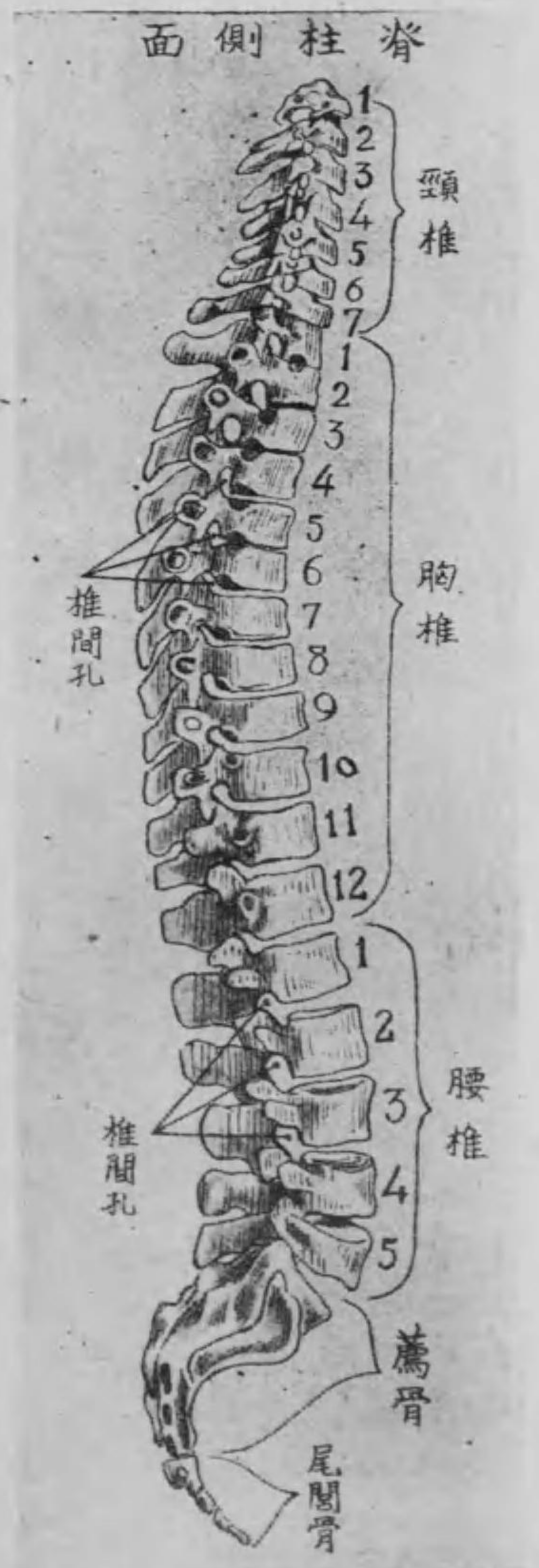
脊椎骨は軀幹の後壁にして三十三個の椎骨相重疊して其基柱を  
なし、一定の運動をなすものにして之を眞椎及び假椎に分つ。

#### イ 眞椎

眞椎は各個に分離すべきものを云ひ、其數二十四個にして上位の七個を頸椎とし、次の十二個を脊椎又は胸椎とし、下方の五個を腰椎とし、亦運動に依り更に分ちて第一及び第二頸椎を廻旋椎と稱へ、第三頸椎以下第五腰椎に至るを屈伸椎と總稱す。

(一) 屈伸椎

第三十圖



椎骨は體と弓より成り、體は弓の前大部にありて稍や扁圓なり。弓は後半部を形づくり、體の後側に癒着し、其間に大なる一孔を呈す、之を椎孔と云ふ。各椎相互に重疊するときは、此孔は連接して管を爲す、之を脊髓管と云ふ。即ち脊髓及び其被膜を包藏するものなり。又弓の體に癒着する部は弓根にして上下ともに截痕をなす、上を上椎間截痕と云ひ、下を下椎間截痕と稱し、椎骨の互に疊積するに由りて下椎間截痕は下位にある椎骨の上椎間截痕と合して各椎間孔を形成す。是れ脊髓神經及び脊髓動靜脈の通ずる處なり。弓より出づる突起は其數七個ありて、中央の癒合部より後方に突出する一個を棘狀突起とし、弓根より左右に突出する二個を横突起とし、更に又弓根の上方及び下方に向つて上下各一對の突起を出す、其上なるものを上關節突起と云ひ、下なるものを下關節突起と云

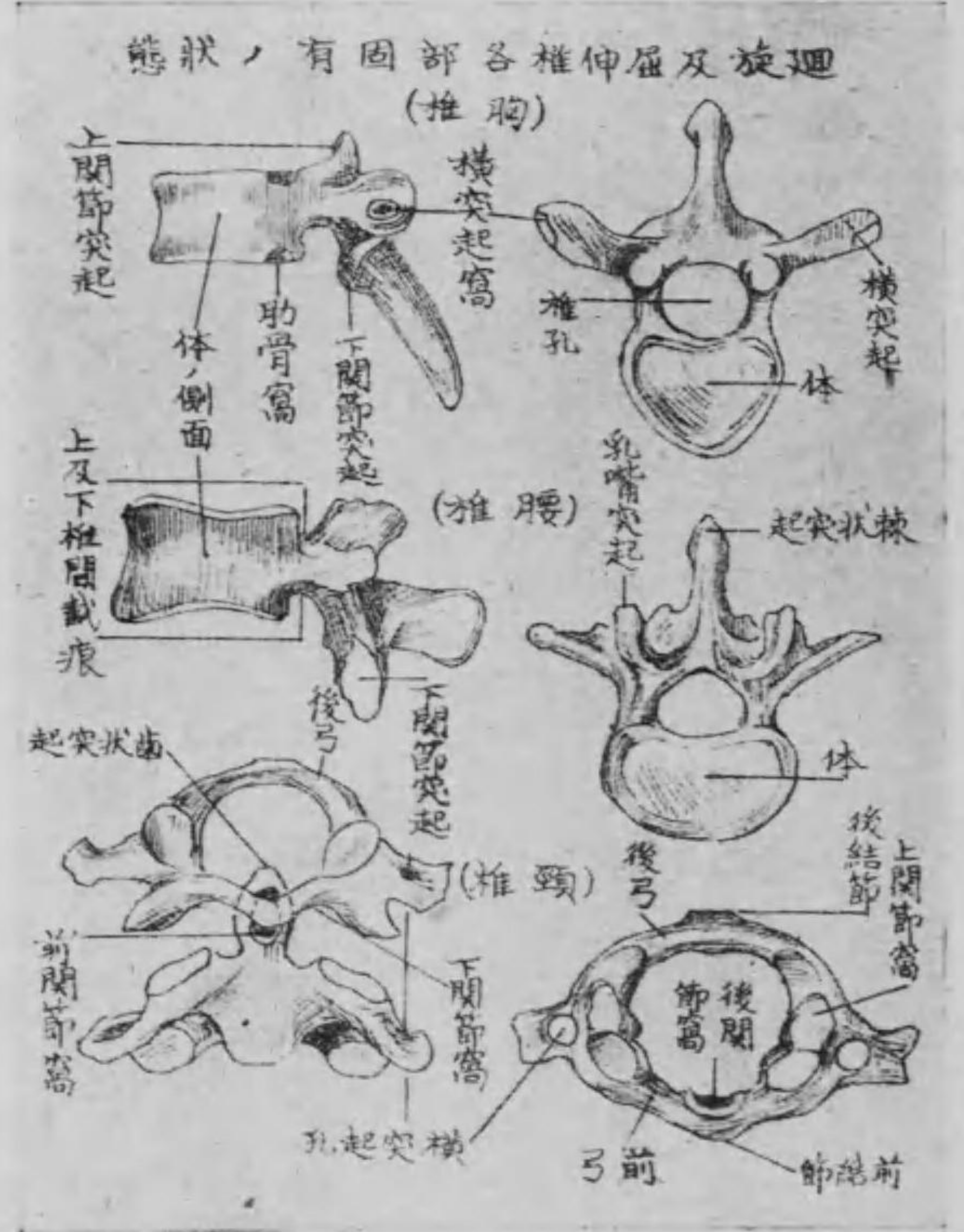
ふ。此突起は上位の下關節突起と下位の關節突起と相關し、上記の椎間截痕に依りて椎間孔をなす。而して眞椎各部の特徴は上七個の頸椎に在りては横突起に横突起孔と名くる一孔を有して血管の通路をなし、其尖端は分岐す。胸椎に在りては體の兩側に肋骨と關節する肋骨窩を具し、尙ほ横突起の尖端に横突起窩を現はす。又腰椎に在りては横突起根の後側に副突起及び上關節突起の外側に乳嘴突起を有すべし。

但し肋骨窩は第二乃至第九胸椎に在りては上下に各半個づゝあり、又第一胸椎は中央の肋骨窩以外に下に半個の肋骨窩を有し、第十胸椎は上端に半個の肋骨窩のみを現はす、尙ほ横突起窩は第十一・第十二胸椎に於ては之を缺ぐ。

(二) 廻旋椎

第一頸椎(又載域)は脊椎骨の最も上位にありて他の椎骨と異なり、輪狀にして體を具せず。

第四十圖



輪の前半を形成する部を前弓と云ひ、後半を形成する部を後弓と云ふ。前弓の前面中央の結節を前結節と名け、同内面中央の凹關節面を後關節窩と名く。後弓は中央

の後面に結節あり、之を後結節と云ひ、當に棘狀突起の痕跡を露はすものなり。側部は前後二弓の會合部にして横突起を出し、上下に關節面あり、之を上及び下關節窩と名く。而して上關節窩は凹くして後頭骨の髁狀突起と關節し、下關節窩は平坦にして第二頸椎の上關節窩と關節す。

第二頸椎(又樞軸)は其第二片にして一體を有し、體より上方に向ひて圓き突起を出す、之を齒狀突起と名け、第一頸椎の後關節窩と關節し、第一頸椎をして頭蓋と共に右顧左眄の自由を得せしむ。是れ廻旋椎の名ある所以なり。

□ 假椎

假椎は幼時に在りては其數九個にして、上の五個を薦骨椎と名け、

下の四個を尾閼骨椎と稱し、成長の後には互に相癒着して薦骨尾閼骨の各一骨となり、各々骨盤の後壁をなす。

(一) 薦骨

薦骨は脊柱の下部第五腰椎の下に位して骨盤の後壁にあり、形は三角



は三角にして、恰かも鋏狀の如し。薦骨の上端を基

底に云ひ、關節面を具へて第五腰椎に關節す。其兩側は外方に擴がりて三角をなす。之を薦骨翼と云ふ。又關節面の後方に三角形の大孔を有す。是れ薦骨管の上孔なり。其兩側の上方へ突出する突起は上關節突起と名け、第五腰椎の下關節突起と關節す。尖端は小なる關節面を具へて尾閶骨に接す。前面は陷凹し、其面滑かにして四對の孔を有す。之を前薦骨孔と云ひ、各薦骨管と交通す。又中部に四個の横線を現はし、五骨の癒着したる痕跡を證せり。後面は穹隆にして其面不等なり。後面にも亦た四對の孔あり。後薦骨孔と稱す。其中央に縦徑に走る不等の線を假棘狀突起と云ひ、此兩側の不等の縦線を假關節突起と名く。此假關節突起の下端は角狀を爲して下方に向ひ、薦骨管裂孔を左右より境す。之を薦骨角と

云ふ。又後薦骨孔の側部は肥大して相癒着す。之を假横突起と云ひ、凹凸不等なり。而して假棘狀突起、下端の一裂孔を薦骨管裂孔と云ひ、靱帶を以て覆はる。側部は其面粗糙にして上部は厚く下部に至るに従ひ、狭少となる。此面の上方は耳狀を呈せるを以て耳狀面と名け、腸骨の耳狀面と相關節す。

(二) 尾閶骨

尾閶骨は脊柱の最下端に在る上大下小なる一小骨にして、素と四個の尾閶骨椎の癒着したるものなり。第一椎の上面は薦骨の尖端と連接し、上方に一對の突起を出す。之を尾閶骨角と名く。又第一椎の兩側は横突起の痕跡を呈す。



### 乙 胸骨

胸骨は胸廓前壁の中央に位し、上は第二胸椎、下は第十胸椎の高さにあり、形状は長方形にして、上端は厚く且つ廣く、下端は狭少して、恰かも羅馬古代の劍に似たり。之を區別して三とし、其上強部を劍柄(又手柄)中大部を體(又劍身)、下小部を劍狀突起(又劍尖)と云ひ、此三部は皆な軟骨に由りて、各々相癒着す。而して劍狀突起は鈍圓或は銳尖に分れ、稀に孔を有するものあり。联接は七個の肋軟骨と鎖骨にして、前後の二面と側縁を有す。

上部は擴張して三個の截痕あり、中央のものを鎖骨截痕と云ふ。是れ鎖骨の内端相關節する處なり。側縁は不等にして、左右各々七個の截痕あり、之を肋骨截痕と名け、第一肋軟骨より第七肋軟骨に至る各軟骨の前端と相接合す。



圖六十第

あり、中央のものを鎖骨截痕と云ひ、其兩側の大なるものを鎖骨截痕と云ふ。是れ鎖骨の内端相關節する處なり。側縁は不等にして、左右各々七個の截痕あり、之を肋骨截痕と名け、第一肋軟骨より第七肋軟骨に至る各軟骨の前端と相接合す。

### 丙 肋骨

肋骨は胸骨と全胸椎とに連なり、胸の周側を圍みて胸廓壁を爲すものにして、其數左右各々十二個あり、上のものを第一肋骨と云ひ、以下順次に之を數ふ。各個の形状は細長扁平にして、弓形に彎曲し、各片共に一體兩端を有す。

上七對の肋骨は各肋軟骨を以て前端胸骨に連なれども、次位の三對は肋軟骨を以て共に第七肋軟骨に連繫す。而して其胸骨に達す

る七對を眞肋骨と云ひ以下五對を假肋骨と稱すれども最下の第十一對第十二對は最も短かくして其前端は全然遊離す故に假肋骨中特に此二對を浮肋骨と云へり。

前端は體の續きにして少しく廣く且つ扁平なり肋骨と結合す。

第七十圖



後端は小頭と云ひ少しく膨大す此末端を以て各胸椎體兩側の肋骨窩と關節す呼吸の際に胸廓の運動するは常に此關節に於て動くものなり。

體は細長にして扁平なり弓の如く彎曲し後端に近き處著しく屈曲す之を肋骨隅とす小頭より僅か距たりて一の小結節あり肋骨結節と云ひ胸椎の横突起窩に關節す又體の内面には一溝あり之を肋骨溝と云ひ肋間動脈及肋間神經を通ずるものなり但し終末の二肋は肋骨結節及び肋骨溝を缺く)

獨り第一肋骨は鎌狀にして幅廣く體の上面中央に淺溝を呈す鎖骨下動脈溝と云ふ是れ鎖骨下動脈の通ずる處にして其前方上縁に近く一結節あり斜角結節と名け前斜角筋の附着する處なり。

肋軟骨

肋軟骨は肋骨と同じく長扁平にして彈力に富み第一より第七に至るまでは漸々其長さを増加し以下第十二肋骨まで再び短縮す。

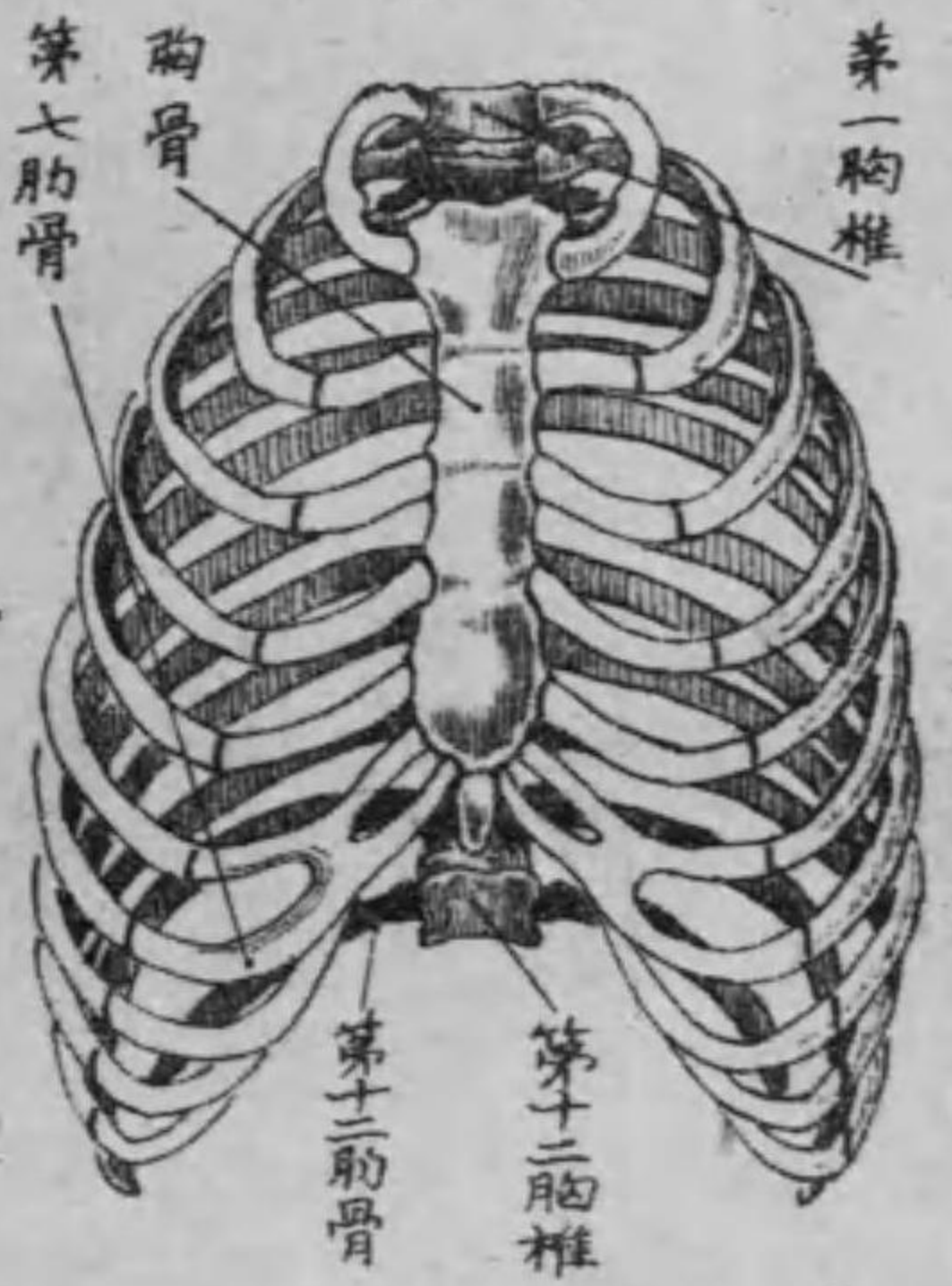
而して胸骨と共に胸廓の前壁をなし、肋骨の前端と接續し以て肋骨と胸骨との結合の媒介をなす。

胸廓

胸廓は頸部の下際、軀幹の中央にして、形状は畧ぼ西洋の樽に類し、

圖八十第

胸廓前側



脊柱の兩側に於ては肋骨隔の強く後方に彎曲せるが故に各一溝を造る之を肺溝と稱し肺臓の一部を容る。而して其構造は胸骨、全胸椎、全肋骨及び肋軟骨の相結合關節したる骨腔にして而かも著

明なる境界を存せず、雖も通常之を前壁、後壁、兩側壁に區別す。前壁は胸骨、肋軟骨及び肋骨前端より成り、其長さは後壁及び側壁よりも遙かに短かく、後壁は全胸椎及び肋骨後端より成り、側壁よりも少しく短かし、側壁は肋骨の體部より成り、強く側方に穹隆して最も長し。但し後壁とは肋骨隅を以て境界とす。

上口は狭くして横卵圓形なり。第一胸椎、左右の第一肋骨、同第一肋軟骨及び胸骨の上端より圍繞せられ、下口は廣くして其形状は不齊なり。第十二胸椎、左右の第十二肋骨、左右の第七及び假肋骨に屬する肋軟骨并に胸骨の劍狀突起より圍繞せらる。而して此下口は横隔膜を以て是れを閉ざし、腹腔と隔絶す。

但し胸廓下縁の肋軟骨部は弓状を呈するを以て肋骨弓と名け、左右の肋骨弓は胸骨下端に於て互に會合し、三角形を爲す之を胸骨下角と云ふ。

圖九十第



丁 舌骨

舌骨は前頸部喉頭の上方にして舌根にあり。馬蹄鐵形に彎曲したる小骨にして之を體大角及び小角に分つ體は中央の稍や大なる部にして大角は體の兩端より後方に突出し小角は圓錐形の小軟骨にして體と大角との間より出づ又此骨は骨格として他に聯接する處なく唯だ僅かに靱帶によりて顛顛骨に連なるものなり。

戊 頭蓋骨

頭蓋骨は軀幹の最も上部にあり神経系の上端部即ち腦髓及び感覺器并に消化器の初部の在る處にして數多の骨片の縫合に因り

て腦髓を擁護する骨囊を構成する部分を頭蓋と云ひ其前下方に於て感覺器及び消化器の初部を容るべき腔窩の存する部分を顔面頭蓋と云ふ共に樞要のものなり。

イ 腦頭蓋

腦頭蓋を構成するものは八個の頭蓋骨にして後頭骨一個、蝸蝶骨一個、篩骨一個、前頭骨一個、顛顛骨二個、顛顛骨二個にして之を頭蓋頂及び頭蓋底の二部に分ち其骨多くは扁平にして内面は凹陷外面は凸隆す。

(一) 後頭骨

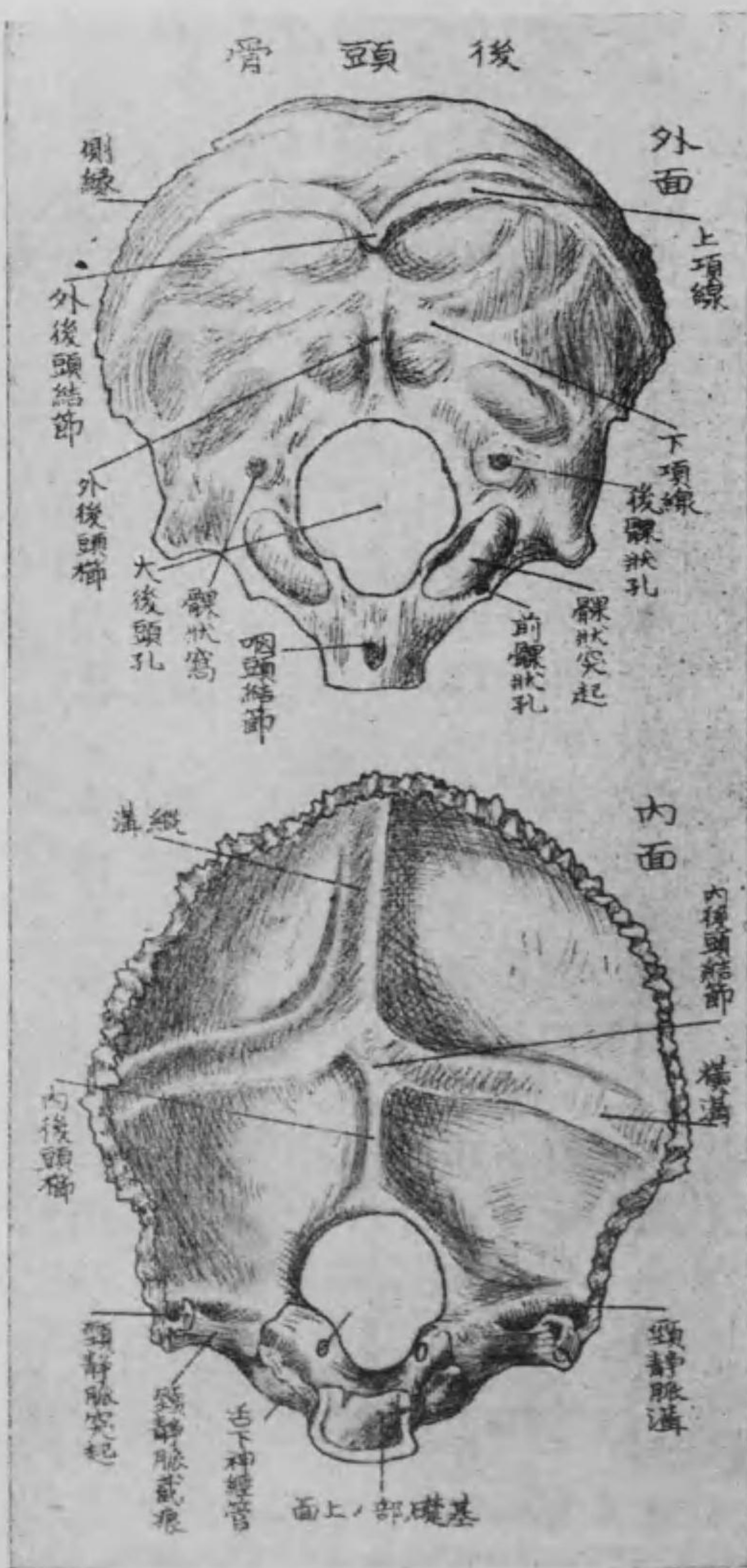
後頭骨は頭蓋の後下部を形成し頭蓋と脊柱とを結合するものに

して形ち稍や柏葉に似たり。其聯接は顛顛骨・顛顛骨・顛顛骨・蝶骨及び第一頸椎なり。之を鱗狀部基礎部及び左右の關節部の三部に區別す。而して此骨の前下部に大なる一孔あり、大後頭孔と云ふ。此孔は頭蓋腔と脊髓管との交通孔にして、延髓動脈・靜脈及び神經等を交通せしむ。

鱗狀部は後部の大部を占め鱗狀にして、外凸隆・内凹陷の二面及び側縁を有す。

外面の上半部は滑澤にして下半部は不等なり。其中央に隆起あり、外後頭結節と稱す。而して此結節より下方に走れる縦線あり、外後頭櫛又は中項線と云ふ。又外後頭結節の左右に在る横線は上項線と名け、此下部に當り殆んど上項線と並行に走る線あり、下項線と云ふ。

第十二圖 後頭骨



内面は滑澤にして中央の結節を内後頭結節と稱し、夫より上下左右に向つて走れる隆線又は溝を見る、其左右に走れるは横溝にして、上部の縦溝は之を矢狀溝と稱し、下部の縦線は内後頭櫛と名く。

而して横溝の上を後頭窩と云ひ下を小脳窩と云ふ。  
 側縁は不等の弓形にして上大部は顛頂骨の後縁と接合し其状鋸  
 齒の相吻合したるが如きを以て鋸齒状縫合と云ふ。下小部は鈍縁  
 にして顛顛骨の乳様部に接合す。  
 基礎部は方形にして大後頭孔の前部なり。尖端は稍や方形にして  
 軟骨を以て蝴蝶骨の體に接合し斜臺をなす。下面は不等にして其  
 中央に一結節あり咽頭結節と云ふ。  
 兩側の關節部は不齊形にして大後頭孔の左右にあり上下の二面  
 及び側縁を有し上面は側縁に近く一の截痕を現はす之を頸靜脈  
 截痕と云ひ顛顛骨岩様部の頸靜脈窩と共に一孔を作る之を頸靜  
 脈孔と云ひ舌咽神經迷走神經副神經及び内頸靜脈を通ず而して  
 頸靜脈截痕の外端には小突起ありて上方に向ふ之を頸靜脈突起

と云ふ。又下面は大後頭孔の前側部に突起あり、髁状突起と云ひ第  
 一頸椎と關節す。此突起の後方にある凹窩は髁状窩と稱し屢々小  
 孔を見る之を後髁状孔と云ふ。又髁状突起の前外方に一孔あり前  
 髁状孔と名く是れ舌下神經管の前端なり。

(二) 蝴蝶骨 或は 楔状骨

蝴蝶骨は頭蓋底の中央にありて其形状蝶翅の翅を張るに似たり。  
 其联接は全頭蓋骨と顛骨口蓋骨上顎骨及び鋤骨の四顔面骨に  
 して頭蓋の基底を作る之を一體大小の二翼及び翼状突起の四部  
 に區別す。  
 體は中央部にして骰子形なり即ち上下前後及び左右の六面を有  
 す。上面は中央凹陥し恰かも鞍状に似たるを以て之を土耳其鞍と

圖一十二第



名け鞍の後方を境する横隆を鞍欄と名く其後面は後頭骨の基礎部と連なり斜臺を爲す。下面は狭小して櫛状の突起を有す之を蝴蝶骨嘴と云ひ鋤骨翼に筈入すべし。  
 大翼は體の側面より外方に向つて左右へ突出す上面即ち腦面は

凹陥部にして三孔を有す正凹孔卵凹孔棘起孔是れなり。甲は三叉神經第二枝を乙は同第三枝を丙は中硬腦膜動脈を通す。又卵凹孔の内側に屢々無名小管と名くる小孔を見ることあり而して大翼の前上縁は小翼に相對して上眼窩破裂をなし前下縁は上顎骨の眼窩面に相對して下眼窩破裂をなし後縁は顳顬骨岩様部の前縁に相對して蝴蝶岩様破裂をなす。  
 小翼は體の前上部より二根を以て起り其根間に一孔を現はす之を視神經孔と名け眼窩に通す上面は前頭蓋窩の一小部を營み下面は大翼に向ひ専ら眼窩の天盖をなす。前端は前に向て前頭骨眼窩部の後縁に附着し後縁は遊離して前及び中頭蓋窩の界をなす。  
 翼狀突起は體と大翼根との間より下垂して内外の二板より成り前側に一縦溝あり翼狀口蓋溝と云ふ。此溝は上顎骨の體及び口蓋

骨と合して翼狀口蓋管を造り、翼狀口蓋動靜脈及び口蓋神經を通ず。又、翼狀突起の起根には一小管あり、ウイヂアン氏管と云ひ、ウイヂアン氏動靜脈并に淺大及び深大岩様部神經を通ず。

(三) 篩骨

篩骨は蝴蝶骨の前部にして頭蓋底并に左右两眼窠の間に位し、前頭骨・蝴蝶骨・上顎骨・鼻骨・涙骨・鋤骨及び下甲介骨と相連接す。形状は骰子形にして之を地平板・鉛直板及び左右の側部に區別す。地平板(又は篩板)は長方形にして前頭骨の眼窠部と蝴蝶骨體との間に箱入して數多の小孔を有し、恰かも篩狀を爲す故に之を篩孔と名く、即ち嗅神經の通ずる處なり。又、板の中央に橢狀の突起あり、鶏冠と云ふ。其前方前頭骨に接する部に於て一小孔あり、盲孔と稱す。

圖二十二第



し鼻腔に通ず。鉛直板は地平板の下面より鼻腔に下垂して鼻中隔の前上部を爲し、之に由り鼻腔を左右の二腔に分ち、鼻骨・蝴蝶骨及び鋤骨と連接す。

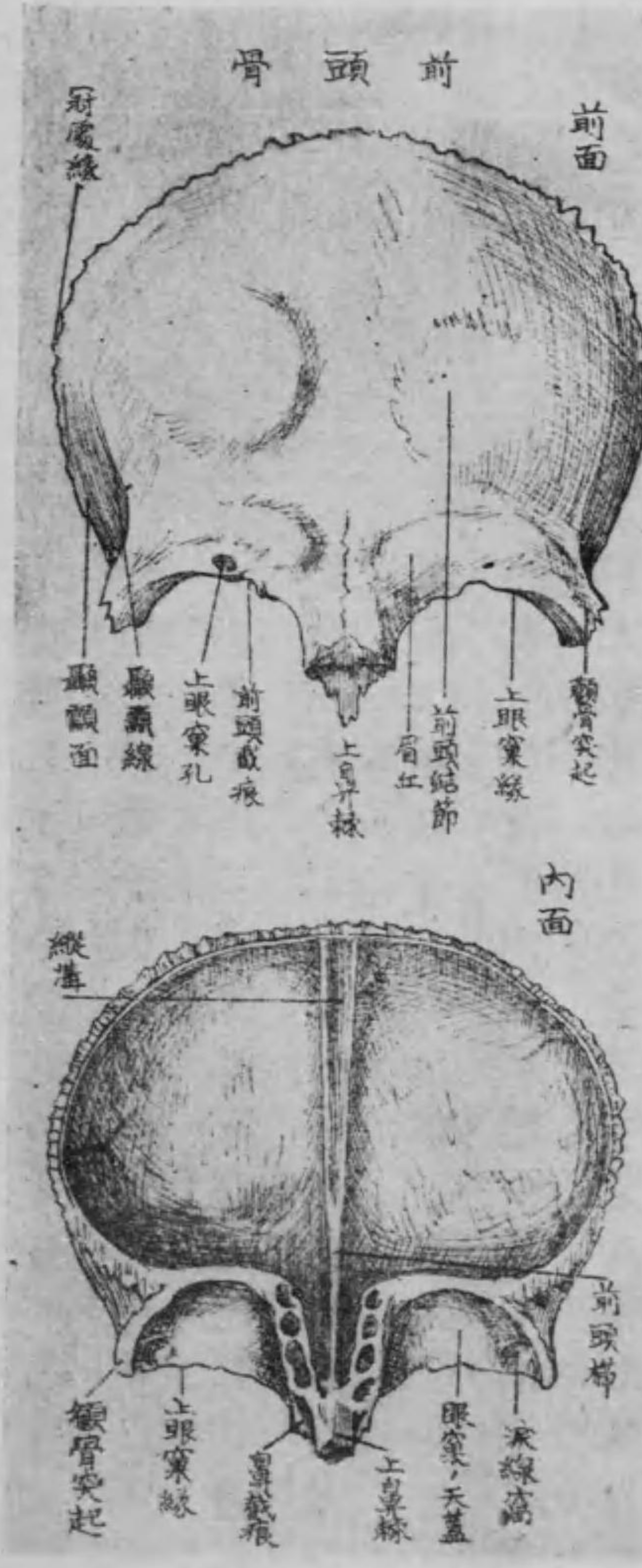
側部又は篩骨回廓は地平板の兩側に懸り、内外の二壁より成り、其間に數多の小腔を有す。之を篩骨蜂窠と云ひ、其外壁は眼窠内壁の大部分をなし、又、内壁は鼻腔の外壁をなす。而して茲に上下二個の膨隆を呈す、其上を上甲介と云ひ、其下を中甲介と云ふ。

(四) 前頭骨



前頭骨は頭蓋の前面を圍み、其形も帆立貝の如くにして前縁は上顎骨・鼻骨・涙骨・顴骨の四顔面骨と、後縁は顙頂骨・蝴蝶骨・篩骨の三頭蓋骨に联接す。之を分ちて前額部・眼窩部及び鼻部とす。前額部は内外の二面及び一縁を有す。

圖三十二第



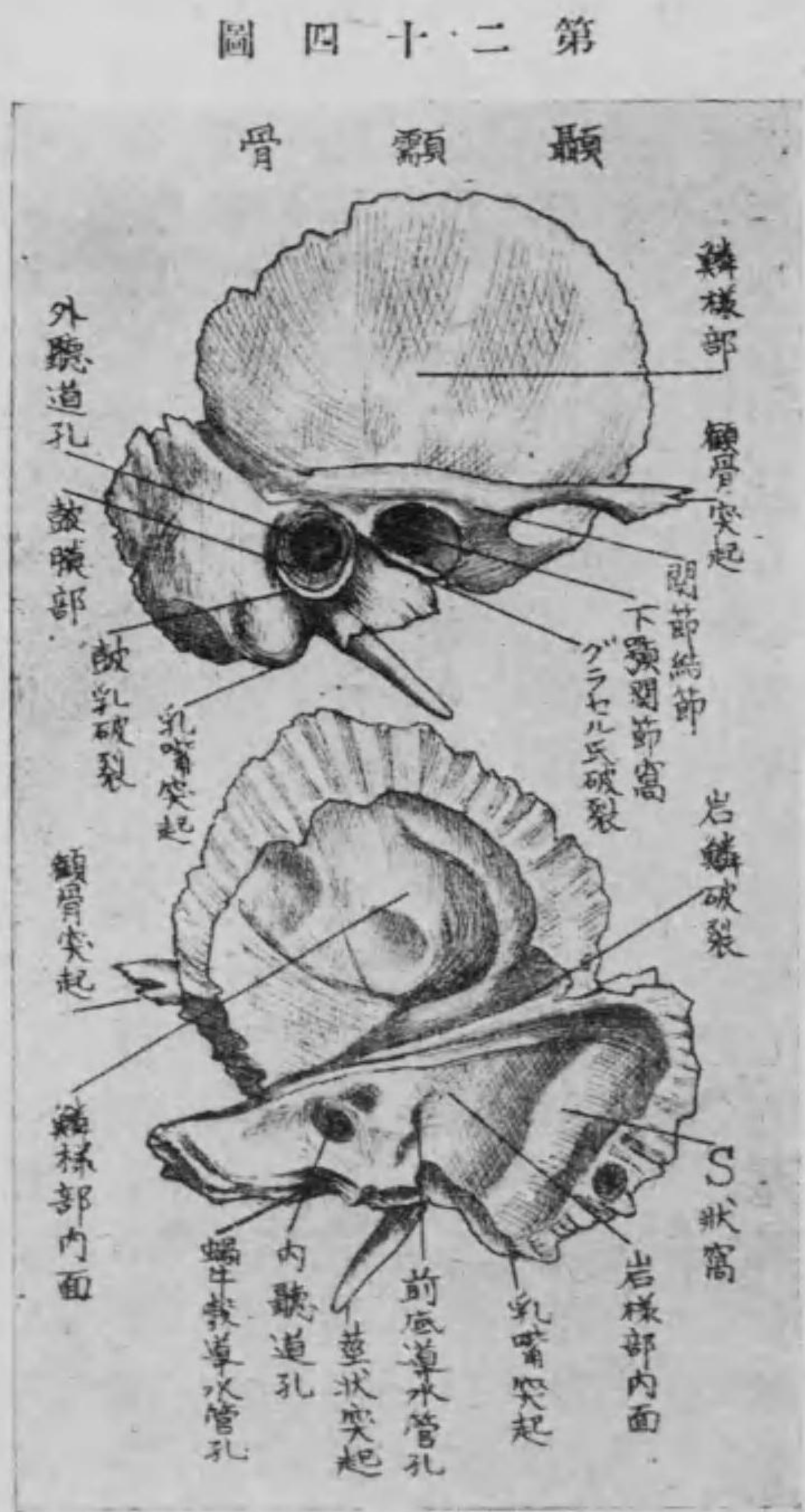
外面即ち前面は凸隆にして滑澤なり。稍や中央の兩側に大なる結節あり、前頭結節と名け、其下際に半月形の鈍隆起あり、眉弓と名く。眉弓の下際に眼窩部と境界せらるゝ縁あり、之を上眼窩縁と云ふ。其部に二個の截痕或は孔あり、其外方にあるを上眼窩孔或は截痕と名け、内方の淺きものを前頭截痕と名く。前者は上眼窩動靜脈及び上眼窩神經を通じ、後者は鼻前頭動脈及び前頭神經を通ず。内面即ち脳面は凹陷にして指狀壓痕及び腦隆起を現はし、又中央を矢狀徑に走る隆線を前頭櫛と云ふ。縁は上部は弓形の鋸齒状を呈して顙頂骨と冠處縫合を形造り、下部は蝴蝶骨の大翼と縫合す。上眼窩縁の外側にして顴骨と縫合する處を顴骨突起と云ふ。眼窩部は甚だ薄く、上面は脳面にして著明なる指狀壓痕及び腦隆

起を呈す。下面即ち眼窠面は凹陷にして滑澤なり。顴骨突起に近く淺窩あり之を涙腺窩と稱し涙腺を容るゝ處なり。鼻部は两眼窠部の間及び鼻骨の後方にして其端鋸齒狀の縁をなす之を鼻截痕と云ふ。

(五) 顴骨

顴骨は頭蓋の外下壁にして形状は不齊なり。其联接は蝴蝶骨・顚骨・後頭骨・顴骨及び下顎骨の五骨なり之を分ちて鱗様部・岩様部及び乳様部の三部とす。鱗様部は其形ち魚鱗の如く扁平にして外面は滑澤なり。前下部より前方に向つて長突起を出す之を顴骨突起と稱し其端は顴骨の顴骨突起と联接して弓形を成す之を顴骨弓と云ふ。其起根部は二

脚に分れ其脚間に一窩を造る之を下顎關節窩と稱し下顎骨の髁狀突起と關節す而して其一脚は外聽道孔の上際に他の一脚は内下方に走り窩の前方二脚に分岐する處に於て一結節を現はす之を關節結節と云ひ開口すれば下顎骨の髁狀突起は此上に乗る。



第二十二圖 顴骨

内面は凹陷して指狀壓痕・腦隆起及び硬腦膜動脈を通ずる溝を現はす。乳様部は稍や圓錐形に

して鱗様部の後下部にあり。外面は不當にして下方に乳状の突起あり、之を乳嘴突起と名く。其内側に深溝あり、乳嘴截痕と云ひ、其内方の浅溝を後頭動脈溝と云ふ。又乳嘴突起の實質は海綿状にして大小不同の數腔に分る、之を乳嘴蜂巢と稱し、鼓室に交通すべし。内面は凹くして深溝あり、S字状窩と稱す。縁の上部は顛頂骨の後下隅と縫合を營み、下部は又後頭骨と縫合すべし。

岩様部は本骨中最も複雑なる處にして聽器を藏し、其形ち三角錐體に似たり。分ちて基底、尖端、三面、三縁とす。基底は顛骨突起と乳嘴突起との間にして、外聽道孔所謂外耳門のある處なり、深く内聽道に通ず。而して外聽道の最下壁をなすを名けて鼓膜部と稱す。即ち後方は乳嘴突起、前下方は下顎關節窩と境

第二十五圖



し茲に破裂を現はす、甲を鼓乳破裂と云ひ、乙をグラツセル氏破裂と云ふ。共に鼓室に交通すべし。尖端は内方、蝴蝶骨體と相對し、一の孔を現はす、是れ内頸動脈管の内孔なり。後面は鉛直にして中央に大孔あり、之れ内耳門にして、内聽道孔と名け、内聽道に通じ、聽神經、顏面神經及び血管を

通ず。其後、外方に前庭導水管孔と稱する裂孔あり、内耳の前庭導水管の通路なり。前面は其面前上外方に傾き、上縁に由つて後面と境し、前下部の鱗様部内面に移る處に小破裂あり、岩鱗破裂と云ふ。又尖端に近く凹

窩あり三又神經節壓痕と云ひ三又神經半月狀節の乗る處なり。下面は不等にして中央に大なる一孔あり内頸動脈管の外孔なり、内頸動脈管の内孔と通ず。此後外方に細長の突起あり莖狀突起と云ふ。其後外側の一孔を莖乳孔と名け顔面神經の出づる處なり。又内頸動脈管外の後側に大なる深窩あり頸靜脈窩と云ひ後頭骨關節部の頸靜脈截痕と合して頸靜脈孔を造る。而して頸靜脈窩の内前方に亦小陷部あり之を蝸牛殼導水管孔と云ふ。

(六) 顛頂骨

顛頂骨は前頭骨と後頭骨との間にありて頭蓋の上側壁を形成す。其形ち扁平方形にして前頭骨後頭骨顛顛骨及び蝴蝶骨の四頭蓋骨と联接す。之を區別して内外の二面及び四縁四隅とす。

第二十六圖



外面は凸にして滑澤なり。中央に一の豊隆あり、之を顛頂結節と云ふ。此結節は若年には殊に著

明にして即ち化骨點を徴するものなり。其下部に弓状を爲せる幽微の二線あり上及び下顛顛線と云ひ又上縁に近く小孔あり顛頂孔と云ふ。内面は凹にして亦滑澤なり。指狀壓痕・腦隆起及び硬腦膜動脈溝あり

り。又上縁に沿ふて淺き半縱溝ありて走る。此半縱溝は左右の顛頂骨相合して一の縱溝を構成す。之を矢狀溝と云ふ。此矢狀溝は長くして顛頂骨を外れ、尙ほ前後に延長して前は前頭骨、後は後頭骨に移行す。

上縁は左右相吻合して鋸齒狀縫合をなす。之を矢狀縫合と云ふ。下縁は薄くして廣く顛頂骨の鱗部と鱗狀縫合を營む。前縁は前頭骨の上縁と鋸齒狀縫合をなす。之を冠處縫合と云ふ。後縁は後頭骨の顛頂縁と三角縫合をなす。之を後頭縫合と云ふ。而して隅は前頭隅即ち前上隅、蝴蝶隅即ち前下隅、後頭隅即ち後上隅、乳様隅即ち後下隅なり。

□ 顔面頭蓋

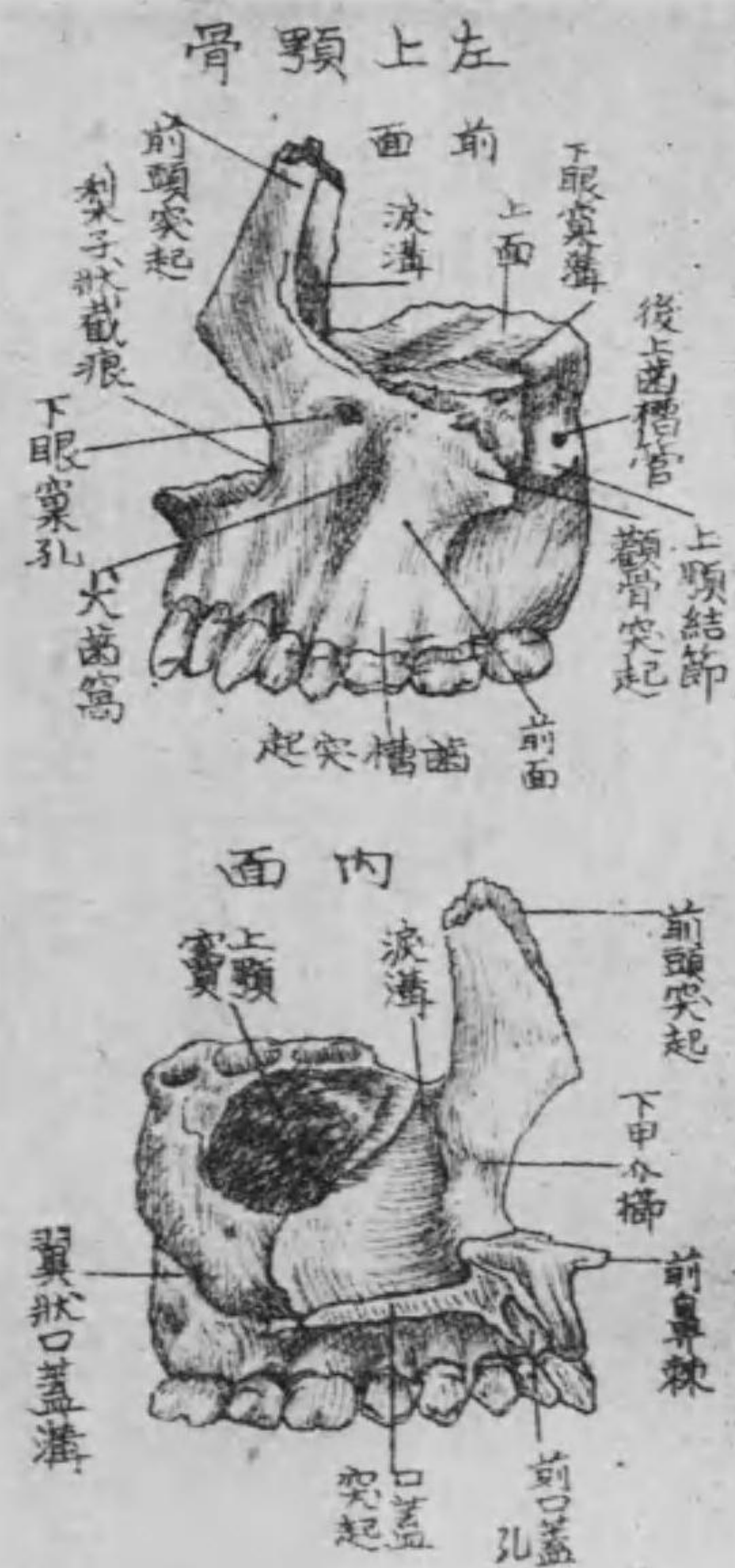
顔面頭蓋は上顎骨二個、口蓋骨二個、涙骨二個、下甲介骨二個、鼻骨二個、顴骨二個、鋤骨一個、下顎骨一個の十四骨より成り、種々の腔竅を構成するものなり。

(一) 上顎骨

上顎骨は顔面の中央にありて左右相接合す。形状は不齊にして其联接は蝴蝶骨、前頭骨及び篩骨の三頭蓋骨と、鼻骨、顴骨、涙骨、鋤骨、口蓋骨及び下甲介骨の六顔面骨なり。之を一體及び前頭顴骨齒槽口蓋の四突起に區別す。

體は楔狀にして四壁を有する處の空洞骨なり。其壁薄く此空洞を上顎竇又はハイモル氏洞と云ふ。前面は穹隆にして上縁を下眼窠縁と云ひ、此縁の下方に小孔あり、

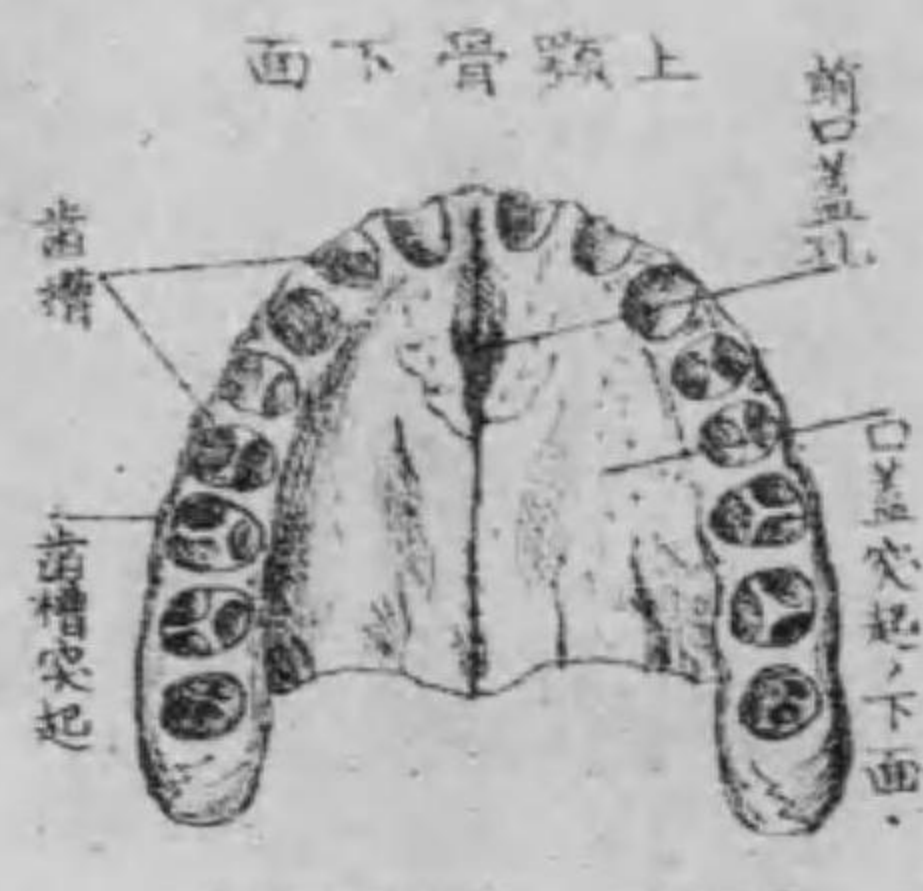
圖七十二第



下眼窩孔と云ひ眼窩に通ず。此孔の直下に凹窩あり、犬齒窩と云ふ。又前面には其内縁に鋭利なる截痕あり、梨子狀截

痕と名け前鼻孔の側縁をなすものなり。後面は少しく穹隆し中央に粗糙なる部あり、之を上顎結節と名く。茲に二三の小孔あり、後上齒槽孔と云ふ。此孔は管となりて骨中に穿入し下りて齒槽に達し、下齒槽神經及び血管を通ず。内面即ち鼻腔面は其後上部に一大孔あり、之を上顎竇孔と云ふ。此

圖八十二第



孔の前方に深溝あり、涙溝と云ひ、下甲介骨及び涙骨との聯接により鼻涙管を構成す。又上顎竇の後下方に縦徑の淺溝あり、翼狀口蓋溝と云ひ、蝴蝶骨の翼狀突起及び口蓋骨と合して翼狀口蓋管を造る。而して其下口を後口蓋孔と云ふ。

上面即ち眼窩面は滑澤にして不齊三角形をなし、其中央に一溝あり、下眼窩溝と云ふ。此溝の前端は骨質中に穿入して下眼窩管を作り、下眼窩孔に終る。管中更に一二の小管を生ず、之を前上齒槽管と稱し、骨中を穿ちて齒槽に達し、前上齒槽神經及び血管を通ず。前頭突起は長扁平にして體の上内隅より突出し、上端は前頭骨の鼻部に接す。額骨突起は短にして體の上外方に突出し

頤骨と連接す。

齒槽突起は體の下部より下方に向て突出し、八個の齒根を受容す。口蓋突起は體の内面の下部より内方に向て水平に突出し、上面は鼻腔底となり、下面は硬口蓋の前大部を爲し、口腔の上壁をなす。内縁は對側の同名縁と縫合し、前方齒槽に近く一孔を現はす、之を前口蓋孔と云ふ。而して其後縁は口蓋骨の地平部と接合す。

(三) 口蓋骨

口蓋骨は鼻腔の後側壁に位し、口腔の天蓋を爲す。其形狀は「」字形にして、連接は蝴蝶骨・篩骨の二頭蓋骨と上顎骨・下甲介骨及び鋤骨の三顔面骨にして、之を地平部及び鉛直部に分つ。然れども離解したる骨に非らざれば充分其形を検し難し。

地平部は方形板にして、硬口蓋の後部を形成し、上面は鼻腔底の後部をなし、下面は口蓋の後部を爲す。而して前縁は上顎骨口蓋突起の後縁と接合し、後縁は遊離して硬口蓋の後縁をなし、内縁は左右互に縫合す。

又地平部と鉛直部との間より出づる錐體突起は三角形にして、後下方に向ひ、蝴蝶骨翼狀突起の兩板間に箝入す。其前側に一孔あり、後口蓋孔又は翼狀口蓋孔と稱す。

鉛直部は扁平長方形にして、内面は鼻腔の後側壁をなし、此面に二個の並行に走る隆起あり、上のものを篩骨櫛と云ひ、下のものを下甲介櫛と云ふ。外面は後方に一縱溝あり、翼狀口蓋溝と稱し、蝴蝶骨翼狀突起及び



第十二十九圖

上顎骨體と合して翼狀口蓋管を構成す。又前縁は薄くして上顎骨鼻腔面の後部に連接し、後縁は翼狀突起の前縁に接合す。上縁は分れて前後の二突起となる、即ち前方を眼窩突起と云ひ、後方を蝴蝶突起と云ふ。而して二突起の間は截痕を呈す之を口蓋截痕と云ふ。

(三) 涙骨

涙骨は眼窩内壁の前部に位し甚だ菲薄なり。形状は扁平方形にして頗る爪甲に類す。外面は眼窩に面して眼窩内壁前部の一部をなし、茲に深溝を現はす。之を涙溝と名く。内面は粗糙にして篩骨蜂窠の前部を掩ふ。前縁は上顎骨前頭突起の後縁と聯り、後縁は篩骨篩板の前縁と聯接す。上縁は前頭骨眼窩部内縁の前部と聯り、下縁は即ち下端にし

て下甲介骨に聯接す。

(四) 下甲介骨

下甲介骨は鼻腔の外側壁より鼻腔内に懸垂し、形状は貝殻に似たる小骨なり。内面は凸隆して鼻中隔に相對し、外面は凹陥にして鼻腔の側壁に向ふ。中央部は上顎骨涙骨及び篩骨の三突起

に由りて上顎骨涙骨及び篩骨に聯接す。

(五) 鼻骨

鼻骨は顔面上中央部にして左右上顎骨前頭突起の間に位し、形

第三十圖





狀は畧ぼ扁平方形なり。然れども上部は狭厚にして、下部は廣薄なり。其联接は前頭骨上顎骨及び篩骨にして、内縁は對側の同名骨と相合す。

(六) 顴骨

顴骨は上顎骨の上外側に位し、形状は稍や菱形に近し。而して前頭骨、蝴蝶骨、顴骨及び上顎骨に联接し、三面三突起を有す。眼窠面は凹陷にして滑澤なり。半月形をなして眼窠の外壁及び底の一部を爲し、前縁即ち下眼窠縁を以て顔面と境す。此面に一個の小孔あり（時として二個）顴骨眼窠孔と云ひ、顴骨管となりて骨中に入り、二枝に分れて一は顴骨顴管に開き、他の一は顴骨顔面管に開く。而して前者は眼窠神経の顴枝を通じ、後者は眼窠神経の顔面

第三十一圖



枝を通ず。

顴面は深く凹陷して顴窩に向ひ、此面の小孔を顴骨顴管と云ふ。

顔面は豊隆にして頬の高部をなす。此面の小孔を顴骨顔面管と云ふ。

前頭蝴蝶突起は上隅より突出し、粗縷縁を以て前頭骨の顴骨突起及び蝴蝶骨の大翼に接合す。

顴骨突起は後隅より突出し、顴骨の顴骨突起と聯りて共に顴骨弓を構成す。

上顎突起は内方に向ひ、三角形の鋸齒状面を以て上顎骨の顴骨突起に接合すべし。

(七) 鋤骨

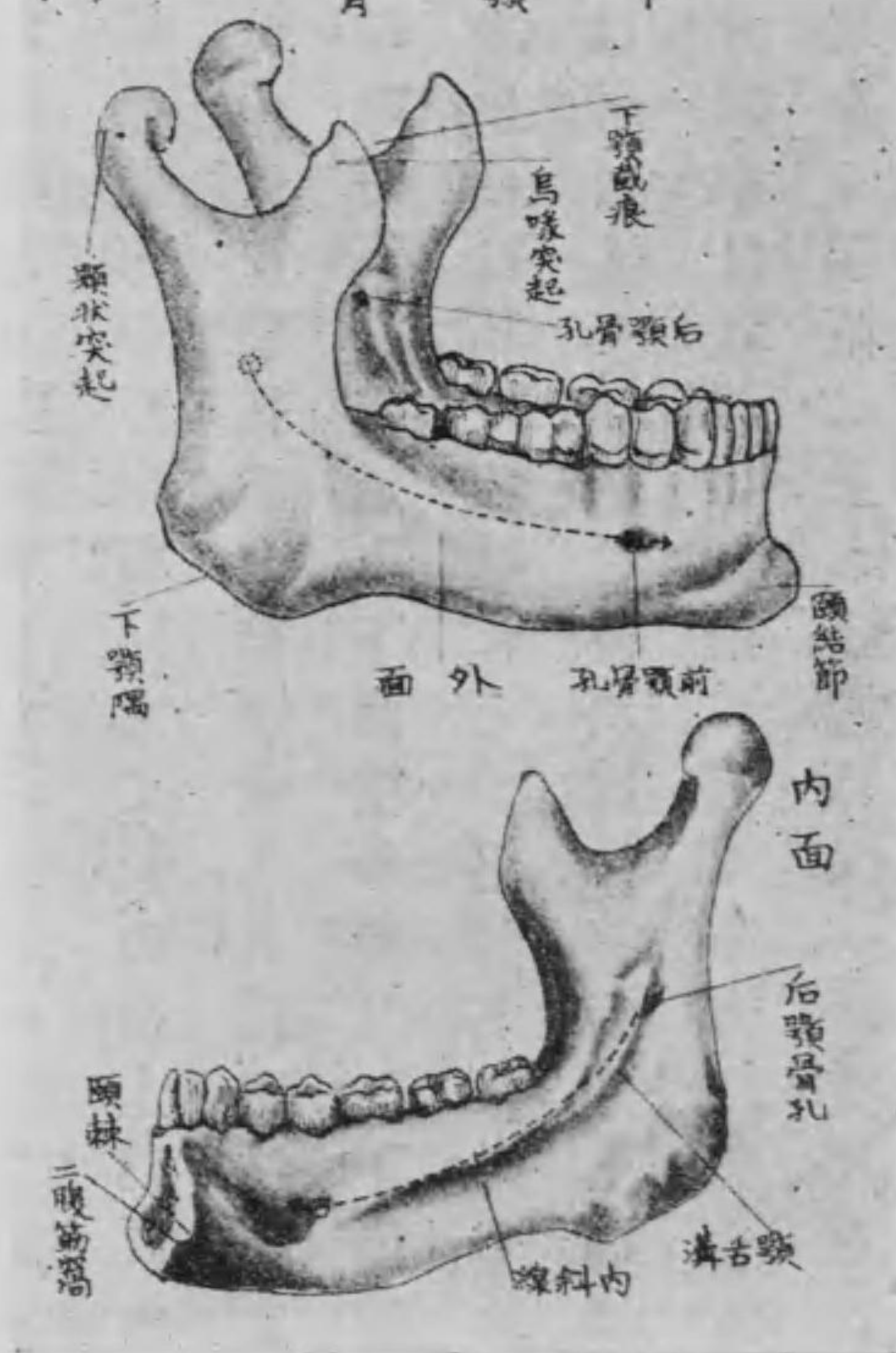
鋤骨は鉛直に鼻腔の中央にありて其中隔をなす。形状は稍や菱形にして菲薄なり而して蝴蝶骨・篩骨・口蓋骨及び上顎骨の四骨と接合す。又其左右側面は稍や平滑にして不齊の溝状を呈し、上縁は左右の二部に分れて鋤骨翼を成し、其間に蝴蝶骨嘴を挟む。

(八) 下顎骨

下顎骨は顔面の最下部にあり。形は馬蹄鐵状にして其联接は顚骨と可動關節を營むのみ之を區別して一體二枝とす。體は弓形にして内外の二面及び上下の兩縁を具ふ。而して上縁には十六個の齒牙を保有し、下縁は圓滑にして直ちに皮下にあり。

第三十三圖

下顎骨



外面は豐隆にして中央に結節あり、頤結節と云ふ。其外側の第二小白齒の下部に一孔あり、前顎骨孔又は頤孔と名く。是れ齒槽管に通ずるものなり。孔の下部より後外方に走る線あり、外斜線と云ふ。内面は凹陷にして中央に一の棘状の突起あり、之を頤棘と名く。其

兩側に指壓したるが如き淺窩あり、之を二腹筋窩と稱し、二腹筋の停止部なり。此部より後上方に走る銳線あり、内斜線と云ふ。又此

下際に淺溝あり、顎舌溝と云ふ。  
 下顎枝は其形ち方形板にして體の後上部にあり、二面三縁を具ふ。  
 内面は中央に斜孔あり、後顎骨孔又は下顎孔と云ふ。是れ齒槽管を  
 經て前顎骨溝に交通し、下齒槽神經及び下齒槽動靜脈を通ずるも  
 のなり。外面は稍や粗糙にして咀嚼筋の附着する處となる。  
 前縁は短くして下方は外斜線に移行し、上端は突起をなす之を鳥  
 喙突起と名く。後縁は圓滑にして下方は體の下縁と會して鈍角を  
 なす之を下顎隅と云ふ。上端は又一の突起をなす之を髁狀突起と  
 稱し、顚顚骨の下顎關節窩と關節す。而して此兩突起の間には一の  
 大なる半月狀の截痕を呈す之を下顎截痕と云ふ。

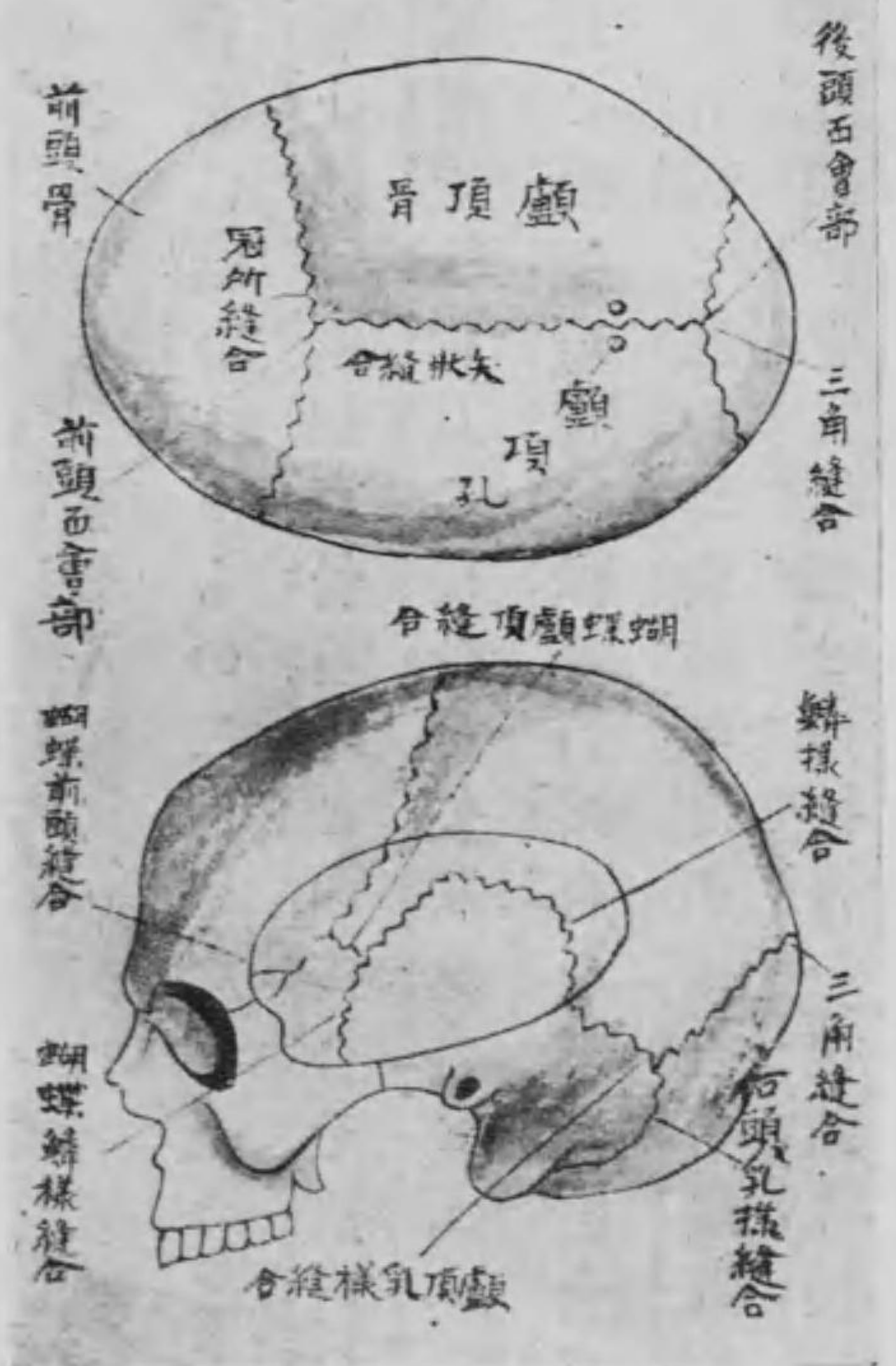
○腦頭蓋の縫合及び百會

此條下に於ては頭蓋諸骨の相互の關係を明かにし、且つ許多の骨  
 縁が各其一部を以て構成せる處の緊要なる部位を講ぜん。素  
 より重複する處あるべきが故に前後對照すべし。

縫合

凡ての頭蓋骨は下顎骨を除くの外は皆な鋸齒狀又は鱗狀の縁に  
 より相互に結合するものにして之を縫合と云ふ。  
 前頭骨上縁と兩顚頂骨前縁との接合を冠處縫合と云ふ。  
 兩顚頂骨上縁相互の接合を矢狀縫合と云ふ。  
 後頭骨と兩顚頂骨後縁との接合を三角縫合又は八狀縫合と云ふ。  
 顚頂骨外縁と顚顚骨鱗樣部との接合を鱗狀縫合と云ふ。  
 後頭骨と顚顚骨乳樣部との接合を後頭乳樣縫合と云ふ。

第三十三圖  
頭蓋縫合



蝶鱗樣縫合と云ひ大翼と前頭骨との接合を蝴蝶前頭縫合と云ふ。

百會 或は 顛門

初生兒に在りては骨の發育未だ完備せざるを以て顛頂骨の四隅

その他骨との接合すべき處に空隙を存し單に柔軟なる結締組織のみに由りて被はれ内部にある大脳動脈枝の脈波を視或は觸るゝここを得べし之を名けて百會又は顛門と稱す其漸次發育するに従ひ次第に狭少し遂に閉鎖するに至る。

後頭骨と兩顛頂骨との間に存する小なるものを後頭百會又は小顛門と云ふ。

前頭骨と兩顛頂骨との間に存する大なるものを前頭百會又は大顛門と云ふ。

顛頂骨の前下隅に存するものを蝴蝶百會と云ふ。  
顛頂骨の後下隅に存するものを乳樣百會と云ふ。

○頭蓋頂と頭蓋底との區別

頭蓋頂は前頭骨・顱頂骨及び後頭骨より成り、内外の二面をなす。外面は數多の縫合を有すれども、穹隆滑澤なり。而して前部を前額と名け、上眼窠縁を以て顔面と境し、後部を後頭と云ひ、其左右の上項線を以て下境となし、頭蓋底を境界せり。側部を顱顱面と稱し、顱顱線に由りて上界をなし、最高部を顱頂と云ふ。



内面は凹陥して略ぼ滑澤なり。此面を以て頭蓋腔に向ひ、腦の上部を掩ふ。頭蓋底は前頭骨・後頭骨・蝴蝶骨・篩骨及び顱顱骨より成り、亦内外の二面をなす。内面即ち上面は陥凹にして腦の

基底を支ふ、故に腦髓下面の形状に従ひ階段状をなし、前中後の三窩を呈す。而して最高位の窩を前頭蓋窩と云び、大脳の前葉を受容し、交通孔數個あり。中央を中頭蓋窩と云ひ、大脳の顱顱葉を受容し、又交通後數個を有す。最底位の深大なる窩は後頭蓋窩にして、其中央の一大孔を大孔頭孔と名け、其他に交通孔數個を存す。外面は凹凸不等甚だし、且つ複雑なり。而して前部は顔面頭蓋の所領となる。

○顔面頭蓋の腔窩

眼窠は顔面の上部、鼻根の兩側に位し、形は四側錐體にして、一大深窩を呈す。其構造は前頭骨・上顎骨・顱骨・淚骨・蝴蝶骨・篩骨及び口蓋骨の七骨より成り、視器を藏する處となる。

鼻腔は顔面の中央にして两眼窠の下方、口腔の上方にある一大深洞なり。上部は嗅官器を藏し、下部は呼吸器の一部となる。而して鼻軟骨は骨格の鼻部を補ひ以て外鼻を形成す。口腔は鼻腔の直下にありて、其形状は下顎骨の運動に依りて變化す。而して内に味官器を藏し、又消化器の一部をなす。顚顚窩は頭蓋兩側部の淺窩にして、顚顚筋の起始部なり。其下部を下顚顚窩と云ふ。翼狀口蓋窩は上顎骨の後部と蝴蝶骨翼狀突起と口蓋骨鉛直部との間にある狹隘なる不齊の小窩にして、下眼窠破裂に由りて眼窠と交通すべし。

### 第二 四肢骨

四肢骨は固有の四肢骨と之を軀幹に連鎖する四肢帶とに區別す。

#### 甲 上肢骨

上肢骨は上肢帶及び固有上肢骨を云ふ。

#### イ 上肢帶

上肢帶或は肩胛帶は鎖骨及び肩胛骨の二骨よりなる。

#### (一) 鎖骨

鎖骨は胸廓前側の上部にありて地平の位置を取り、前頸部の下境

圖五十三第



をなす處の管狀骨にして、形狀はS字狀に彎曲し、肩胛骨と胸骨との連鎖をなす。之を區別して一體兩端とす。體は圓柱形にして、上面は直ちに皮下にあり、下面は第一肋骨と相對し、一淺溝を有す。鎖骨下筋の附着部にして、之を鎖骨下溝と云ふ。

内端は肥厚して關節面を具へ、胸骨の鎖骨截痕と關節す。而して其下面の小結節を肋骨結節と云ふ。外端は扁平にして上下の二面をなし、末端の關節面と肩胛骨の肩峰突起の末端と相關節す。

(二) 肩胛骨

肩胛骨は胸廓後上方の兩側にあり、而して上は第二肋骨、下は第七肋骨の高さに位し、形狀は不等邊三角形にして、扁平廣濶なり。鎖骨及び上膊骨と連接す。之を區別して二面三縁三隅とす。前面は陷凹にして、肋骨に向ふ、之を肩胛下窩と云ふ。

圖六十三第

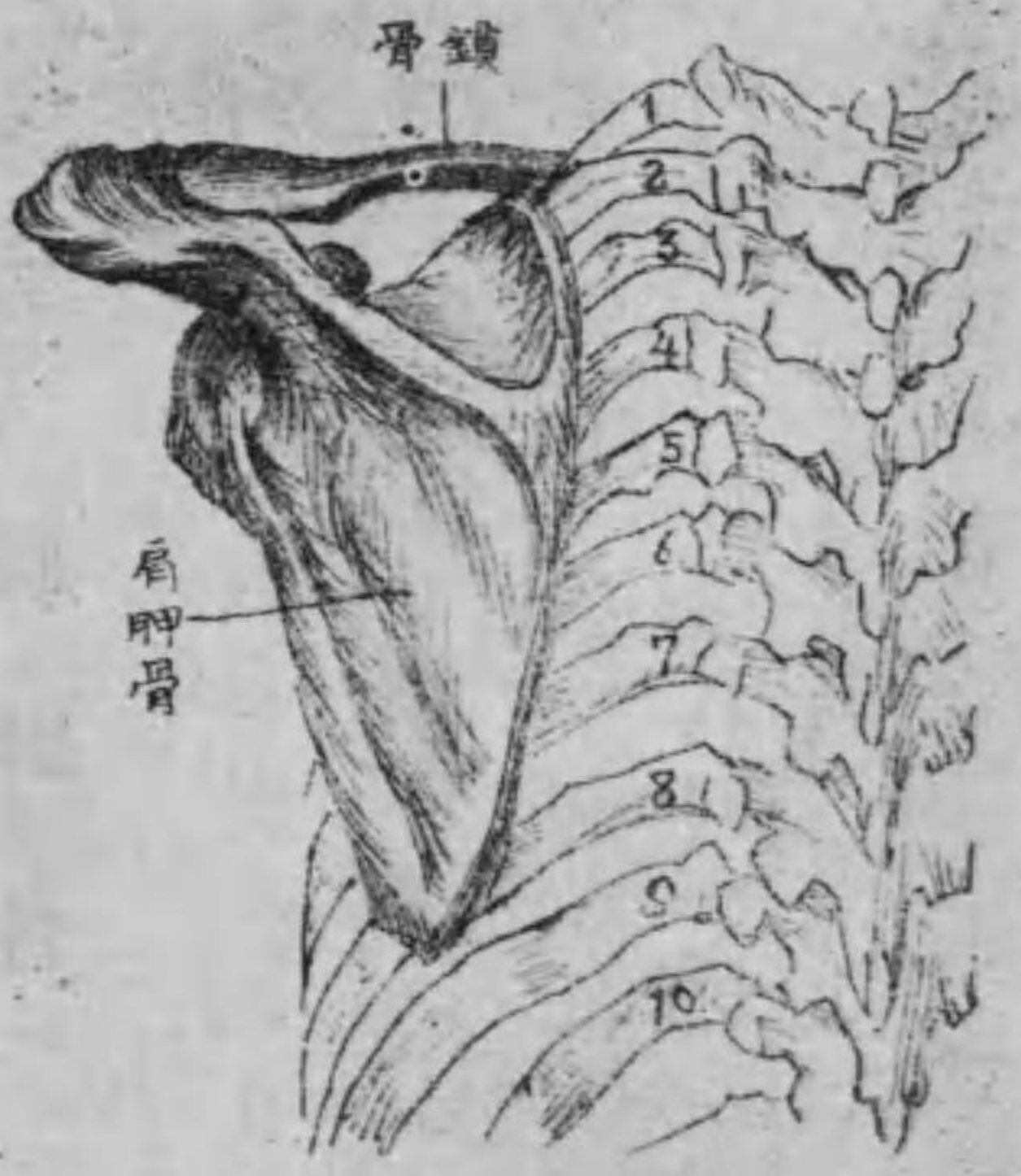


後面は上部に横徑の隆起あり、肩胛棘と名け、之に由りて上下の二窩に分たる、即ち上

小部を棘上窩と云ひ下部を棘下窩と云ふ。而して肩胛棘端は上方に突出す之を肩峰突起と稱し鎖骨の外端に联接す。上縁は最短にして薄く外端は強厚の突起あり之を烏喙突起と云ひ其内側の截痕を肩胛截痕と云ふ。外縁は内縁よりも短くして肥厚し内縁は基底と稱し最も長くして稍や弓形をなせり。

第三十七圖

後方ヨリ見ルタ肩胛骨



上外隅は外方に向つて卵圓形の關節面あり關節窩と稱し上膊骨と關節する處にして此窩の上下縁に結節あり窩上結節及び窩

下結節と稱し筋の起始部なり。又關節窩と肩峰突起との間に一截痕あり之を頸截痕と云ふ。

固有上肢骨

固有上肢骨は上膊骨・前膊骨・尺骨及び橈骨・手骨・腕骨・掌骨及び指骨とす。

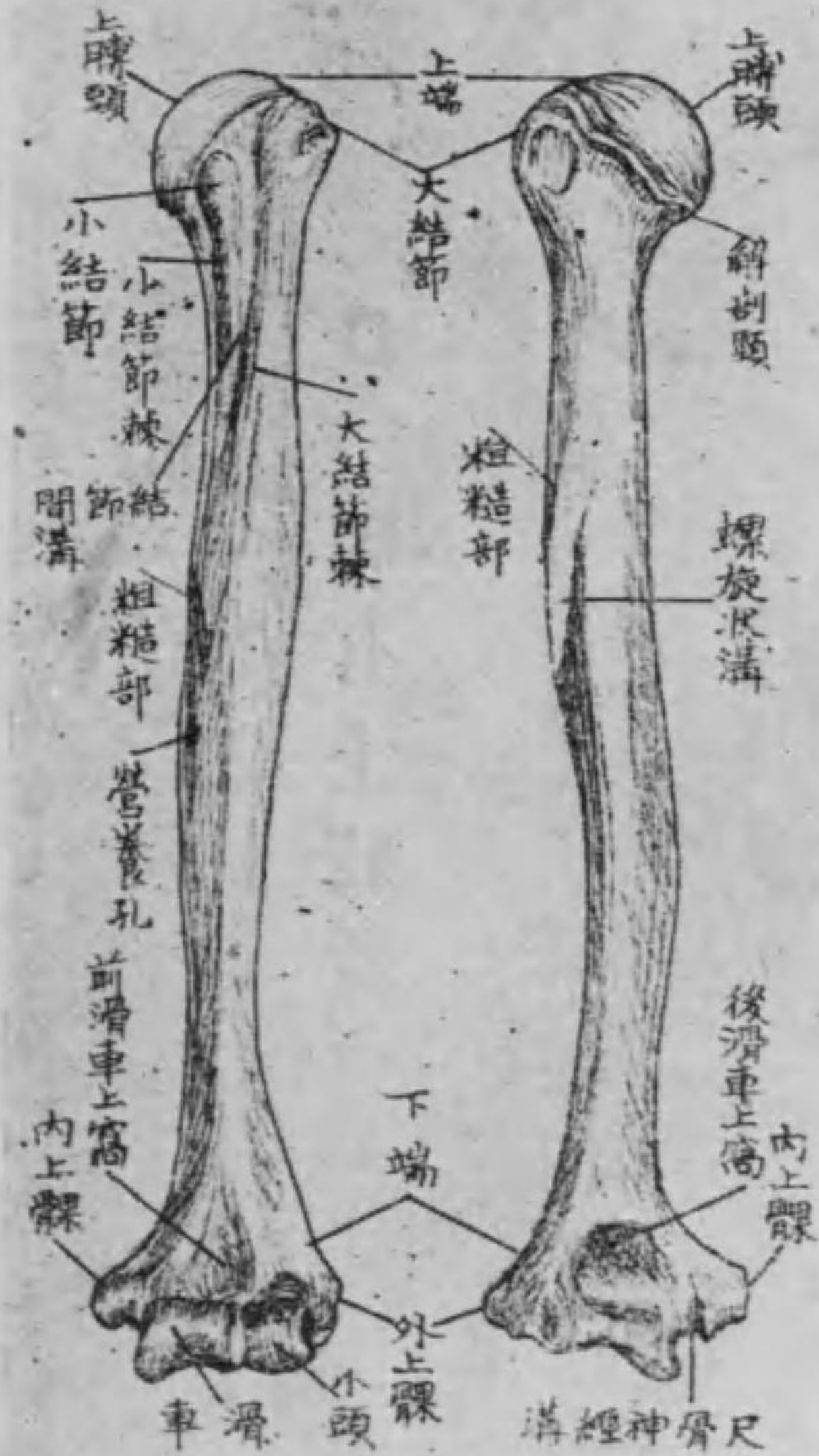
(一) 上膊骨

上膊骨は胸廓の側部にして肩胛骨と前膊骨との間にある管狀の長骨なり。之を區別して一體兩端とす。上端は膨大して半球形をなし上内方に向ひて肩胛骨の關節窩と關節す之を上膊頭と云ふ。頭の周圍は少しく狹隘す之を解剖頸と



名く又頭の前方の結節を小結節前外方の結節を大結節と稱し、共に筋の起始地にして、此兩結節の間は溝をなす、之を結節間溝と云ひ、二頭膊筋長頭の腱を通す。體は上部稍や圓柱なれども、下部に至るに従ひ次第に三角形をなす。而して上部は大及び小結節棘あり、又外面は中央の上部に著し

第三十八圖  
左上方膊骨



き粗嚙面を呈す、之を上膊結節と云ひ、後面の中央には螺旋狀に外下方に向つて走る淺き大溝あり、螺旋狀溝、或は、尺骨神經溝と稱し

橈骨神經の通ずる處なり。

下端は稍や扁平にして側方に擴張し内外二個の突起あり、即ち外方にありて頭狀をなすを小頭と名けて、橈骨と關節し、内方にありて滑車形をなすを滑車と稱し、尺骨と關節す。而して滑車の前後に深窩あり、前窩を前滑車上窩、又は冠狀窩と云ひ、後窩を後滑車上窩、又は鶯嘴窩と云ふ。又滑車の兩側に結節あり、内方のものを内上髁、外方のものを外上髁と名け、内上髁の後面には尺骨神經を通ずる尺骨神經溝あり。

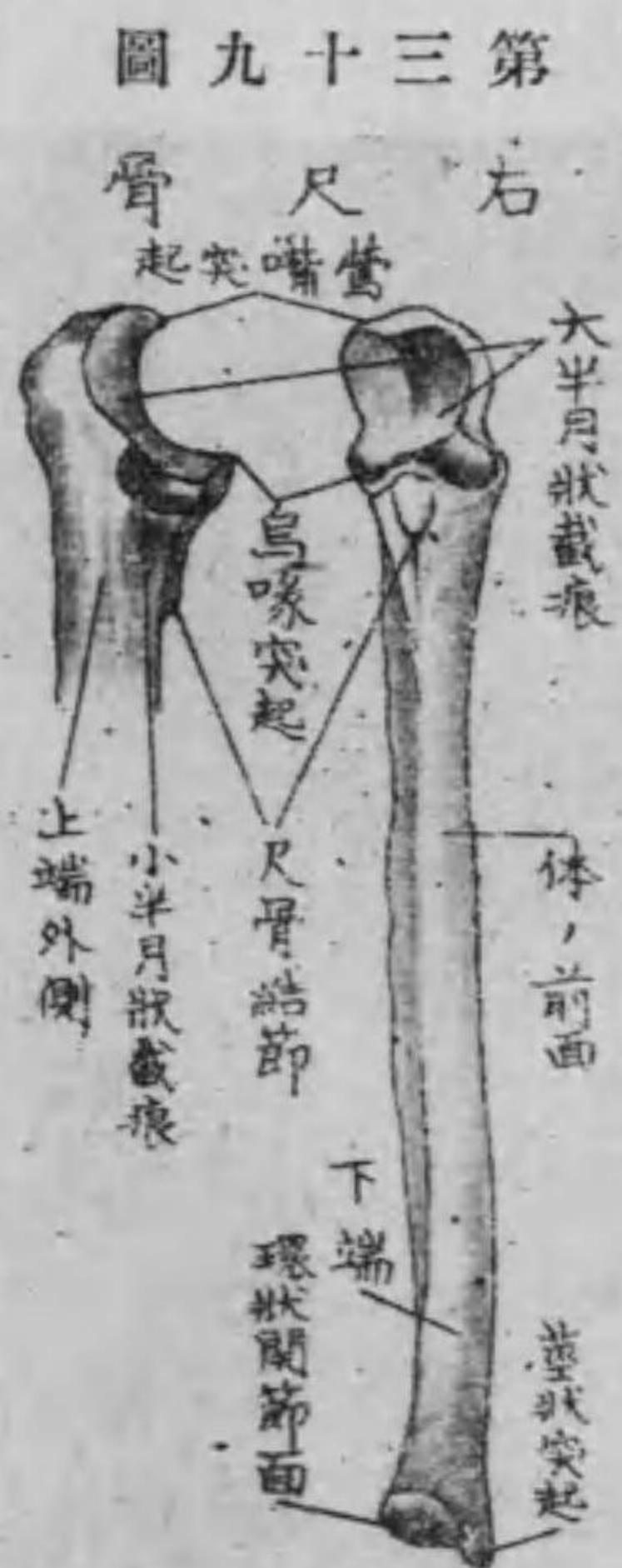
(二) 前膊骨

前膊骨は二個の長骨より成り、其内側に在るを尺骨と云ひ、外側に在るを橈骨と云ふ。

# 1 尺骨

尺骨は前膊の小指側に位し、其形状は管状にして長し、而して上膊骨・橈骨及び腕骨と联接す。之を區別して一體・兩端とす。

上端は肥厚して前面に大なる截痕あり、之を大半月状截痕と名く、即ち上膊骨の滑車と關節する處にして、上下二個の突起を出す。其上方のものを鶯嘴突起と名け、下方のものを烏喙突起と名く、而して其下際に一粗糙部あり、尺骨・關節と云ふ。又烏喙突起の外側に截痕を呈す、之を小半月状截痕と稱し、橈骨小頭と關節す。



第三十九圖 右 尺骨

體は三角形にして下端に赴くに從ひ狹少となり、僅かに前面に彎曲し、前面の上方に榮養孔を現はす。

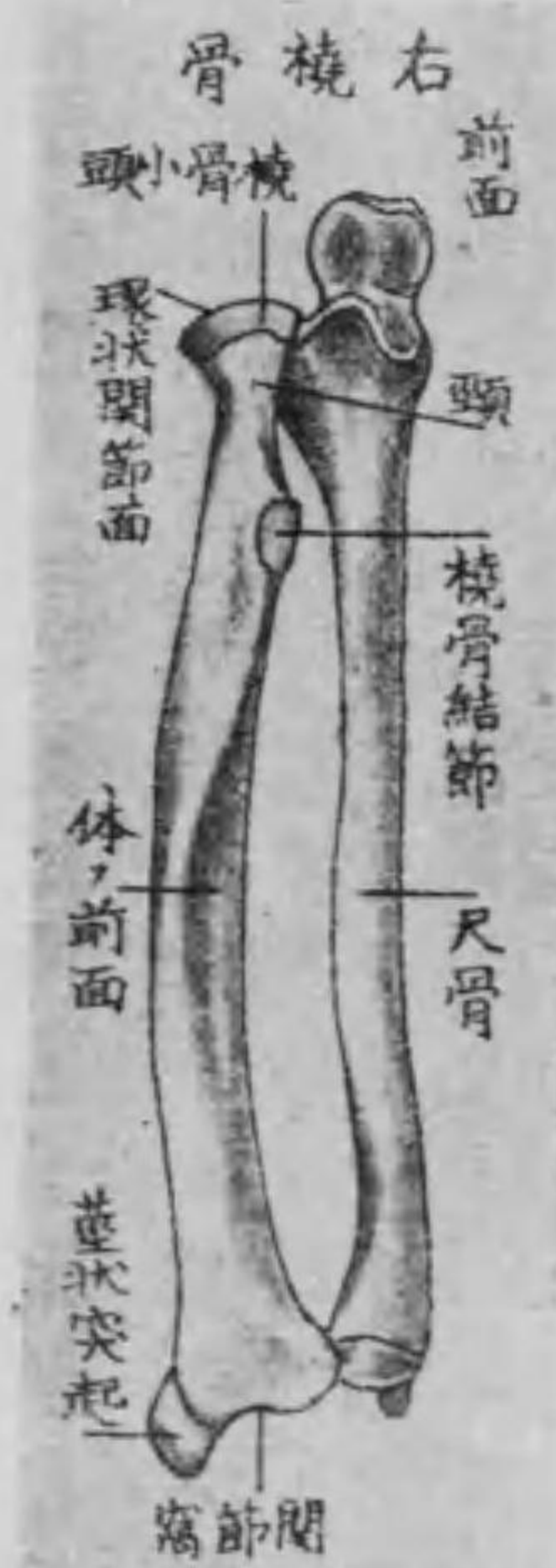
下端は少しく膨大す、之を小頭と云ふ。其下面は三角軟骨に依りて間接に腕骨と關節し、其外側の關節面は環状關節面と名け、橈骨下端と關節す。又頭より下方に向つて短少の突起を出せり、之を莖状突起と稱す。

# 2 橈骨

橈骨は前膊の拇指側に位し、其形状は管状にして長く、少しく弓状を呈し、上膊骨・尺骨及び腕骨と联接す。之を一體・兩端に區別す。

上端は少しく膨大す、之を橈骨小頭と名け、末端の圓形陷凹なる關節面を以て上膊骨下端の小頭と關節し、其周縁にある輪状の關節

第十四圖



體は其横断面稍や三角にして其内隅殊に鋭利なり之を骨間櫛と云ふ。前面には營養孔あり。

下端は強く膨大し、末端に陥凹なる三角形の關節面あり、之を關節窩と稱し、腕骨の舟状骨と半月骨とに關節す。其内側の截痕を半月状截痕と云ひ、尺骨下端の環状關節面と關節する處にして、更に其下方に突出せる突起を莖状突起と稱す。

(三) 手骨

手骨は手根を形成せる八個の腕骨と、手掌を成せる五個の掌骨と、細長なる十四個の指骨より成る。

1 腕骨

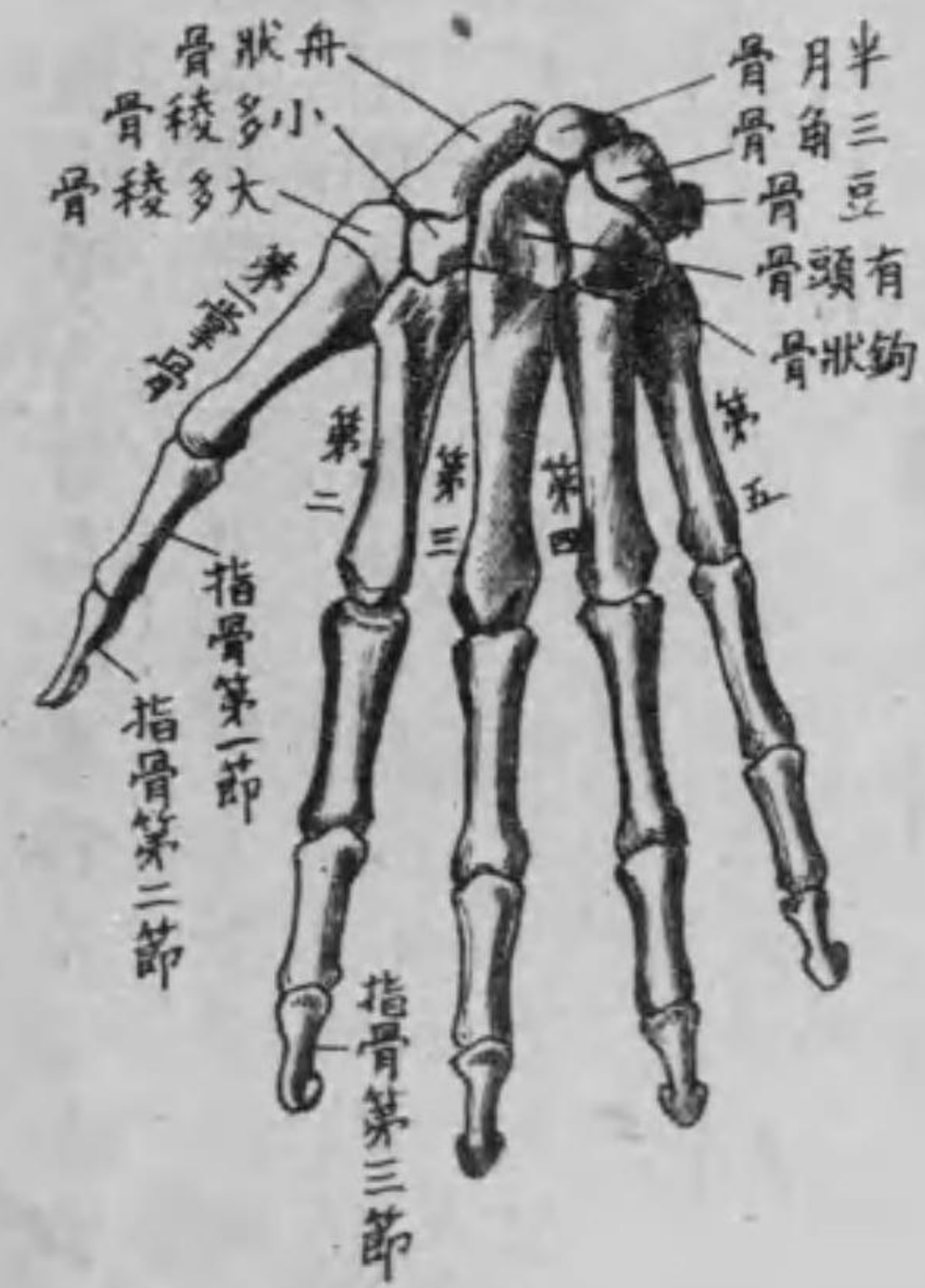
腕骨は前膊の下端に位し、八個の短骨上下二列に排列し、以て手根を形成す。而して各骨共に其形は骰子形を呈し、联接は八個相互と前膊骨と掌骨となり、之を上下の二列に區別す。

上列を拇指側より數ふれば舟状骨・半月骨・三角骨及び豆骨にして、下列も同じく拇指側より數ふれば大多稜骨・小多稜骨・有頭骨及び鈎状骨なり。

2 掌骨

圖一十四第

骨手左



下列之關節し下端は指骨の基底之關節す。又骨幹は細小となり各骨幹間に間隙を生ず之を骨間腔と云ふ。而して之を稱するには拇指側より小指側に向つて次第に第一掌骨第二掌骨第三掌骨第四掌骨第五掌骨と數ふ。

掌骨は手掌を形成せる小なる長骨にして其數五個あり。連接は腕骨の下列之指骨の基底にして之を區別して一體兩端とす。上端及び下端は共に膨大し。上端は腕骨の

又第一掌骨下端の兩側には種子骨を有せり。

3 指骨

指骨は掌骨の下部にして、即ち指節をなすものなり。其數十四個あり。而して特り拇指は二節なれども、他の四指は各三節を有す。各指を名けて、拇指(大指)・食指(示指)・中指・無名指(環指)及び小指と稱す。

乙 下肢骨

下肢骨は下肢帶及び固有下肢骨を云ふ。

イ 下肢帶

下肢帶或は骨盤帶は左右の無名骨より成る。

(一) 無名骨 或は臑骨

無名骨は軀幹の下部にありて薦骨の左右に位し骨盤の大部を形成す。形状は扁平不齊にして其联接は薦骨大腿骨及び左右同名骨相互の接合なり。之を區別して腸骨坐骨及び耻骨の三骨とす。而して三骨相結合する處外側に深大なる窩をなす。之を髌臼と云ふ。大腿骨頭を受容するの窩なり。

1 腸骨

腸骨は無名骨の大部を占め最も擴張す。之を一體一翼とす。體は頗る強厚にして髌臼の上部を助成す。翼は體より後上部に出でたる扁平なる部にして二面三縁を有す。

内面は前上部凹陥にして滑澤なり。之を腸骨窩と云ひ其後部に大なる關節面あり。耳状面と名け薦骨の耳状面と關節す。外面は稍や凹凸して二個の粗線を現はす。即ち前臀線後臀線と稱へ筋の起始部なり。

圖二十四第



上縁は弓形にして長く且つ肥厚す之を腸骨櫛と云ふ前縁は短且つ不等にして二個の鈍突起を呈す其上を腸骨前上棘下を腸骨前下棘と云ふ後縁も亦二個の鈍突起を呈す其上を腸骨後上棘下を腸骨後下棘と名く。

2 坐骨

坐骨は無名骨の後下部にして肥厚せる部を體と稱し二枝を具ふ。體は髌白の後下部を成し其後縁は腸骨後縁の一系にして下部は一の棘に終る之を坐骨棘と云ひ坐骨棘の上下に各一個の截痕あり甲を大坐骨截痕乙を小坐骨截痕と名く而して體の後下方に連れるは上枝にして其下端に大なる粗縷部あり之を坐骨結節と云ひ此坐骨結節より前方に向ふを下枝と名け耻骨の下枝と癒合す。

3 耻骨

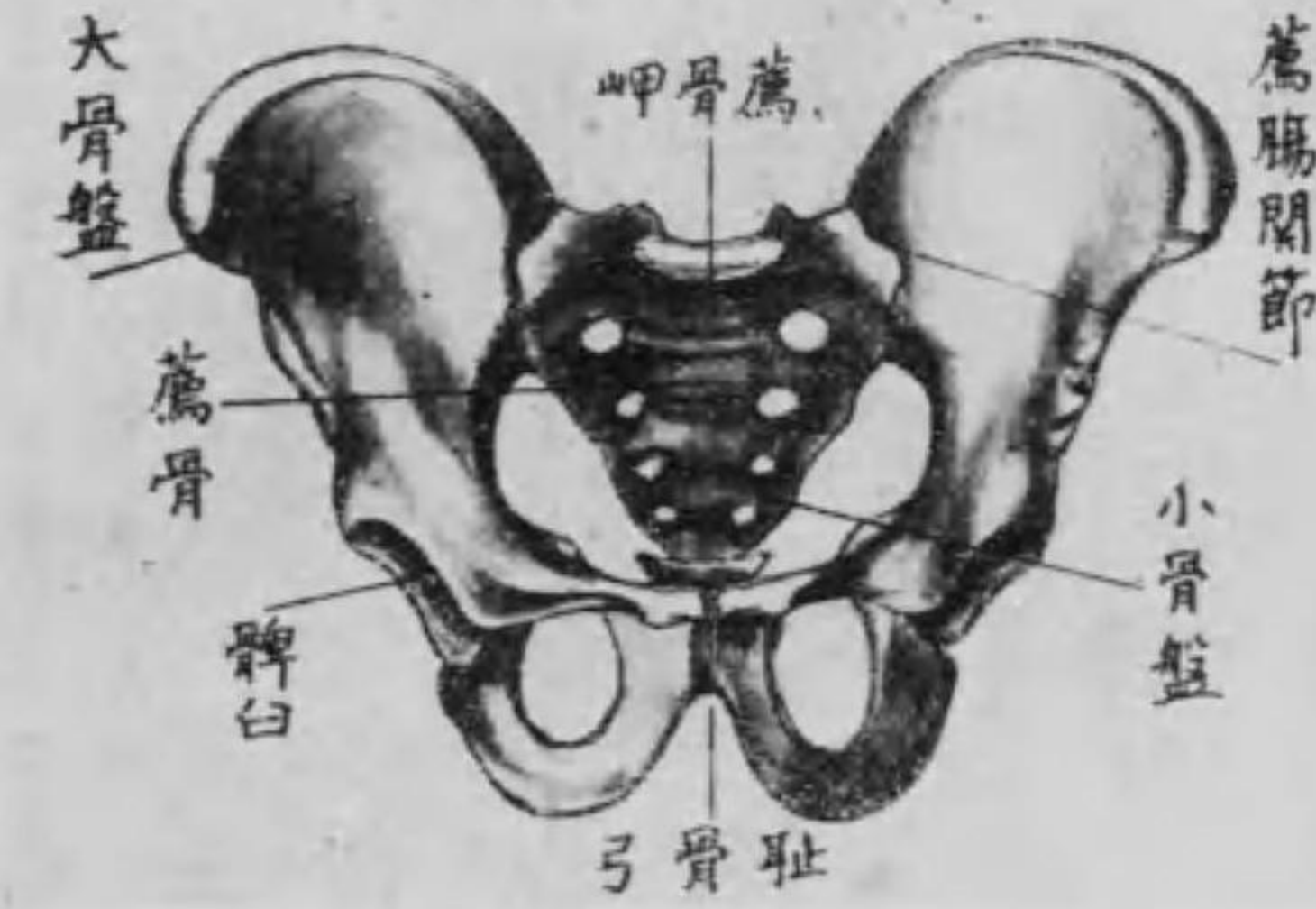
耻骨は無名骨の前下部を占めて最小部を構成し一體二枝を具ふ。體は強厚にして髌白の前下部を成す上枝は體の前方に連れる部にして前端に近く一結節あり耻骨結節と云ひ其前端は對側の耻骨と合して耻骨軟骨接合或は耻骨縫隙を構成する處の接合面を有し下枝は之より後下方に走りて坐骨の下枝と癒合す。又無名骨には閉鎖孔と名くる三角形の一大孔あり耻骨坐骨の上下兩枝に由りて構成せられ閉鎖膜を以て閉鎖せらる。

○ 髌白

髌白は無名骨の外面に於ける半球形の深窩にして腸骨坐骨及び

圖三十四第

面前盤骨男



耻骨の癒合に由りて構成せられ其周縁は隆起せり之を脾白縁と云ひ下部は僅かに缺如す之を脾白截痕と云ふ而して脾白の中心は著しく陥凹す之を白窩と名く。

○ 骨 盤

骨盤は軀幹の最下部にして左右の無名骨第五腰椎薦骨及び尾閼骨の相結合したる骨腔の一装置にして形状は稍や漏斗状なり之を區別して大骨盤及び小骨盤とす。大骨盤は後壁は第五腰椎薦骨翼にして側壁は左右の腸骨窩なり。

前壁は開放す。小骨盤は其内を骨盤腔と云ひ後壁は薦骨尾閼骨にして側壁は坐骨及び腸骨の一小部なり。前壁は耻骨及び耻骨軟骨接合にして頗る短かし而して小骨盤の上口は圓くして大なれども下口は不齊形にして小なり。

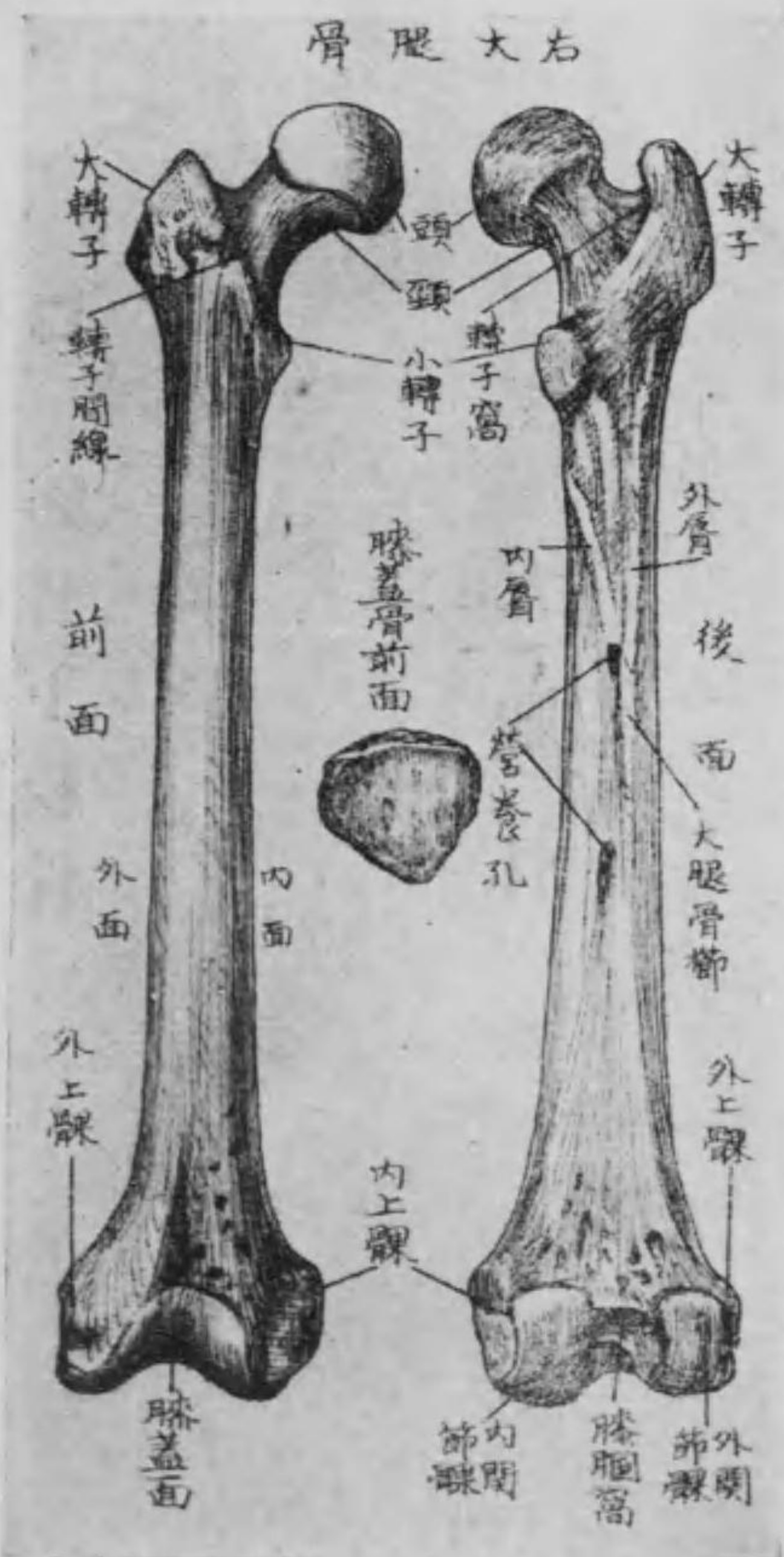
□ 固有下肢骨

固有下肢骨は大腿骨下腿骨脛骨腓骨及び膝蓋骨足骨跗骨蹠骨及び趾骨とす。

(一) 大腿骨

大腿骨は身體中最大なる管状骨にして大腿部にあり其联接は無名骨脛骨及び膝蓋骨なり之を區別して一體兩端とす。

第四十四圖



其頭の下際に狭き部あり之を頸と云ふ此外側に上方へ向へる大突起あり大轉子と名け同内部の陥凹部を轉子窩と云ふ又頸の下部に鈍突起ありて内後方に向ふ之を小轉子と名く而して大轉子と小轉子との間は前後共に一の隆線に由りて互に結合せらる之

上端は斜めに内上方に向つて突出せる圓形の關節頭あり之を大腿骨頭と云ひ髀白に筈入す

を前及び後轉子間線と稱す。體は前方に向つて少しく弓形を成し後隅は粗糙の櫛を露はす之を大腿骨櫛と稱し之を内外の兩唇に分つ即ち外唇は大轉子の續きにして其下端は外上髁に連り内唇は小轉子の續きにして其下端は内上髁に連る而して體は後面の中央に一の榮養孔を有す。下端は頗る膨大して扁平方形を呈し兩側に滑澤なる突起を生ず其内側にあるを内關節髁と云ひ外側にあるを外關節髁と稱す。前方は内外關節髁相結合して淺窩を呈す之を膝蓋窩と名け膝蓋骨と關節す又後面にも深大なる窩あり之を膝窩或は髁間窩と名く而して關節髁の兩側に於て各一個の關節を現はす其内側のものを内上髁と云ひ外側のものを外上髁と云ふ共に筋の起始部なり。



(二) 下腿骨

下腿骨は大腿骨の下端に連続せる二個の長骨及び一個の扁骨より成る。

1 膝蓋骨

膝蓋骨は膝關節の前側に於て、四頭股筋の腱中にある扁平栗子状の一種子骨と看做すべきものにして、前面は豐隆粗糙なり。後面は滑澤にして内外の小凹關節面を以て、大腿骨下端の膝蓋窩と相應容して關節す。

2 脛骨

脛骨は下脚の内側にあり、腓骨と相並び以て下脚を形成す。其形状は稍や三角柱形にして、大腿骨の下端と腓骨及び距骨とに联接す。之を區別して一體兩端とす。上端は粗糙にして甚だ膨大し、殊に側方に擴張して其末端に二個の關節面を現はす。之を内及び外關節髁と名け、大腿骨の内及び外關節髁と關節す。而して内及び外關節髁の間にある小隆起を髁間隆起と云ふ。又外關節髁の後下方に小關節面あり、腓骨關節面と名け、腓骨の上端と關節す。體は内外後の三側に於て三稜形を呈し、其内面は平滑にして前隅と共に直に皮下にあり、而して外面は稍や凹滑にして、後面は凸滑なり。但し前隅は之を脛骨櫛と云ひ、其上端に鈍結節あり、是れ即ち脛骨結節にして、膝蓋靱帯の附着部なり。

第四十五圖



を内踝と稱し直ちに皮下にあり。又脛骨關節窩の外側には截痕あり、腓骨截痕と名け腓骨の下端と聯接す。

### 3 腓骨

腓骨は下脚の外側に在りて脛骨と相併ぶ處の三角柱狀の極めて細長なる骨にして、脛骨及び距骨に聯接す。之を一體兩端に區別す。

下端は少しく膨大して其末端に關節面を有し距骨と關節す。之を脛骨關節窩と云ふ。其内側の下方に突起あり、之

上端は腓骨小頭と稱し、稍や膨大す。其末端の關節面は腓骨關節面と名け、脛骨の腓骨關節面と接合す。

體は三角稜柱形にして、殊に内面脛骨に向ふ處長くして銳利なる一線を現はす。之を骨間櫛と云ふ。

下端も亦稍や肥大す。之を外踝と稱し、少しく下方に延長し直ちに皮下にあり。内側は關節面を備へて距骨と關節す。

### (三) 足骨

足骨は手骨と稍や均しく七個の跗骨と五個の蹠骨と十四個の趾骨とより形成せらる。

### 1 跗骨

跗骨は下腿の前下部にして七個の短骨を以て足根を形成す。其形状は不齊短小にして概ね骰子形なり。联接は七個相互に接合し、下腿骨及び蹠骨と關節す。之を區別して前後の二列となす。

後列は跟骨及び距骨なり。前列は五個にして之を蹠趾側より數ふれば舟狀骨第一楔狀骨第二楔狀骨第三楔狀骨及び骰子骨なり。而して其前端は各蹠骨の後端と联接す。

第四十六圖



### 2 蹠骨

蹠骨は跗骨と趾骨との間に位せる五個の小管狀骨にして少しく弓形を帯び、

手の掌骨よりも堅く接合す。之を稱するには蹠趾側より第一蹠骨第二蹠骨第三蹠骨第四蹠骨第五蹠骨と云ひ其前端は各趾骨と接合し、後端は第一乃至第三楔狀骨及び骰子骨と連接し、各々骨間腔を現はす。

第一蹠骨には其前端の下際に二個の種子骨を有す。

### 3 趾骨

趾骨は蹠骨の前部にありて指骨と同じく第一乃至第五趾骨と稱す。其數十四個にして各一小長骨なり。且つ指骨の如く關節すれども各節甚だ短かくして蹠趾は二節より成り他は皆三節より成る。後端は蹠骨と關節し、前端は次節と關節す。而して其末端は粗糙なる縁を以て終る。

## 第二 靱帶學

靱帶學は主に關節の構成に必要な靱帶に就て論ずるものにして、先づ始めに關節の種別を知らざる可からず。

### 甲 不動關節

不動關節は之を分ちて縫合及び接合の二とす。

(一)縫合　こは鋸齒狀縫合又は鱗狀縫合等の如く、幽微の軟骨質を以て不等の骨縁互に結合し、少しも移動すること能はざるものを云ふ。例へば頭蓋諸骨に於ける縫合の如し。

(二)接合　こは他組織の骨間に介在するに由りて成るものにして、

其著しきものを軟骨接合とす。彼の耻骨軟骨接合の如き、若くは脊柱の如き骨間に厚き軟骨を存し、平等の骨面互に接合して、少しく移動するを得るもの即ち是れなり。

### 乙 可動關節

可動關節は之を造るに與かる骨の數に依り、二骨より成るもの即ち單關節及び三骨以上より成るもの即ち複關節に區別し、其運動する軸の數に依り、又一軸性關節・二軸性關節及び三軸性關節に區別す。更に又其形狀に依り、左の六種に區別す。而して關節を造る骨端は通常一方は凸面を呈し、他方は凹面を呈するものにして、前者を關節頭と云ひ、後者を關節窩と云ふ。共に關節軟骨に由り被はるるものなり。

(一) 全動關節 此は關節頭は球狀關節窩は球窩を爲し上下左右廻轉等何れの方角にも自由に運動を営み得べき肩胛關節又は股關節の如きを云ふ故に運動軸の數より云へば三軸性關節に屬す。

(二) 鞍狀關節 此は關節を爲せる兩骨端の鞍背狀をなすものにして兩骨端が恰かも鞍背と鞍背とを交叉して相接したるが如き狀をなし第一掌骨と腕骨との關節の如く屈伸及び内外兩轉の作用をなすものを云ふ故に運動軸の數より云へば二軸性關節に屬す。

(三) 髁狀關節 此は鞍狀關節の作用と稍や同一なるも關節の形狀大に異り關節頭は橢圓狀を爲し關節窩は之に一致して陷凹せる下顎關節又は後頭載域關節の如きを云ふ故に運動軸の數より云へば同じく二軸性關節に屬す。

(四) 蝶番關節 此は關節頭は其骨の縱軸と直角を爲せる圓柱の一

第四十七圖



部をなし、關節窩は之に一致して陥凹し、唯だ屈伸のみの用を司る處の肘關節又は指關節の如きを云ふ。故に運動軸の數より云へば一軸性關節に屬す。

(五)車軸關節　こは圓柱狀を爲せる關節頭と同じく圓柱狀なる關節窩の相關節せる、第二頸椎の齒狀突起と第一頸椎との關節又は橈骨と尺骨との關節の如く、一軸に沿ふて廻旋するものを云ふ。故に運動軸の數より云へば一軸性關節に屬す。

(六)叢合關節　こは其關節面の平坦又は平坦に近き腕骨、跗骨の如き、微弱の運動を營むものを云ふ。

○ 靱 帶

靱帶は其質強靱の纖維様結締組織より成る處の膜質にして、白色

圖八十四第



の光輝を有し、最も彈力に富む。多くは一骨より起り他骨に跨りて、兩骨の連繫を維持し兼ねて其滑脱を豫防し、又は骨間に緊張して血管、神經を通ずる孔裂を形成するものなり。之を分ちて三種とす。  
(一)囊狀靱帶　は可動關節に於て一骨の骨膜より直に他骨の骨膜に延展し關節をして一の囊腔(關節腔)となすものにして、内面の滑液膜を被ひ此膜より常に黄色を帯びたる僅少の濃厚液を分泌す、之を滑液と稱し、關節面を滑かならしめ相互の摩擦を防ぎ、恰かも

運轉せる機械に油を注ぐが如し、而して滑液膜の内面には絨毛或は皺襞を有するものなり。

(二)副靭帶 は囊狀靭帶の外面或は内面に在りて一骨より他骨に巨り、囊狀靭帶を補助し益々關節を固定するものを云ふ。

(三)固有靭帶 は一骨の孔或は截痕に緊張して茲に裂孔を形成するものにして、多く血管・神経の通路となり、敢へて他骨に跨らざるものを云ふ。

總て骨格のある處必ず靭帶ありて骨格の聯結をなし茲に人體の基礎を構成す。而して各部位に依り一々其名稱を附す。雖も吾人鍼灸家には多大の必要を認めざるを以て、唯だ其總論のみを記載することせり。讀者諸氏之を諒せよ。

### 第三 筋 學

#### 第一章 筋學總論

筋は通俗單に「肉」と稱へ、身體の運動を掌る處の要具にして、之に隨意筋及び不隨意筋の二種あり。

隨意筋即ち横紋筋は赤色微細の肉絲(即ち原纖維)の結束たる筋纖維が更に集合して一束となりたるものにして、斯くの如く筋纖維の漸次集合して出來たる横紋筋は更に又膜を以て被包せられて、軀幹の周壁及び四肢等渾身の軟部を形成し、能く神経の刺戟又は意識の作用に由りて自働性に自由に伸縮し、骨をして百般の動作を爲さしむるものなり。而して筋の兩端は大抵白色の固き索の如

第九十四圖 筋纖維及細胞



きものより成り、主として骨に附着せしむる媒介をなすものあり、之を腱と云ひ、其廣きものを腱膜と云ふ。  
不随意筋即ち平滑筋は

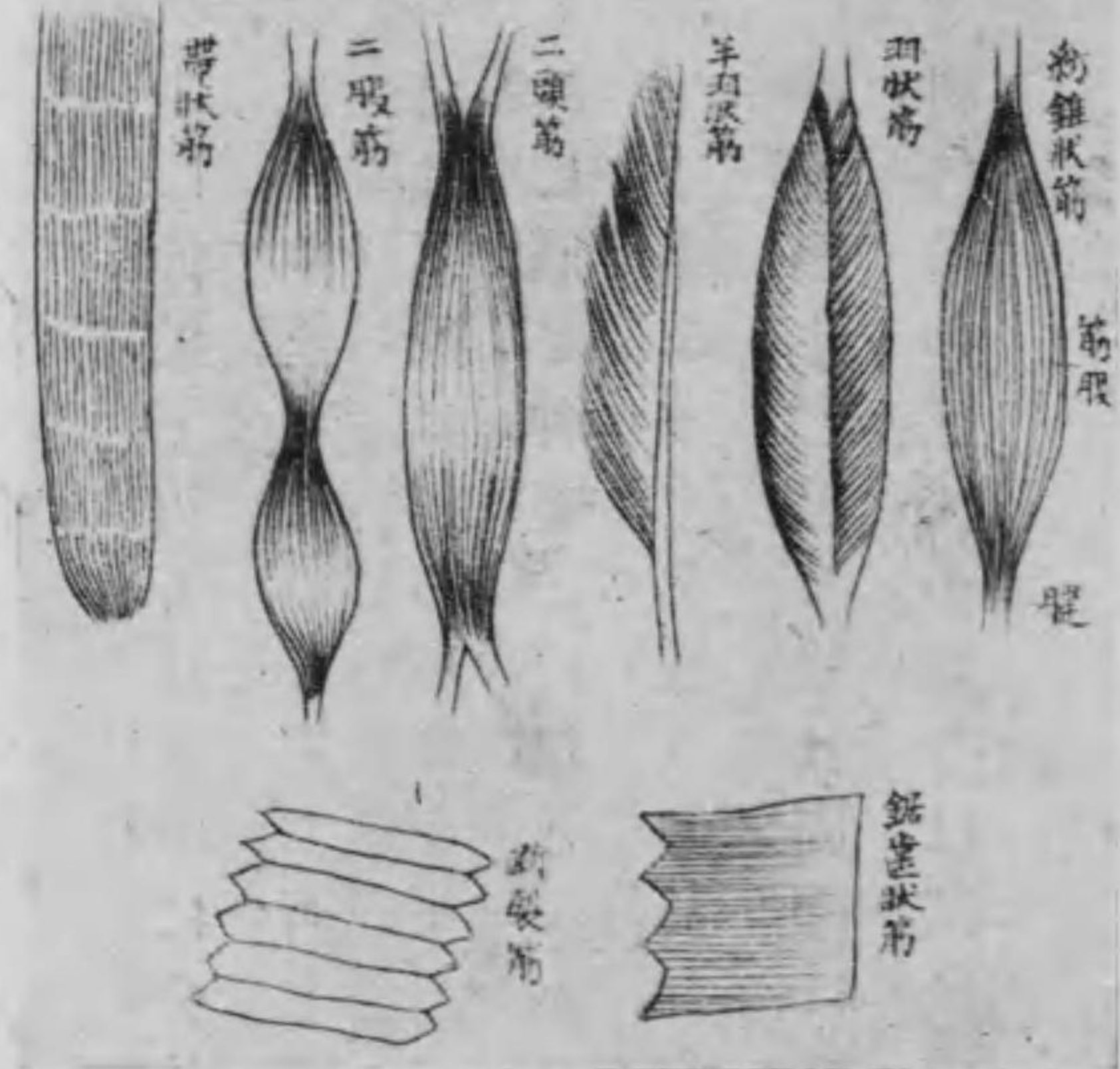
其構造横紋筋と全く異なり、従つて随意筋に反し、意志の作用に由りて自由に伸縮し能はざるものにして、自動性諸器官の壁即ち内臓・血管等に存在し、其壁を構成するものなり。但し心臓の筋肉は横紋筋なるも全く意志に隨はざる特殊例外のものなり。

○筋の起始・停止及び形状

筋も亦骨の如く長短廣の三種ありて、其形に従ひ羽状筋、半羽状筋、鋸齒状筋、断裂筋及び二頭筋或は三頭筋、又は二腹或は數腹筋と名け、皆必ず一骨より起り、一或は數關節に跨るものにして、其一端即ち起始を頭と云ひ、他端即ち停止を尾と云ふ。又頭尾の間を

第十五圖

筋ノ形状



筋腹と名く。

○筋膜



筋膜は筋の外面或は筋層間を被ふところの強き結締組織膜にして、之を以て淺深數層に分つものなり。

○ 筋と神経との關係

筋の自由に伸縮し得るは其中に分佈せる神経に由りて導かれたる刺戟に由り起るものにして、若し神経の破壊せらるゝ時は此神経の分佈せる筋は忽ち麻痺を來して萎縮し、遂には消失するに至るべし。故に筋と神経とは離るべからざる關係を有するものにして、又胎生學上より之を観るも甚だ密接なる關係を有す、即ち先づ始めに神経を生じ、然る後其周圍に筋肉を發生するものなり。依つて筋と神経との關係を知るは鍼治の應用上最も必要なるものとす。

第二章 筋學各論

第一 軀幹筋

全身の筋を大別して軀幹筋及び四肢筋とす。而して軀幹筋を更に背筋、腹筋、胸筋、頸筋及び頭蓋筋に分つ。

甲 背筋

背筋とは軀幹の後壁に位せる諸筋の總稱にして、之を分ちて淺層及び深層の二とす。

イ 淺層諸筋

(一) 僧帽筋 (副神經分佈す)

僧帽筋は三角形の大筋にして後頭骨上項線の内部項靱帯及び全胸椎の棘状突起より起始し鎖骨の外端・肩峰突起及び肩胛棘に停止せり其作用は肩胛骨及び鎖骨の外端を後上方に揚げ肩胛骨の

基底を脊柱に向つて接近せしむ。

但し項靱帯とは全頸椎の棘状突起間より後頭骨の外後頭楯に三角形をなして緊張せる膜状の靱帯を云ふ。

第五十一圖



(二) 潤背筋 (肩胛下神経分佈す)

潤背筋は三角形をなし第八以下の胸椎棘状突起・腰背筋膜・膈骨・櫛の後部及び終末の三肋骨より起始して上膊骨の小結節棘に停止せり其作用は上膊骨を後内方に引き且つ下撃す。

(三) 菱形筋 (肩胛背神経分佈す)

菱形筋は斜方形にして項靱帯の下部第七頸椎乃至第四胸椎の棘状突起より起始し外下方に走りて肩胛骨内縁に停止せり其作用は肩胛骨を脊柱に向つて内上方に引く。

(四) 後上鋸筋 (背椎神經の後枝及び肩胛背神経分佈す)

後上鋸筋は扁平方形にして菱形筋の下層にあり。第七頸椎乃至第三胸椎の棘状突起より起始し、四個の肉齒を以て外下方に向ひ。第二乃至第五肋骨隅に停止せり。其作用は肋骨を上舉し、即ち吸氣の補助をなす。

(五) 後下鋸筋 (背椎神經の後枝分佈す)

後下鋸筋は同じく方形にして腰背筋膜より起始し、外上方に向ひ。終末の四個肋骨に停止せり。其作用は肋骨を牽下し、呼氣の補助をなす。

(六) 夾板筋 (大後頭神經分佈す)

夾板筋は素と二個の筋(頭夾板筋、項夾板筋)互に接着したるものにして、長方形

第五十五圖 背筋深層



項線の外部及び上三個頸椎の横突起に停止せり。其作用は兩側同時に收縮するときは頭を頸と共に後方に伸展せしめ、偏側の働きなるときは唯だ頭及び頸を廻旋せしむ。

口 深層諸筋

長背筋

(一) 薦骨脊柱筋 (脊椎神經の後枝分佈す)

薦骨脊柱筋は殆んど鉛直に位し、薦骨の後面・腸骨・腰椎の棘状突起及び腰背筋膜の前葉等より起始し、脊柱に沿行して上方に進み、全肋骨隅全横突起及び顛顛骨乳嘴突起の後縁に停止せり。其作用は主として脊柱を伸展す。

尙ほ此筋は内外の二部に分ち、更に部位に従ひ外部を腰腸筋、背腸筋及び項腸筋とし、内部も又部位に従ひ背長筋、項長筋及び頭長筋に分つ。

(二) 棘筋 (頸及び背椎神經の後枝分佈す)

棘筋は背長筋の内部に位し、背椎の棘状突起より起始して上方に

上り、二三上位の棘状突起に停止せり。其作用は脊柱を側方に屈す。但し此筋は部位により分ちて頸部にあるを項棘筋、背部にあるを背棘筋とす。

(三) 横棘筋 (背及び腰椎神經の後枝分佈す)

横棘筋は連続したる數筋の總稱にして、其纖維を以て脊柱の横突起より起始し、斜に内上方に走り、三四の椎骨を越へて、或は直に上位の棘状突起に停止せり。其作用は脊柱を伸展し、且つ廻旋を營む。但し此筋は第一層半棘筋、第二層斷裂筋、第三層旋背筋の三層に分つ。

短背筋

短背筋は屈伸椎に屬するもの、後頭骨及び廻旋椎に屬するもの、この二に分つ。

○ 屈伸椎に屬するもの (三筋あり)

(一) 横突起間筋

(頸及び腰椎神經の後枝分佈す)

横突起間筋は各横突起の間に亘り其作用は脊柱を側方に屈す。

但し頸部に於ては横突起の尖端分れたるにより従つて前後の二部に分れ腰部に於ては副突起と乳嘴突起とにより内外に分る而して胸部に於ては缺損す。

(二) 棘間筋 (同上)

棘間筋は小且つ短にして各棘状突起の間にあり其作用は脊柱を伸展す。

但し胸部に於ては缺損すべし。

(三) 肋骨舉筋 (背椎神經の後枝分佈す)

肋骨舉筋は多數の扁平小筋にして胸椎横突起の尖端より起始し斜めに下方に走りて肋骨隅の下縁に停止せり其作用は肋骨を上擧し吸氣の用をなす。

○ 後頭骨及び廻旋椎に屬するもの (五筋あり)

(一) 後大直頭筋 (第一頸椎神經の後枝分佈す)

後大直頭筋は長三角形の小筋にして第二頸椎の棘状突起より起始し外上方に走りて後頭骨の下項線に停止せり其作用は頭蓋を後方に牽く。

(二) 後小直頭筋 (同上)

後小直頭筋は同じく小長三角形にして、後大直頭筋の下層にあり。第一頸椎後弓の後結節より起始し、下項線の下部に停止せり。其作用は頭蓋を後方に牽く。

(三) 下斜頭筋 (同上)

下斜頭筋は稍や紡錘形に近く、第二頸椎の棘状突起より起始して斜めに外方に走り、第一頸椎の横突起に停止せり。其作用は頭蓋を廻旋す。

(四) 上斜頭筋 (同上)

第五十三圖

背筋深層



り起始し、内上方に走りて下項線の上部に停止せり。其作用は頭蓋を廻旋す。

(五) 側直頭筋 (同上)

側直頭筋は小方形にして第一頸椎の横突起より起始し、上走して

上斜頭筋は長三角形にして第一頸椎の横突起より

後頭骨の頸靜脈突起に停止せり。其作用は頭蓋を側方に傾けしむ。

○ 腰背筋膜

腰背筋膜は強き筋膜にして前後の二葉より成り、後は薦骨及び腰椎の棘状突起に附着し、前は腰椎横突起に附着し、共に癒合して薦骨脊柱筋の下部即ち起始と固く連合し、以て筋の起始地と成る。

乙 腹筋

腹筋とは腹腔の前部と側壁とに縦横斜に緊張せる處の肉壁を云ふものにして、之を分ちて縦横の二種とす。而して縦筋には二筋、横筋には三筋あり。就中横筋は皆扁平筋にして前腹正中線の近くに至れば腱膜となり、其正中線に於て劍状突起より耻骨軟骨接合に

達する縦線を生ず、之を白條と云ふ。

イ 縦筋

(一) 直腹筋

(第七乃至第十二肋間神経、腸骨下腹及び腸骨鼠蹊神経分佈す)

直腹筋は長き三角形の數腹筋にして、二三の肉尖を以て第五乃至第七肋軟骨の前面に起始し、内縁は白條に接し、下端は下方に向ひて耻骨の上縁及び耻骨軟骨接合の前面に停止せり。其作用は前腹壁を短縮す。

(二) 三稜腹筋 (腸骨下腹神経分佈す)

三稜腹筋は長三角形の一小筋なり。直腹筋下部の前面にありて耻

骨の上縁より起始し上方に向ひて白條の下部に停止せり。其作用は白條を緊張す。

### □ 横筋

#### (一) 外斜腹筋

(第七乃至第十二肋間神経、腸骨下腹及び腸骨鼠蹊神経分佈す)

外斜腹筋は方形にして下七個の肋骨外面より七個の肉尖を以て起始し、内下方に向ひて白條耻骨結節及び腸骨前上棘に停止せり。其作用は腹腔を壓縮す。

#### (二) 内斜腹筋 (同上)

内斜腹筋は方形にして外斜腹筋の下にあり。プーバルト氏靱帯の

第五十四圖



後半部及び腸骨櫛の前部より起始し、前上方に向ひ扇状に分散して下三四の肋骨と白條に停止せり。其作用は腹腔を壓縮す。

#### (三) 横腹筋 (同上)

横腹筋は四方形にして内斜腹筋の下層にあり。腰背筋膜、腸骨櫛下六個の肋軟骨内面より起始し、對側に向つて白條に停止せり。其作用は腹腔を壓縮す。



○フルバルト氏靱帶

フルバルト氏靱帶は一名鼠蹊靱帶と名け外斜腹筋の下縁より出來たるものにして腸骨前上棘より耻骨結節の間に緊張せるものなり而して此内端耻骨の上縁に附着したる部をギンベルナート氏靱帶と云ふ。

○股輪

股輪はフルバルト氏靱帶内端の下際と耻骨との間に在り動靜脈を通じヘルニヤ症を來すの部なり。

○鼠蹊管

鼠蹊管は股輪の上内部にあり腹筋の全層を穿通して成る膜管にして男子は精系女子は子宮圓靱帶を通ず而して其内孔を内鼠蹊輪外孔を外鼠蹊輪と云ふ是れ鼠蹊ヘルニヤ症を來すの部なり。但し精系とは輸精管内精系動靜脈及び精系神經叢を總稱するものなり。

○横隔膜 (上頸叢の分枝横隔膜神經分佈す)

横隔膜は腹腔と胸腔とを分隔せる膜様の筋にして呼吸筋の主位を占む形ち圓天井の如く上面は穹隆にして周縁殊に後方は低し而して胸廓下口の周縁より起始し後部は殊に強厚の臆にして右は第四左は第三腰椎體より起り第一腰椎の部位に至り左右結合して一の裂孔を作る之を大動脈裂孔と稱す更に其前部に食管裂孔を造り周圍より集合して中心の臆質部に停止せり臆質部正中

第五十五圖



の稍や右側に一孔あり、下大静脈孔と云ふ。其作用は胸腔を擴張して吸氣を營ましめ、同時に腹腔を狭めて其内容を壓す。

丙 胸筋

胸筋とは胸廓の前壁と側壁とを覆ふ處の肉壁を云ふものにして、之を分ちて淺層及び深層の二とす。

イ 淺層 (四筋あり)

(一) 大胸筋 (前胸廓神経分佈す)

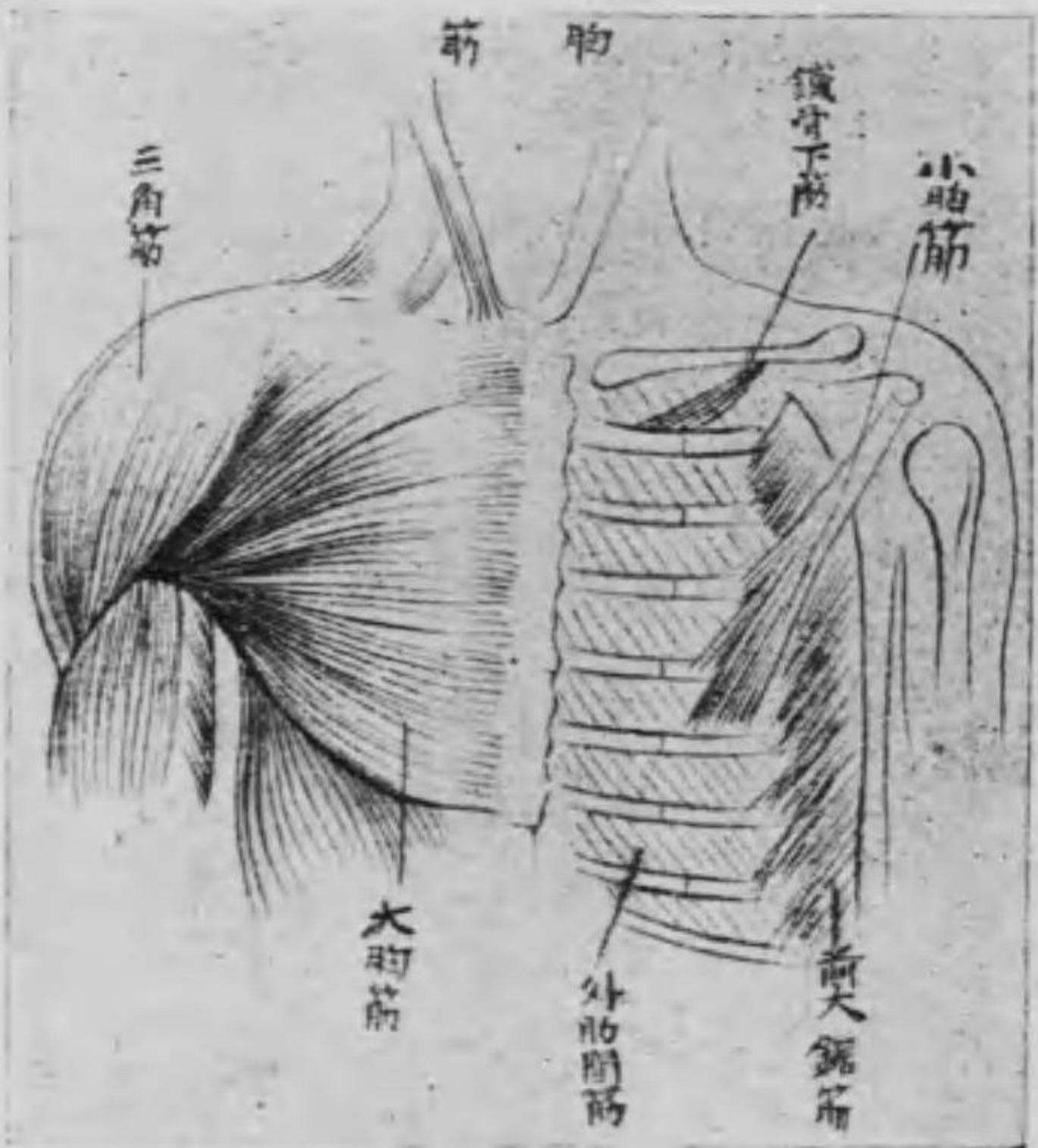
大胸筋は三角形をなし鎖骨の内端、胸骨并に上六個肋軟骨の前面及び外斜腹筋の腱膜より起始し、外端集合して狭少し、上膊骨の大

結節棘に停止せり。其作用は上膊を前内方に引く。

(二) 小胸筋 (同上)

小胸筋は大胸筋の下層にあり、長三角形にして第三乃至第五肋骨の前端より起始し、外上方に上りて肩胛骨の烏喙突起に停止せり。

第五十六圖



其作用は肩胛骨を前下方に引く。

(三) 鎖骨下筋 (鎖骨下神経分佈す)

鎖骨下筋は小長三角形にして第一肋骨より起始し上外方に走りて鎖骨體の下面に停止せり其作用は胸鎖關節を固定せしむ。

(四) 前大鋸筋 (後胸廓神経分佈す)

前大鋸筋(又前鋸筋)は不齊方形にして胸廓の側壁を覆ひ、九個の肉齒を以て上九個の肋骨より起始し側壁を後方へ廻りて肩胛骨の基底に停止せり其作用は肩胛骨を前方に引く。

口 深層 (四筋あり)

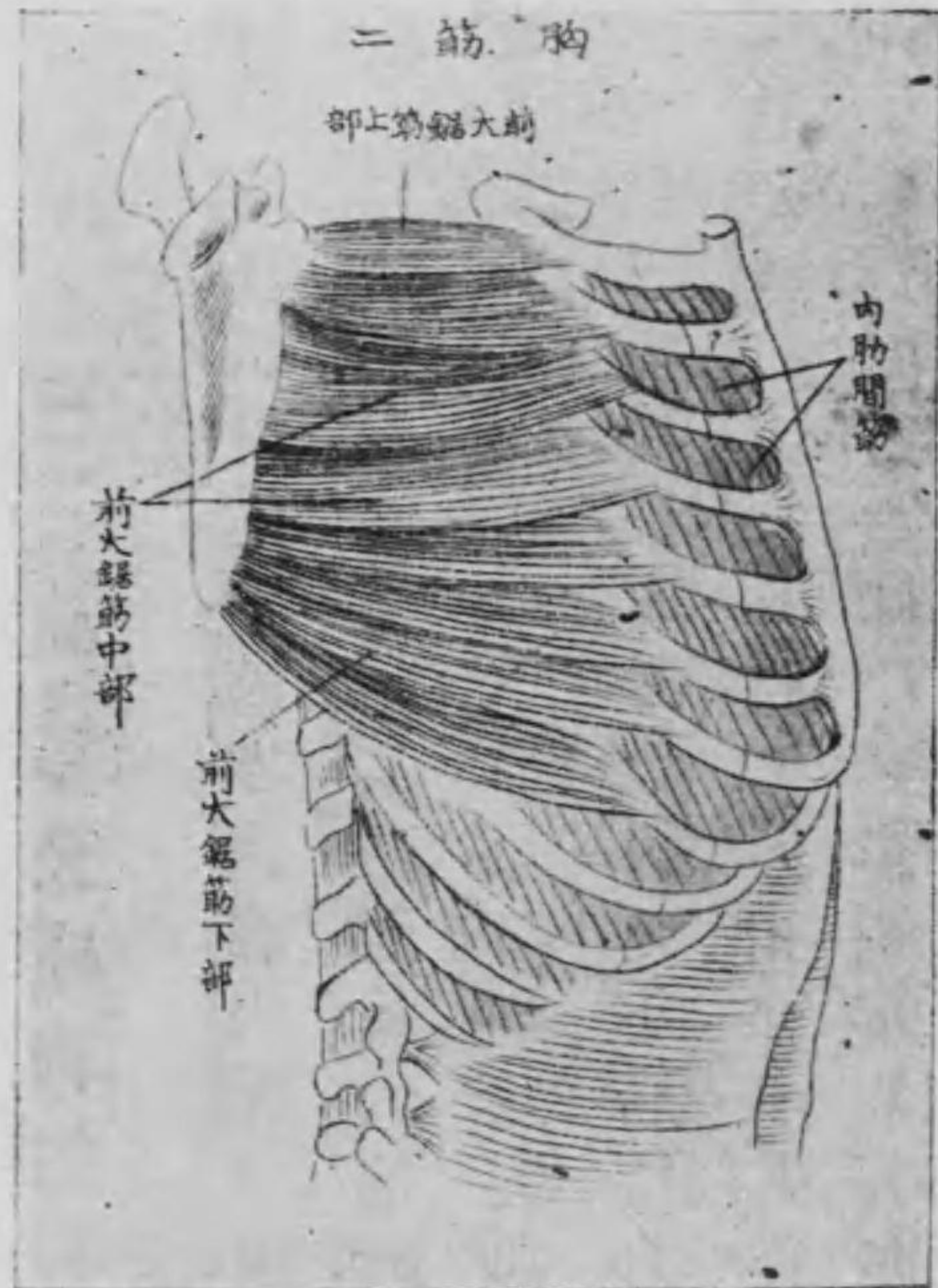
(一) 内及び外肋間筋 (肋間神経分佈す)

内肋間筋及び外肋間筋は肋間腔の内側に緊張せる二種の筋にして内肋間筋の後縁は肋骨隅に達し前縁は胸骨縁に達す外肋間筋の後縁は肋骨結節に達し前縁は肋骨前端に達す其作用は内肋間筋は肋骨を牽下し外肋間筋は舉上す故に内肋間筋は呼氣の用をなし外肋間筋は吸氣の用をなすものなり。

第五十七圖

胸筋二

前大鋸筋上部



(二) 前及び後横胸筋 (同上)

前横胸筋及び後横胸筋は胸廓内面の前後の壁に緊張せる二種の筋にして前横胸筋は第二乃至第六肋軟骨より起始し斜に内下方に走りて胸骨側縁の下部及び劍狀突起に停止し後横胸筋は脊柱兩側の肋骨内面にある數對の小筋にして肋骨隅より起始し一或は二肋を斜に上方へ跨り停止せり其作用は前横胸筋は肋軟骨を下撃して呼氣を補助し後横胸筋は外肋間筋と共に吸氣を補助す。

丁 頸筋

頸筋とは頸の前側側部及び脊柱の前方に位せる諸筋の總稱にして之を分ちて淺層深層の二になし更に淺層を長筋短筋に分ち深

層を又内列外列に分つ。

イ 淺層長筋 (三筋あり)

(一) 潤頸筋 (上頸皮下神経分佈す)

潤頸筋は薄き方形の皮下筋にして第一肋骨に對し胸筋膜より起始して内上方に昇り下顎骨の下縁及び耳下腺咬筋膜に停止せり其作用は頸の外皮を緊張す。

(二) 胸鎖乳嘴筋 (副神經及び頸椎神經の胸鎖乳嘴筋枝分佈す)

胸鎖乳嘴筋は長方形にして潤頸筋の下層にあり二頭を以て胸骨の劍柄及び鎖骨の内端より起始して斜めに外上方に昇り乳嘴突

起の外面に停止せり。其作用は頭蓋を前進し、且つ一側の働きに於ては顔面を對側に向けしむ。

(三) 二腹顎筋 (前腹には顎舌神經後腹には莖狀神經分佈す)

二腹顎筋は圓き紡錘狀の二腹筋にして腹間腱に連り後腹は顛顎骨の乳嘴截痕より起始し、内方に走りて舌骨に附着し、前腹はそれより上方に昇りて下顎骨の二腹筋窩に停止せり。其作用は舌骨を上舉し、或は下顎を下掣す。

第五十八圖



□ 淺層短筋

頭蓋より舌骨に來るものを舌骨上筋と稱し、三筋あり。

(一) 莖狀舌骨筋 (莖狀神經分佈す)

莖狀舌骨筋は細長の筋にして顛顎骨の莖狀突起より起始し、前下方に走りて舌骨に停止せり。其作用は舌骨を後上方に引く。

(二) 顎舌骨筋 (顎舌神經分佈す)

顎舌骨筋は扁平三角筋にして内縁は中央に於て癒合す。此筋は下顎骨の内斜線より起始して舌骨體の前面に停止せり。其作用は舌骨及び舌を上舉す。

(三) 頤舌骨筋 (舌下神經の分枝分佈す)

頤舌骨筋は紡錘形にして顎舌骨筋の上にあり。下顎骨の頤棘より起始し、後下方に亘りて舌骨體に停止せり、而して内縁は相接着す。其作用は舌骨を上擧す。

ハ 淺層短筋

胸廓の上部より舌骨に來るものを舌骨下筋と稱し、四筋あり。

(一) 胸骨舌骨筋 (舌下神經の下行枝分佈す)

胸骨舌骨筋は扁平長方形にして胸骨の劍柄及び胸鎖關節の内面より起始し、上方に昇り、舌骨體に停止せり。其作用は舌骨を下擧す。

(二) 胸骨甲状筋 (同上)

胸骨甲状筋は同じく扁平長方形にして胸骨の劍柄及び上一二肋軟骨の内面より起始し、胸骨舌骨筋の下層を昇りて甲状軟骨の斜線に停止せり。其作用は甲状軟骨を下擧す。

(三) 甲状舌骨筋 (舌下神經の甲状舌骨筋枝分佈す)

甲状舌骨筋は扁平方形にして甲状軟骨の斜線より起始し、上方に向ひて舌骨に停止せり。其作用は舌骨を下擧す。

(四) 肩胛舌骨筋 (舌下神經の下行枝分佈す)

肩胛舌骨筋は細長の二腹筋にして腹間臑を有し、肩胛骨の上縁及

び上横靱帯より起始し、弓形に内上方に進み、舌骨體に停止せり。其作用は舌骨を下撃す。

但し上横靱帯は肩胛骨の肩胛截痕に緊張して孔を造り、血管神經を通ずる者なり。

二 深層 (七筋あり)

外列 (即ち頸椎の前側に四筋を有す)

(一) 前斜角筋 (下頸叢の分枝分佈す)

前斜角筋は稍や三角形にして三四の肉齒を以て下三四の頸椎横突起より起始し、外下方に走りて第一肋骨體上面の斜角結節に停止せり。其作用は肋骨を上舉し、吸氣の一助となる。

(二) 中斜角筋 (同上)

中斜角筋は前筋と均しく全頸椎の横突起より起始して外下方に走り、第一肋骨の鎖骨下動脈溝の後部に停止せり。其作用は肋骨を上舉し、吸氣の一助となる。

(三) 後斜角筋 (同上)

後斜角筋は下三四の頸椎横突起より起始し、中斜角筋の後側を下り、第二肋骨に停止せり。其作用は肋骨を上舉し、吸氣の一助となる。

(四) 肩隅舉筋 (第二乃至第五頸椎神經の分枝分佈す)

肩隅舉筋(又肩胛舉筋)は带状の筋にして、四個の肉齒を以て上四個

の頸椎横突起より起始して肩胛骨の内上隅に停止せり其作用は肩胛骨を上擧す。

内列 (三筋を有す)

(一)長頸筋 は三角形の集合したる細き筋にして全頸椎體及び上

三個胸椎の前側にあり。

(二)前大直頭筋 は長三角形

にして第五第六頸椎の横突

起と後頭骨體との間にあり。

(三)前小直頭筋 は方形の小

筋にして後頭骨體と第一頸

椎前弓との間にあり。

第五十九圖  
頸筋源層



以上三筋の作用中長頸筋は頭蓋の廻轉及び頸椎の前屈を補助し、前大及び前小直頭筋は頭蓋を前屈す。(何れも頸椎神經の後枝分佈す)

戊 頭蓋筋

頭蓋筋とは頭蓋頂及び顔面諸骨に緊張せる諸筋にして之を分ちて頭蓋頂筋及び顔面筋の二とす。

イ 頭蓋頂筋 (五筋あり)

(一) 前頭筋 (顔面神經の顳額枝分佈す)

前頭筋は方形にして上顎骨の前頭突起眉弓及び眼窠上部の外皮より起始し帽狀腱膜の前縁に停止せり其作用は帽狀腱膜を前方



に引き且つ前額の外皮を上舉す。

(二) 後頭筋 (耳後神経分佈す)

後頭筋は前頭筋の稍や小なるものにして、上項線の側部より起始し、帽状腱膜の後縁に停止せり。其作用は腱膜を後方に引く。

- (三) 耳前筋
- (四) 耳後筋
- (五) 耳上筋

耳前筋・耳後筋及び耳上筋の三筋は皆顳顎筋膜より起始し、各集合して耳軟骨の前後及び上部に停止せり。其作用も又各筋の方向に従ひ耳軟骨を前後及び上方に牽く。

但し耳後筋のみは顳顎骨の乳様部より起始して耳後神経を分佈すれども他の二筋は顔面神経の顳顎枝を分佈せるものなり。

○ 帽状腱膜

帽状腱膜は頭蓋頂の部位にあり、扁平にして頭蓋頂を恰かも帽子の如く覆ひ、外皮とは密着すれども、骨膜とは緩く結合せるが故に皮膚と共に移動す。而して前は前頭筋、後は後頭骨の上項線側部は顳顎骨の顳顎線に附着せり。

□ 顔面筋

顔面筋は甚だ複雑なる小筋なるを以て之を分ちて眼瞼筋・口裂筋・鼻筋及び咀嚼筋とす。

眼瞼筋 (二筋あり)

(一) 眼輪匠筋 (顔面神經分佈す)

眼輪匠筋(又眼瞼輪匠筋)は眼裂を圍擁したる輪狀の扁平筋にして、外皮の直下にあり。前頭骨の鼻部内眥部等より起始して上下眼窠縁を輪狀に圍繞し、上顎骨の前頭突起に停止せり。其作用は眼瞼を閉鎖し且つ内眥に向つて牽引す。

口裂筋 (八筋あり分ちて三層とす)

第一層に四筋を有す。

(二) 顴骨筋 (顔面神經分佈す)

顴骨筋(又大顴骨筋)は顴骨弓の前部より起始して内下方に走り、口

角(口輪匠筋)に停止せり。其作用は口角を後上方に牽引す。

(三) 笑筋 (同上)

笑筋は耳下腺咬筋膜より起始して内方に走り、口角に於て三角頤筋と癒合す。其作用は口角を後方に引き、壓を作る。

(三) 三角頤筋 (同上)

三角頤筋は三角形を呈して、廣く下顎骨の下縁より起始



第六十圖 頭筋及顔面筋

して外上方に集合し、同じく口角（口輪匠筋）に停止せり。其作用は口角を下方に掣す。

(四) 方形上唇筋 (同上)

方形上唇筋は方形にして上顎骨の前頭突起、下眼窠縁及び顴骨の三部より起始し、集合して鼻翼及び上唇の外皮に停止せり。其作用は鼻翼及び上唇を上舉す。

第二層に二筋を有す。

(一) 犬齒筋 (同上)

犬齒筋（又口角舉筋）は長方形にして上顎骨犬齒窩より起始し、下りて口角に停止せり。其作用は口角を上舉す。

(二) 方形頤筋 (同上)

方形頤筋は同じく方形にして下顎骨の頤部より起始し、昇りて下唇に停止せり。其作用は下唇を下掣す。

第三層に二筋を有す。

(一) 頰筋 (同上)

頰筋は長方形にして上下顎骨齒槽突起の後部より起始し、前走して口角に來り、口輪匠筋に停止せり。其作用は口裂を閉鎖す。

(二) 頤筋 (同上)

頤筋（又舉頤筋）は口輪匠筋に覆はれ、下顎骨門齒の齒槽突起より起

始し頤部の外皮に停止せり其作用は其部の外皮を上撃す。

○ 口輪匠筋 (同上)

口輪匠筋(又環口筋)は頰筋の一部延長して口裂を輪匠せるものにして、二層より成り、一は外皮に密着し、一は粘膜に連接す而して一部鉛直に延びて鼻中隔に走り同部を下撃す。

鼻筋 (二筋あり)

(一) 鼻翼下撃筋 (同上)

鼻翼下撃筋は上顎骨犬齒部の齒槽突起より起始して上走し鼻翼の側部に停止せり其作用は鼻翼を下撃す。

(二) 鼻壓縮筋 (同上)

鼻壓縮筋は上顎骨犬齒の上部より起始して鼻翼の側方を昇り鼻背及び鼻尖に至り對側のものご癒合して停止せり其作用は鼻を壓縮す。

咀嚼筋 (四筋あり)

(一) 顳顬筋 (三又神經の第三枝分佈す)

顳顬筋は團扇状にして顳顬窩の全部及び顳顬筋膜より起始して前下方に集合し顳骨弓の内面を経て下顎骨の烏喙突起に停止せり。

(三) 咬筋 (同上)

咬筋は長方形にして下顎枝の外面にあり、顴骨弓より起始して下顎隅の外面に停止せり。

(三) 外翼状筋 (同上)

外翼状筋は三角形の小筋にして、蝶骨翼状突起の外板及び大翼の顴窩部より起始して後方に集し、下顎骨髁状突起の下部に停止せり。

(四) 内翼状筋 (同上)



第六十六圖

内翼状筋は稍や方形にして上部は外翼状筋に覆はれ、蝴蝶骨翼状突起の後側より起始し、斜に下方に走り、下顎枝の内面に停止せり。以上四筋の作用は、顴筋、咬筋及び内翼状筋は下顎を上舉して上顎に向はしめ、即ち口を閉鎖せしむ。外翼状筋は髁状突起を前進せしむ。即ち一側收縮せば同側の關節頭を前進するも、他側は元位に止まるが故に、左右交々働くときは所謂白磨の運動を営ましむ。

○ 顴筋膜

顴筋膜は顴線より起り、下りて顴骨弓に附着す。其附着部は内、外二葉に分れ、其間に脂肪組織を含有す。

○ 耳下腺咬筋膜

耳下腺咬筋膜は咬筋を覆ひ延長して耳下腺を包含す。

### 第二 四肢筋

四肢筋を上肢筋及び下肢筋に區別す。

#### 甲 上肢筋

上肢筋を更に肩胛筋・上膊筋・前膊筋及び手筋に分つ。

#### イ 肩胛筋 (六筋あり)

#### (一) 三角筋 (腋窩神経分佈す)

三角筋は肩部の膨隆を形成せる三角形筋にして皮下にあり鎖骨の先端・肩胛棘及び肩峰突起より起始して下方に集合し上膊結節に停止せり其作用は上膊を上舉す。

#### (二) 棘上筋 (三) 棘下筋 (肩胛上神経分佈す)

棘上筋は肩胛骨の棘上窩棘下筋は棘下窩に三角形に緊張し共に上膊骨の大結節に停止せり其作用は棘上筋は三角筋の働きを助け棘下筋は上膊を外轉す。

#### (四) 小圓筋 (腋窩神経分佈す)

小圓筋は小圓柱形にして肩胛骨外縁より起始し棘下筋の下縁に接して上外方に走り上膊骨大結節の下部に停止せり其作用は上

膊を外轉す。

(五) 大圓筋 (肩胛下神經分佈す)

大圓筋は稍や方形に近く、肩胛骨下隅の後面より起始して外上方に走り、濶背筋と共に上膊骨の小結節棘に停止せり。其作用は上膊を後下方に引き、且つ内旋す。



(六) 肩胛下筋 (同上)

肩胛下筋は三角形にして、肩胛下窩より起始し、外上方に集合して上膊骨の小結節に停止せり。其作用は

上膊を内轉す。

□ 上膊筋

上膊筋は殆んど長筋にして、上膊骨の周圍を擁護せる筋なり。

前側 (三筋あり)

(一) 二頭膊筋 (外膊皮下神經分佈す)

二頭膊筋は肩胛骨より前膊骨に跨り、長短の二頭を有して紡錘形をなし、長頭は肩胛骨窩上結節より、短頭は烏喙突起より起始し、上膊中央に於て癒合し下りて前膊に至れば、末端腱となり、橈骨結節に停止せり。其作用は前膊を屈す。

(二) 烏喙膊筋 (同上)

烏喙膊筋は稍や紡錘形の短筋にして烏喙突起より起始し二頭膊筋短頭の後側を下りて上膊骨内面の中央に停止せり其作用は上膊を上撃す。

(三) 内膊筋 (同上)

内膊筋は厚き扁平筋にして上膊骨前面の下部より起始し下りて尺骨の尺骨結節に停止せり其作用は前膊を前屈し且つ關節囊を緊張す。

圖三十六第



後側 (二筋あり)

(一) 三頭膊筋 (橈骨神経の筋枝分佈す)

三頭膊筋は稍や紡錘形にして長内外の三頭を有し長頭は肩胛骨の窩下結節内頭は上膊骨螺旋狀溝の下部及び外頭は螺旋狀溝の上部より起始し下りて末端は總腱となり尺骨の鷹嘴突起に停止せり其作用は前膊を伸ぶ。

(二) 小肘筋 (同上)

小肘筋は三角形の小筋にして上膊骨の外上髁より起始し尺骨上端の外面に停止せり其作用は三頭膊筋を補助す。



### 八 前膊筋

前膊筋は總へて前膊を圍繞せる筋尺骨側は缺くにして淺深數層をなす之を分ちて前側屈筋後側伸筋及び橈骨側廻旋筋す。

#### 前側淺層 (五筋あり)

#### (一) 廻前圓筋 (正中神経分佈す)

廻前圓筋は長方形にして上膊骨の内上髁及び尺骨結節より起始し外下方に斜に走りて橈骨外面中央の粗糙部に停止せり其作用は前膊を廻前す。

#### (二) 内橈骨筋 (同上)

第四十六圖 前膊前側筋



内橈骨筋又橈腕屈筋は紡錘形にして上膊骨の内上髁より起始して斜めに尺骨の前側を下り長腱を以て第二掌骨の基底に停止せり其作用は手腕を屈す。

#### (三) 内尺骨筋 (尺骨神経の筋枝分佈す)

内尺骨筋又尺腕屈筋は同じく紡錘形にして上膊骨の内上髁及び尺骨の鷹嘴突起の一部より起始し尺骨の前側を下り腱延長して

豆骨に停止せり其作用は手腕を屈し且つ手腕を内轉すべし。

(四) 長掌筋 (正中神經分佈す)

長掌筋は細長の紡錘形にして、内橈骨筋と内尺骨筋との間にあり。内上髁より起始して前膊の中央を下り、細長の腱となりて手掌の腱膜に停止せり。其作用は手掌腱膜を緊張して手腕を屈す。

(五) 浅屈指筋 (同上)

浅屈指筋は長扁平筋にして前筋の下層にあり。内上髁及び橈骨の上部より起始して尺骨の前側を下り、手掌に至り、四條に分れて長腱となり、第二乃至第五指の中節に停止せり。其作用は中節を屈す。

前側深層 (三筋あり)

(一) 深屈指筋 (正中神經の深枝分佈す)

深屈指筋は紡錘形にして尺骨上部の前面及び骨間靭帯より起始し、手に向つて下り腕骨に至りて四條の腱に分裂し、浅屈指筋腱の下層となり、第二乃至第五指の第三節に停止せり。其作用は各指を屈す。

但し骨間靭帯とは尺骨と橈骨との骨間櫛に緊張せるものなり。

(二) 長屈指筋 (同上)

長屈指筋は同じく紡錘形にして内側は深屈指筋と相接し、橈骨上部の前面及び骨間靭帯より起始して拇指に向ひて長腱となり、拇指の末節に停止せり。其作用は拇指を屈す。

(三) 廻前方筋 (同上)

廻前方筋は方形にして尺骨下端の前面より起始して横に走り、橈骨下端の前面に停止せり。其作用は前腕を廻前す。

橈骨側 (三筋あり)

(一) 膊橈骨筋 (橈骨神経の深枝分佈す)

膊橈骨筋(又長廻後筋)は長三角形にして上膊骨外上髁の上側より起始して橈骨の

圖五十六第



前腕を屈し、且つ橈骨を廻後す。

(二) 長外橈骨筋 (同上)

長外橈骨筋(又長橈腕伸筋)は同じく長三角形にして上膊骨外上髁の上側より起始し、膊橈骨筋の後を下りて長き腱となり、第二掌骨基底の背面に停止せり。其作用は手腕を伸し、且つ外轉せしむ。

(三) 短外橈骨筋 (同上)

短外橈骨筋(又短橈腕伸筋)は紡錘形にして上膊骨外上髁より起始し、長外橈骨筋の後下側を下りて長き腱となり、第三掌骨基底の背面に停止せり。其作用は手腕を伸し、且つ外轉せしむ。

後側淺層 (三筋あり)

(一) 總指伸筋 (橈骨神經の深枝分佈す)

總指伸筋(又伸指筋)は扁平紡錘形にして上端は前三筋に覆はれ上  
膊骨外上髁の後面より起始して背側を下行し、四腱に分裂して第  
二乃至第五指骨の第三節に停止せり。其作用は各指を伸ぶ。

(二) 固有小指伸筋 (同上)

固有小指伸筋は細き紡錘形にして總指伸筋に接着して外上髁の  
後面より起始し、長き腱となり、同筋の第四腱と共に小指の指背腱  
膜に停止せり。其作用は第五指を伸ぶ。

(三) 外尺骨筋 (同上)

外尺骨筋(又尺腕伸筋)は紡錘形にして外上髁及び尺骨上部の後面  
より起始し、尺骨の後側を下りて第五掌骨の基底に停止せり。其作  
用は手腕を伸展す。

後側深層 (五筋あり)

(一) 廻後筋 (橈骨神經の深枝分佈す)

廻後筋(又短廻後筋)は方形にして尺骨上端の外側より起始し、外下  
方へ斜めに走りて橈骨結節の下部に停止せり。其作用は橈骨を廻  
後せしむ。